

「21世紀を担う、心豊かで創造性にあふれたエンジニア」を育成するために！

平成 18 年度

KTC授業アンケート調査結果

[報告書（抜粋）]

金沢工業高等専門学校

平成18年度KTC授業アンケート調査結果について

KTC授業アンケートは、今回で5回目の結果報告ができることとなった。

従前と異なり本年度は10月に中間アンケート調査を、2月に期末アンケート調査を実施した。

中間アンケート調査は、平成18年度初頭のFD研修において、「年度末に行うアンケート調査では効果的な活用ができないので、実施時期を検討すべきである。」との建設的な意見が出されたのを受けて、年度半ばに実施したものである。

期末アンケート調査は、前年度と同様に平成19年2月の最終授業時に実施した。

これら2回のアンケート調査結果のうち、教員個人の教科にかかわるアンケート調査結果については、担当教員に個々に配布している。

個々の教科に関するアンケートでは

1. 年度中間に実施するアンケート調査は教育改善に必要な資料を得ることができること。
2. 期末アンケート調査により、教育改善努力の成果を確認できること。

が大きな特徴であったと考える。

本報告書では、個々の授業評価にかかわる部分を割愛し、2回のアンケート調査結果の総括を冊子にしている。この総括結果、特に経年変化に関する分析結果からわかることは、学生の授業に対する興味や取り組みが好ましい傾向にあることである。その結果、授業の内容に対する要求が強くなってきていることが分かる。教員が奮起しなければならない局面が増加しつつあることである。

アンケート調査の功罪については、従来も議論されている。しかし、長期的見地に立てば、多数年のアンケート調査にかかわる学生が同一人物でない（評価の母数が増える）ことで、評価結果の確度も向上したと考えられる。したがって、アンケート調査結果については真摯に捉える必要がある。授業に対する学生の満足度は、一つの目安となろう。何故なら、学生は教師を選定できないし、加えて本校のような私学においては、いかにしてレベルを維持したまま学生が満足する授業を実施するかが、死活問題に繋がっているからである。

改善の始まりは気付きである。本校の全教職員が、アンケート調査結果の裏面にある事実や現象に気付き、より充実し満足度の高い授業への発展に努めることが肝要である。

今後とも、本校では授業アンケートを実施し、教育改善に役立てたい。

金沢工業高等専門学校
校長 山田 弘文

< 1 > 全体概略

1) 調査の目的

本調査は下記に挙げる目的に従って実施した。

- 本調査は金沢高専の学生から1年間に受けた授業に対する評価と満足度を聞き、属性による違いや過去の回答との比較などから現状を把握することを目的としている。
- 一連の分析によって得られた情報を授業の改善に有効活用し、金沢高専全体の教育改善につなげていくことが最終的な目的となる。
- 調査終了直後に作成した「速報版」は、各科目の担当教員が個別に1年間の授業の評価を振り返るためのものであり、本報告書は全体の傾向を分析し、全体的な改善の方向性を検討するためのものである。
- 平成18年度からの一年間、中間と期末で同様の調査を実施しているため、その比較にも注目する。

2) 調査の概略

H18年度の調査の概略は下記の通り。

項目	内容				
分析データ件数 対象者		H18中間調査のべ回答数	H18期末調査のべ回答数	H18期末時点在校生数	本報告書は「H18期末」のデータを中心として分析しており、H18中間以前のデータも経年変化を確認するために使用している。 また、後半の科目別分析は「H18期末」のデータによって集計を行っている。
	1年生	1,489件	1,469件	129名	
	2年生	1,589件	1,588件	125名	
	3年生	1,439件	1,572件	116名	
	4年生	2,026件	2,288件	131名	
	5年生	1,601件	1,689件	118名	
	全体合計	8,144件	8,606件	619名	
有効回答	総回収数は8,537件であったが、2つの部会にまたがる科目(2科目、回答数69件)は両方の集計に加えるためダブルカウントしている。そのため延べ回答数は8,606件となっている。 また、平成17年度までは成績データを付加して集計していたため、学生番号の未記入やデータ不備によって成績データが入っていないものは無効回答として集計からは除外していた。しかし、平成18年度の間調査から成績データを付加しないため、全てのデータを集計の対象とした。経年比較を行う関係で以前のデータに関しても成績データの有無による選別を行わないことにしたため、一部のデータで以前の報告書と数値が異なる点もある。				
対象科目	中間調査:222科目 期末調査:226科目				
実施方法	・各授業の最終日に20分程度の記入時間をとって行った。 ・調査票は学生が回収し、教員ではなく事務局に届けるものとした。 ・回答用紙はOCR形式とし、回収後即座に読み込み処理を行った。				
調査主体	学校法人 金沢工業大学				
集計	有限会社 アイ・ポイント				

3) 実施スケジュール

H18年度の調査のラフスケジュールは下記の通り。

調査種別	作業	学年	ステップ	時期	備考
中間調査	速報版作成作業	全学年	調査実施	10月2日～10月6日	
			データ入力	10月11日に完了	OCRにより処理
			速報版作成	10月11日～10月23日	
			速報版完成	10月23日	
	最終報告書作成作業		報告書作成	11月21日	
期末調査	速報版作成作業	5年生	調査実施	2月13日～2月19日	各授業の最終日に実施
			データ入力	2月20日に完了	OCRにより処理
			速報版作成	2月20日～2月27日	
			速報版完成	2月27日	
	速報版作成作業	1～4年生	調査実施	2月20日～2月26日	各授業の最終日に実施
			データ入力	3月1日に完了	OCRにより処理
			速報版作成	3月1日～3月6日	
			速報版完成	3月6日	
最終報告書作成作業	全学年	報告書作成	4月17日		

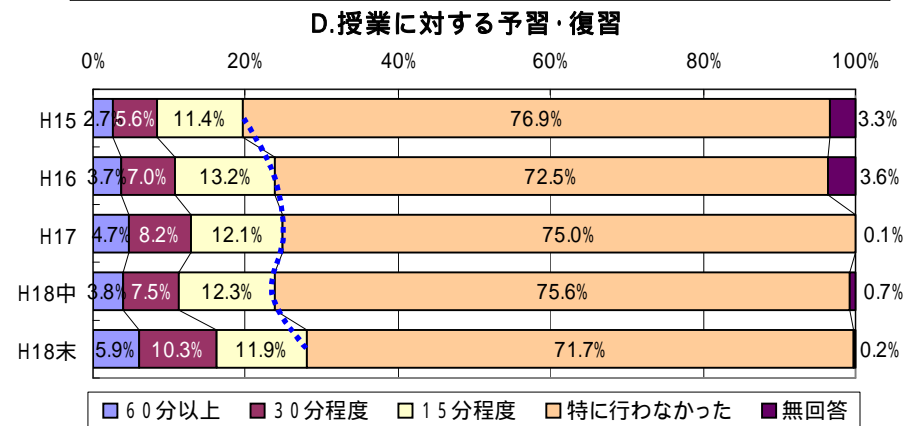
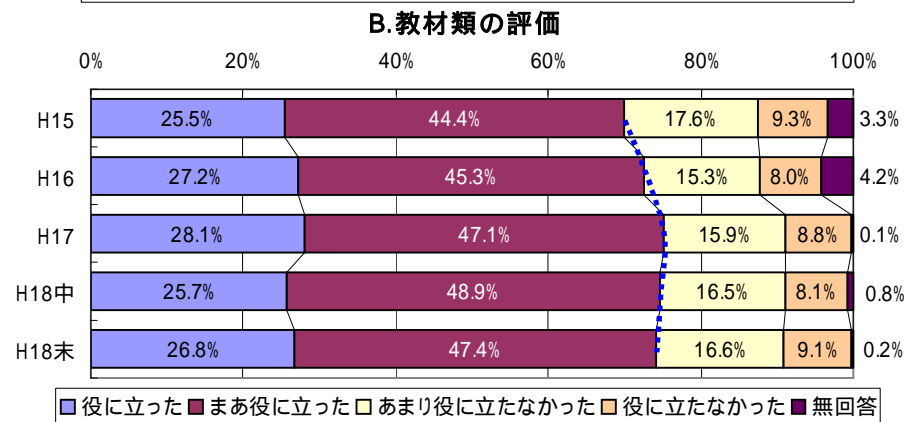
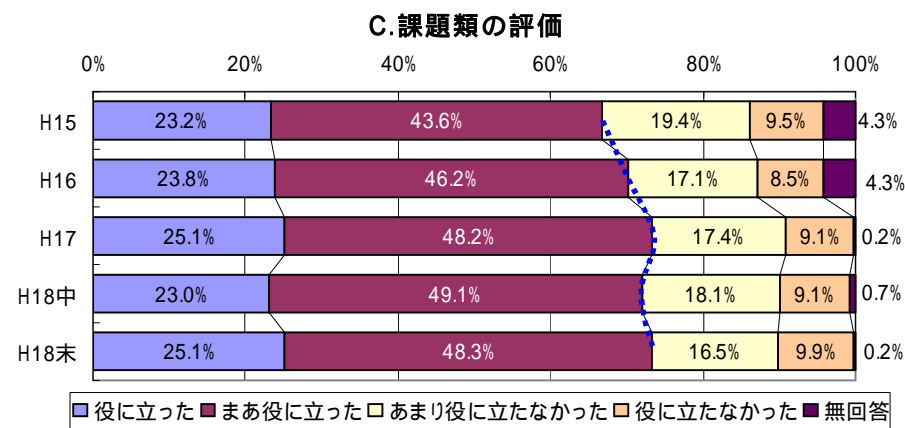
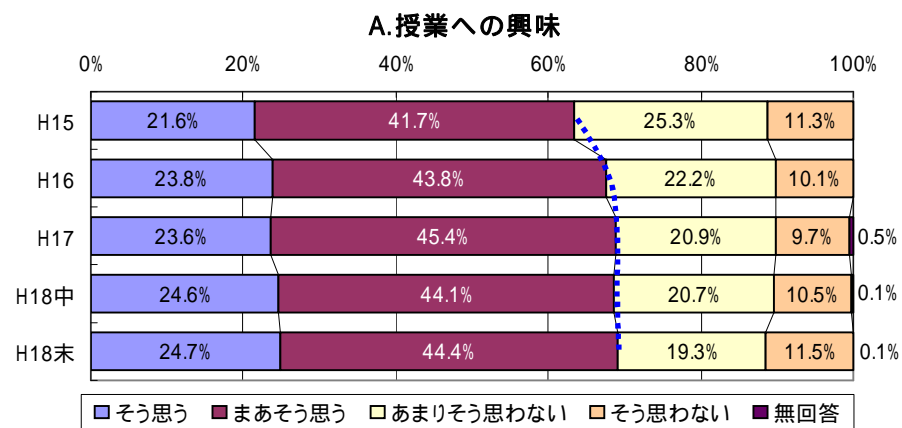
4) 集計に関して

- 加重平均: 各調査項目を属性毎に比較するため、加重平均値を多く活用している。選択肢が「そう思う～そう思わない」などのような段階的な選択肢に用いた。加重平均は上記の選択肢に、+10点、+5点、-5点、-10点を掛けて回答者数で除して算出した。従って、最高点が10点で最低点がマイナス10点となる。無回答は回答者数に含めていない。
- 部会は以下の6つとした。「一般科目」「語学科目」「数理科目」「電気情報工学科(電気電子工学コースを含む)」「機械工学科」「国際コミュニケーション情報工学科(情報工学コースを含む)」
- 平成15年度から平成18年度期末分までの比較を行ったが、科目番号体系が異なっているため、科目毎の比較は行っていない。

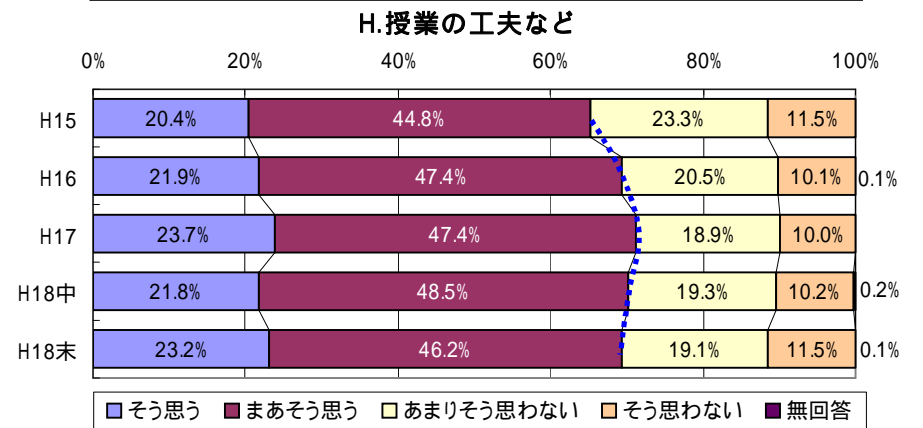
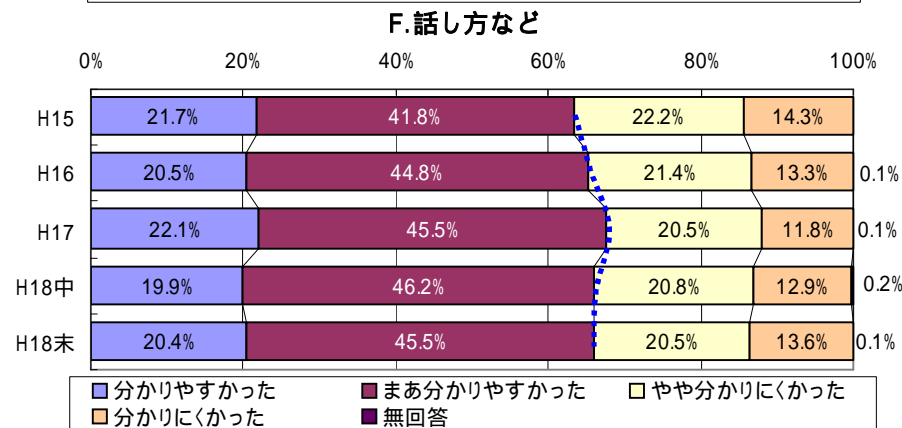
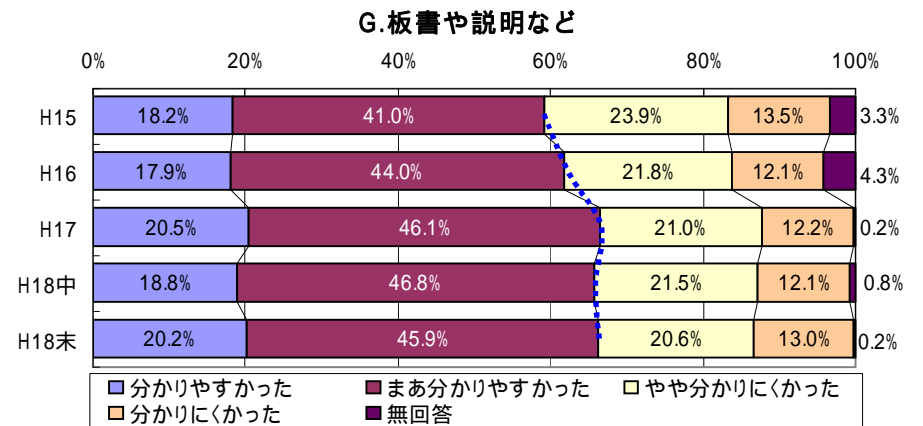
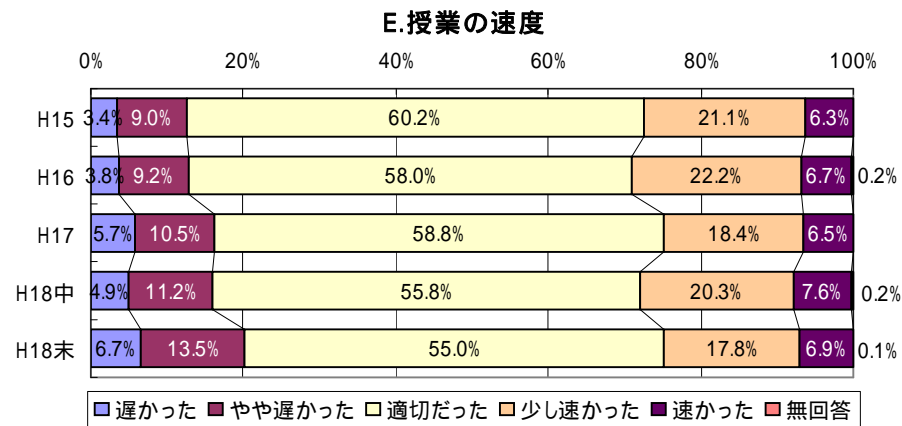
< 2 > 全体傾向の把握

1) 全設問の単純集計

- 「A.授業への興味」に関して「そう思う」と「まあそう思う」の合計は、H15からH17までは増加傾向にあり、興味は増していたが、H17以降はあまり変化がなかった。H18中からH18末にかけては興味があるという回答はわずかに増加していたが、「そう思わない」という回答も増加しており、決して良い状況とは言えない。
- 「B.教材類の評価」に関してH17までは評価が上がっていたが、その後は変化が少なくなり、H18中からH18末にかけてはやや評価が下がる傾向が見られた。
- 「C.課題類の評価」も上記と同様にH17までは評価が上がっていたが、H18中にはやや悪くなっていた。そしてH18末にはH17のレベルにまで戻り、評価はわずかながら良くなっていた。
- 「D.授業に対する予習・復習」の時間はH16からH17まで時間数が長くなる傾向にあったが、H18中にはわずかに短くなっていた。そしてH18末で再び時間が長くなり、過去5年間で最も長くなっていた。

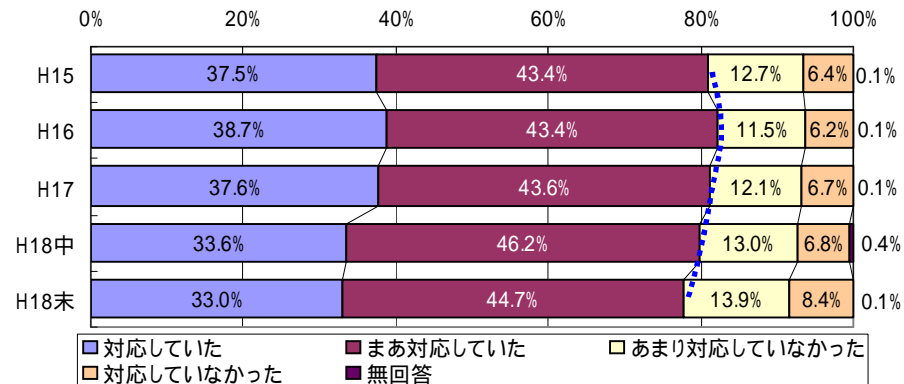


- 「E.授業の速度」に関しては、「遅かった」「やや遅かった」の割合がH15より増加傾向にあり、H18末は2割に達した。一方、「速かった」「少し速かった」の合計は25%～30%で変化しており、H18末は減少していた。そして、全体を見ると「適切だった」はわずかな差ではあるが、今までで最も少なく、速度が遅いと感じる学生の方が多いという状況であった。
- 「F.話し方など」に関しては、H15からH17までは分かりやすいという意見が増加する傾向にあったが、それ以降は大きな変化がなく、H18中からH18末にかけても評価は変わらなかったと言える。
- 「G.板書や説明など」もH17までは評価が上がっていたが、その後はほとんど変化がなく、H18中からH18末にかけてもほぼ変わっていないと言える。
- 「H.授業の工夫など」はH17までは評価が上がっていたが、その後はやや低下傾向にあり、H18末には「そう思わない」と「あまりそう思わない」の合計は30.6%となっていた。

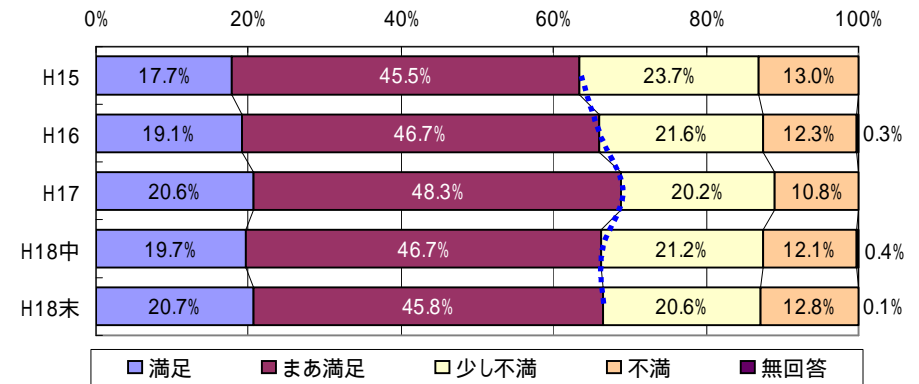


- 「I.質問への対応」は他の項目とは傾向が少し異なる。H15からH16にかけては評価が上がっていたが、その後は低下傾向にある。H18末は今までで最も低い評価となっており、「あまり対応していなかった」と「対応していなかった」の合計は22.3%であった。
- 「J.自分の取り組み」は他と同様にH17まで「積極的だった」「まあ積極的だった」の合計は増加しており、それ以降はあまり変わっていない。しかし、「積極的だった」だけを見ると継続的に増加傾向にあり、積極さは増していると言える。ただし、H18末には「積極的でなかった」もやや増加しており、わずかではあるが積極的な層と消極的な層の二極化が進んでいると言える。
- 「K.満足度」もH15からH17までは継続して上がっていたが、H17からH18中にかけては低下していた。H17までは記名式であったものがH18中から無記名式になったために評価が厳しくなったとも考えられる。そして、H18末にかけてはほとんど変化が見られなかった。
- この結果を見ると、H17からH18中にかけての満足度の低下は、実際に満足度が低下したことよりも記名式から無記名式に変わったことによる影響が大きかったと考えることができる。それ以降のH18中からH18末にかけては、変化がほとんどなかったことが分かる。

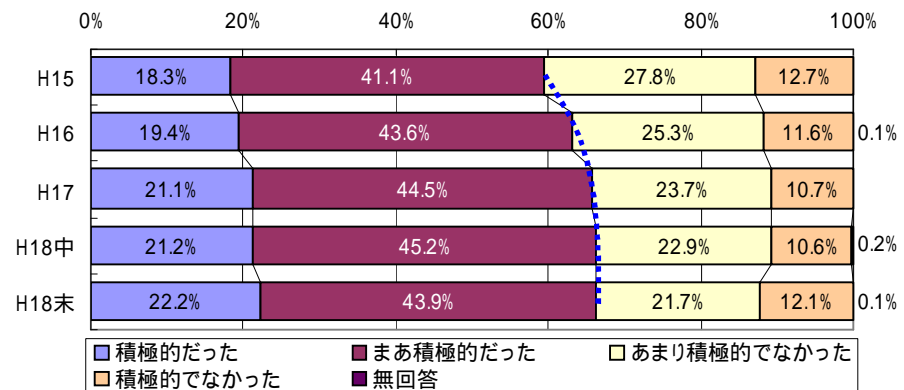
I.質問への対応



K.満足度



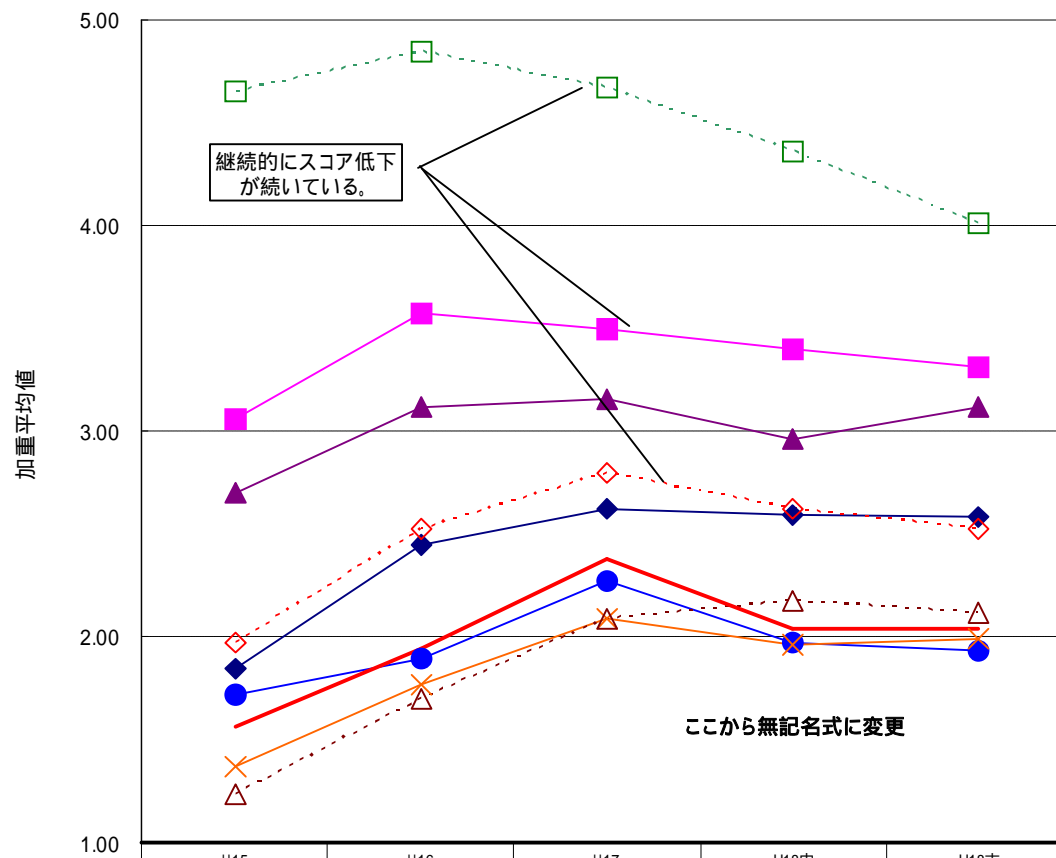
J.自分の取り組み



2)加重平均による経年変化の確認

- 加重平均で集計できる項目の経年変化を確認した。
- まず、目についたのが「I.質問への対応」であり、H16をピークとして継続的にスコアが低下していた。同様に「B.教材類の評価」もH16から下がり続けていた。また、「H.授業の工夫など」はH17から低下していた。これらの3点は比較的スコアが高く、優先的に改善がされていないためか、継続的な評価の低下が気になった。
- H18中からH18末にかけてスコアがアップしていたのは「C.課題類の評価」であるが、これがH18中の調査結果に基づく改善のためであるのか、しっかり検証しておく必要があると思われる。
- 重要な指標である「K.満足度」であるが、H15からH17までは継続的にスコアが上がり良い状況であったが、H18中に低下して今回のH18末では変わらなかった。これは個別の分析でも見たように記名式から無記名式に変わったことが大きく影響していると思われる、今後しっかりと追跡していく必要があると言える。
- 上記でも見たように無記名化による影響かと思われるが、ほとんどの項目でスコアが低下する中、「J.自分の取り組み」はH17からH18中でスコアアップし、「A.授業への興味」はほとんど変わらなかった。
- ここまでの内容を見ると「授業の進め方やサポートツール類など、教員の評価につながるような項目は無記名化によってハッキリとした意見が出て結果として厳しい評価となったが、自分自身の姿勢はあまり変わらず、特に消極的になっている様子はいかがえない」と想像できる。

加重平均による設問毎の経年変化

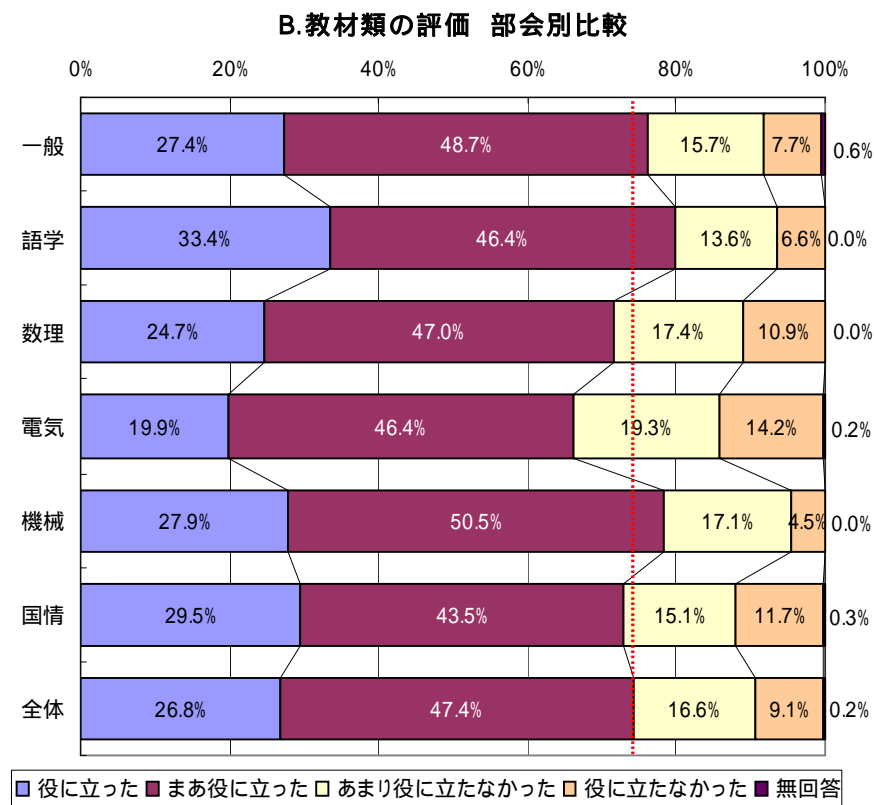
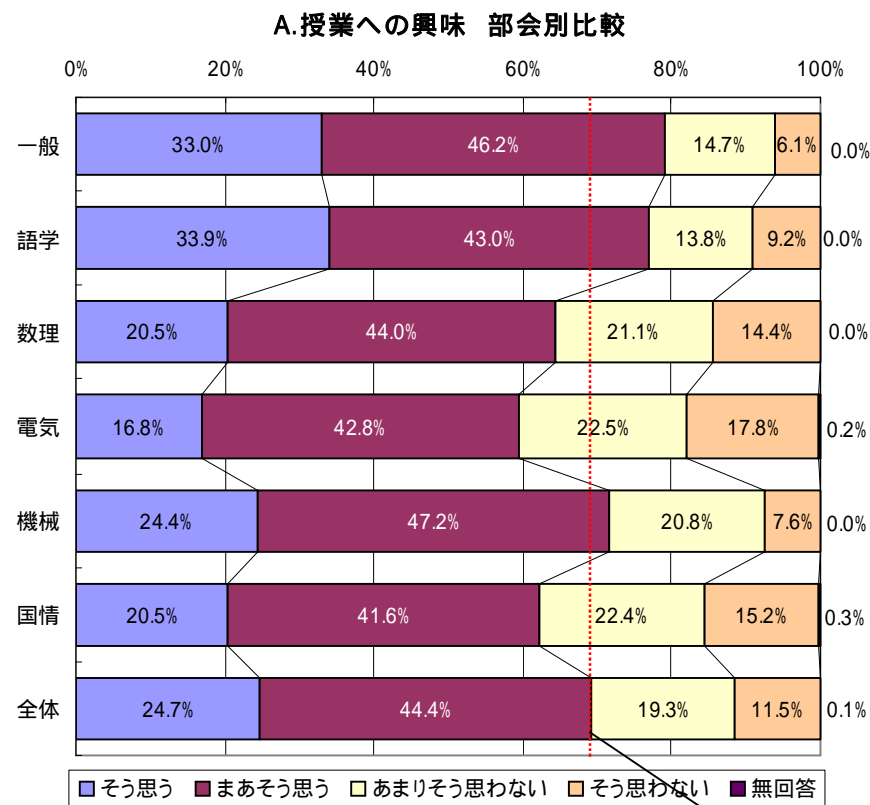


	H15	H16	H17	H18中	H18末
◆ A.授業への興味	1.85	2.45	2.62	2.59	2.58
■ B.教材類の評価	3.06	3.57	3.49	3.40	3.31
▲ C.課題類の評価	2.70	3.12	3.15	2.96	3.12
● F.話し方など	1.71	1.89	2.28	1.97	1.93
× G.板書や説明など	1.37	1.77	2.09	1.96	1.99
◇ H.授業の工夫など	1.98	2.52	2.80	2.63	2.53
□ I.質問への対応	4.65	4.85	4.67	4.36	4.01
△ J.自分の取り組み	1.23	1.70	2.09	2.18	2.12
— K.満足度	1.56	1.94	2.38	2.04	2.04

< 3 > 部会別の傾向の把握

1) 部会別の割合比較

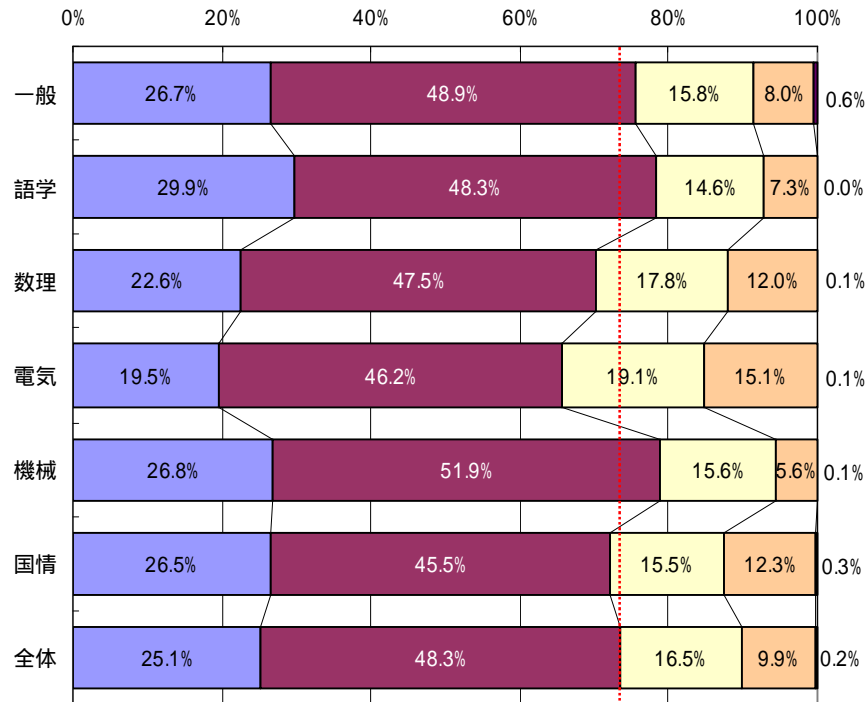
- 部会別に「A.授業への興味」を「そう思う」と「まあそう思う」の合計で比較したところ、「一般」に対しての興味が最も強く、次いで「語学」「機械」という順であり、「一般」に関しては79.2%と約8割が興味を持っていると答えていた。
- 一方、興味を持っているという回答が最も少なかったのは「電気」であり、約6割が興味を持っていると回答していた。そして、「国情」「数理」の科目に対する興味もやや低めであった。
- 「B.教材類の評価」に関しては、「語学」で「役に立った」と「まあ役に立った」の合計が最も多く、約8割は教材に満足しているようであった。
- 次いで「機械」「一般」と続いており、最も評価が低かったのは「電気」で、評価の高かった「語学」と比較すると13.5ポイントの差がついていた。



赤い破線は「全体」の数値を表している

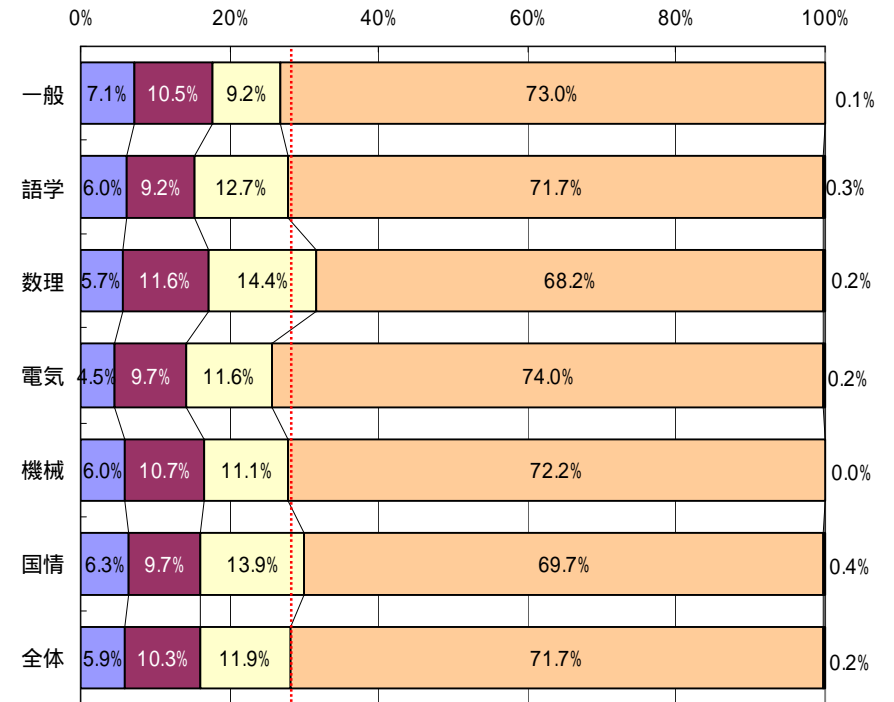
- 「C.課題類の評価」では「機械」の科目での満足度が最も高く、次いで「語学」「一般」という順であった。一方、評価が低かったのは「電気」「数理」であったが、課題類の評価に関しては部会同士の差が比較的小さめであった。
- 「D.授業に対する予習・復習」も部会同士の差が小さめであったが「特に行わなかった」で比較すると、「数理」の科目に対して最も予習・復習の時間を割いているようであり、逆に「電気」「一般」では予習・復習を行っていない割合がやや高めであった。
- 時間で比較すると「60分以上」は「一般」で最も多く、上記と合わせてみると「一般」に関しては予習・復習に時間を割いている層と割いていない層に分かれている傾向がうかがえる。また、「数理」「国情」は「特に行わなかった」は少なかったものの、時間を見ると「15分程度」が多めであり、これらの科目に関しては時間は割いているもののそれほど多くは充てられていないと言える。

C.課題類の評価 部会別比較



■役に立った ■まあ役に立った □あまり役に立たなかった □役に立たなかった ■無回答

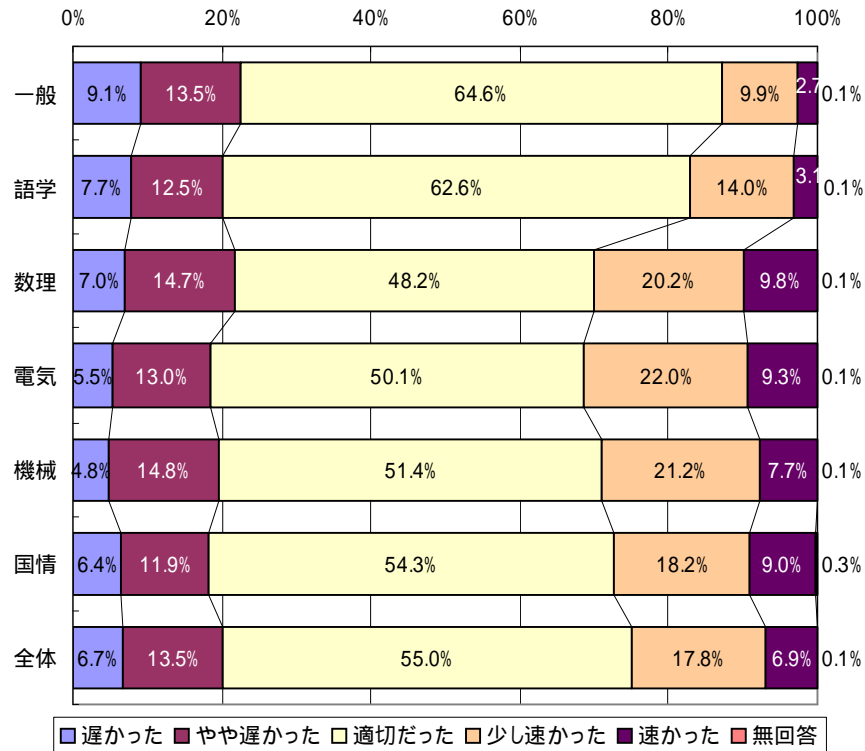
D.授業に対する予習・復習 部会別比較



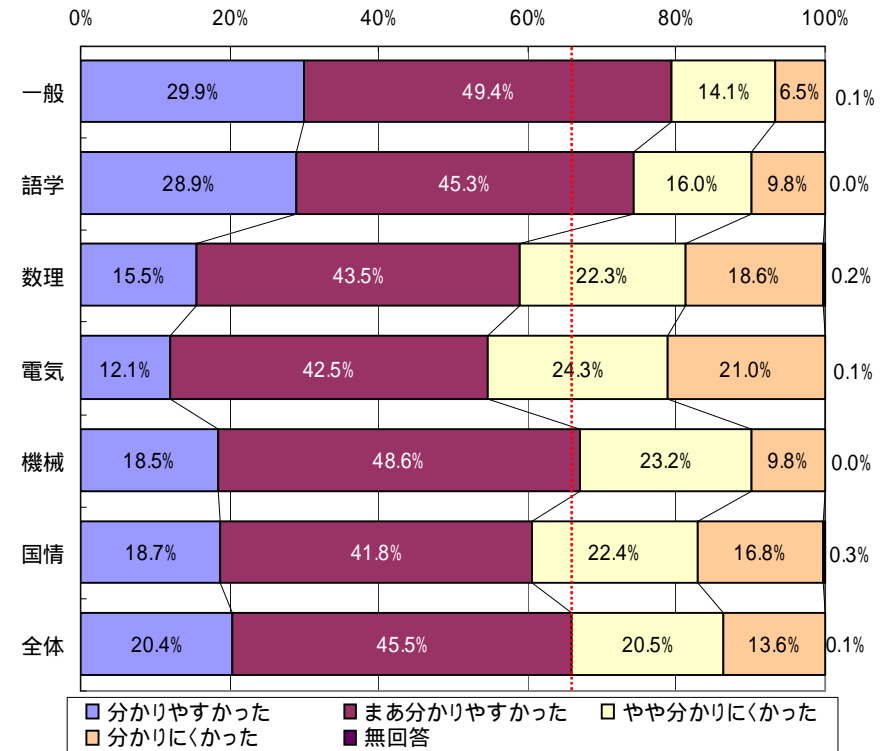
■60分以上 ■30分程度 □15分程度 □特に行わなかった ■無回答

- 「E.授業の速度」に関しては、「遅かった」「やや遅かった」の合計は部会によって大きな差は見られず、全体の2割程度は授業の速度が遅いと感じているようであった。
- 一方、「速かった」「少し速かった」の合計には差が見られ、「電気」「数理」「機械」「国情」では速いと感じている学生が3割ほどいた。そして、「一般」「語学」で授業が速いと感じているのは10%～17%程度であり、前出の4部会との差が見られた。
- 「F.話し方など」は部会によって評価に大きな差が見られた。まず、「分かりやすかった」「まあ分かりやすかった」という意見が最も多かったのは「一般」であり、次いで「語学」「機械」という順であった。一方、「分かりにくかった」「やや分かりにくかった」は「電気」「数理」「国情」で多く見られ、「電気」に関しては半数近くの45.3%が分かりにくいと感じているようであった。
- 「分かりやすかった」「まあ分かりやすかった」の合計で比較すると、最も評価の高かった「一般」と評価の低かった「電気」を比べると24.7ポイントの差が見られた。

E.授業の速度 部会別比較

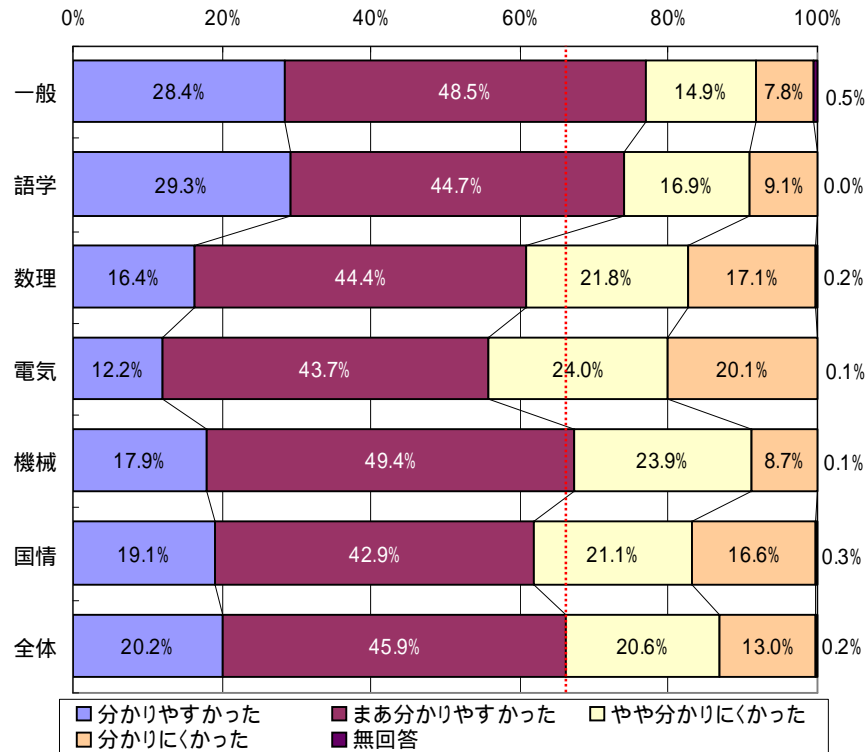


F.話し方など 部会別比較

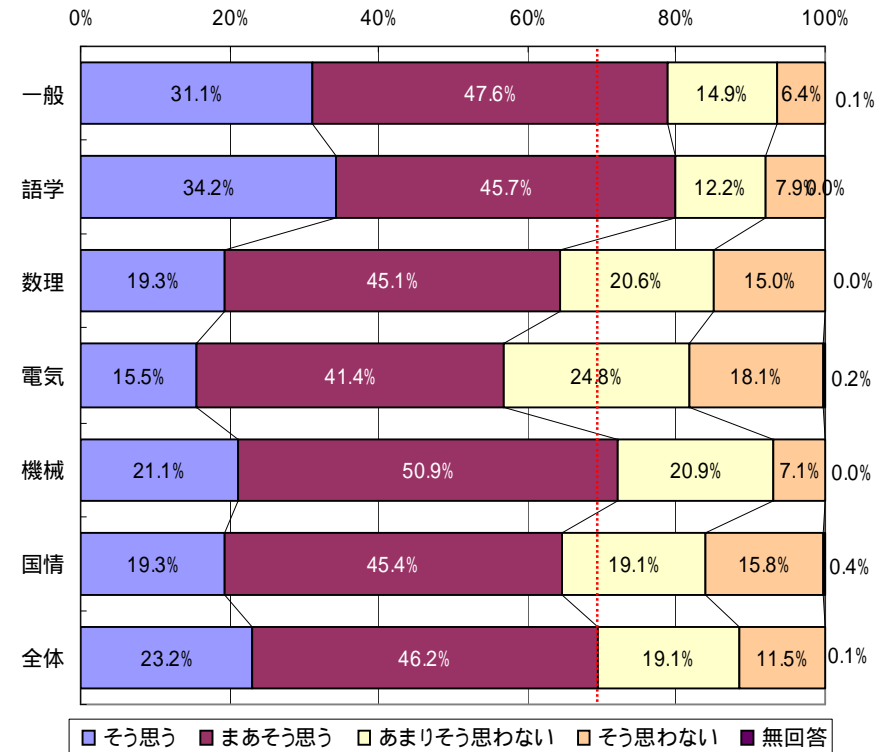


- 「G.板書や説明など」でも「一般」「語学」の評価が高く、8割弱が分かりやすかったと評価しており、「機械」は全体平均と同程度の7割弱が分かりやすかったと答えていた。
- 一方、分かりにくかったと感じていたのは「電気」「数理」「国情」であり、分かりにくいという回答は4割程度であった。
- 「H.授業の工夫など」も他と同様の傾向であり、「語学」「一般」の評価が高く、「機械」がそれに次いでいた。そして、「電気」の評価が最も低く、「数理」「国情」がやや低めという結果であった。
- 評価の良かった「語学」と評価の低かった「電気」を比べると23ポイントの差があり、評価が分かれる結果となっていた。

G.板書や説明など 部会別比較

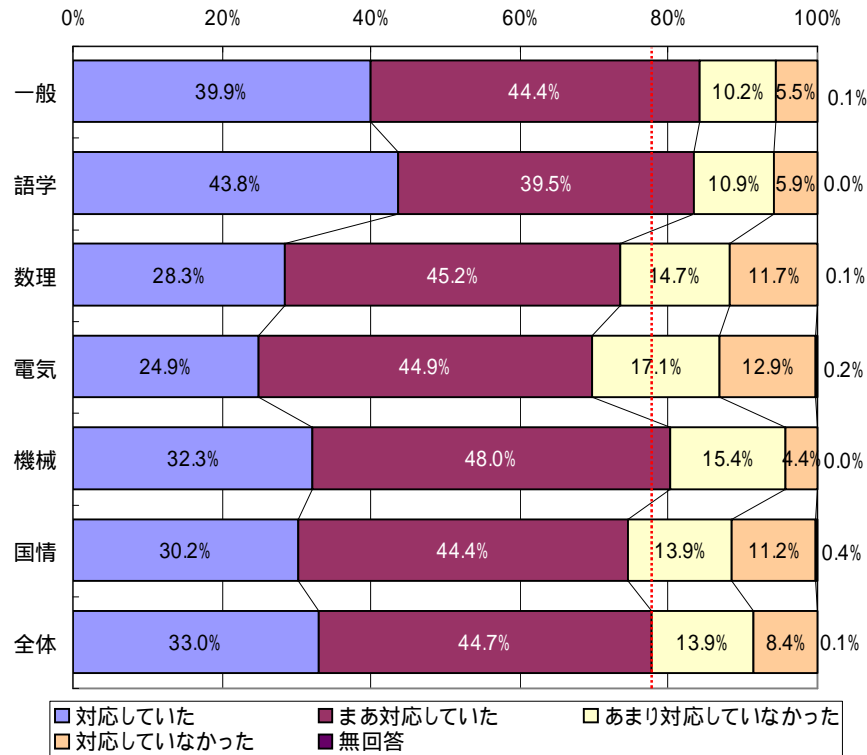


H.授業の工夫など 部会別比較

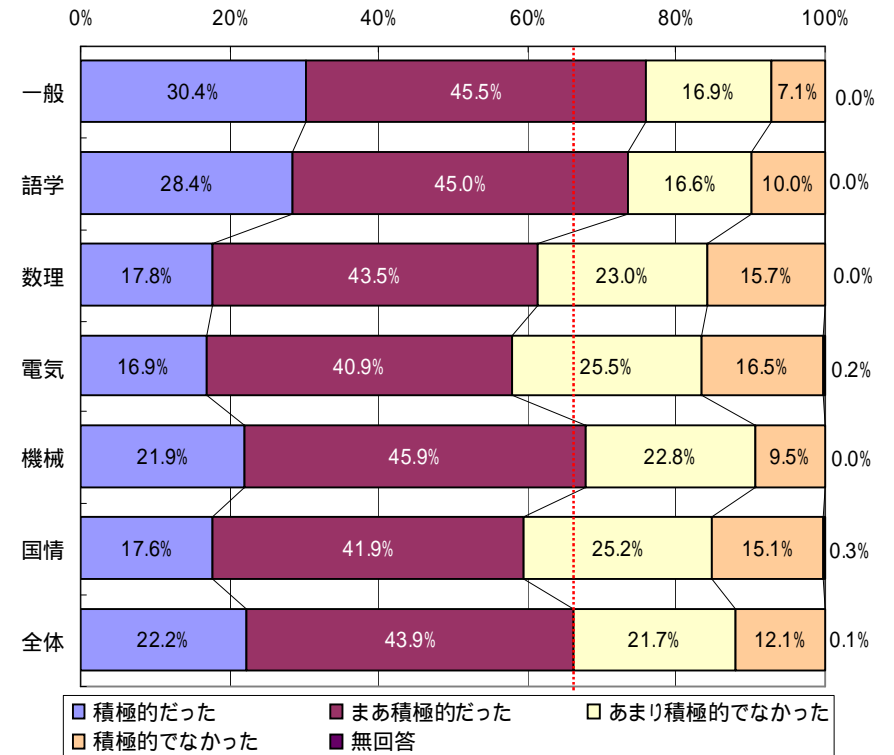


- 「I.質問への対応」は「対応していた」と「まあ対応していた」の合計では、「一般」「語学」「機械」の評価が高かった。しかし、「対応していた」だけを見ると「語学」の評価が最も高く、「語学」の質問対応は高く評価されていると言える。
- 一方、評価が低かったのは「電気」「数理」「国情」であったが、7割以上は対応が良かったと感じており、それほど大きな問題があるとも言えないと思われる。
- 自分自身の積極性である「J.自分の取り組み」でも「一般」「語学」で積極的だったという回答が多く、次いで「機械」という順であった。「一般」と「語学」では7割以上が積極的に取り組んだと答えており、前向きな取り組み姿勢がうかがえた。
- 一方、「電気」「国情」「数理」の積極性は低く、6割程度は積極的に取り組んでいたが、残りの4割は積極的とは言えず、この積極性の低さが満足度や授業の評価につながっているものと思われる。

I.質問への対応 部会別比較

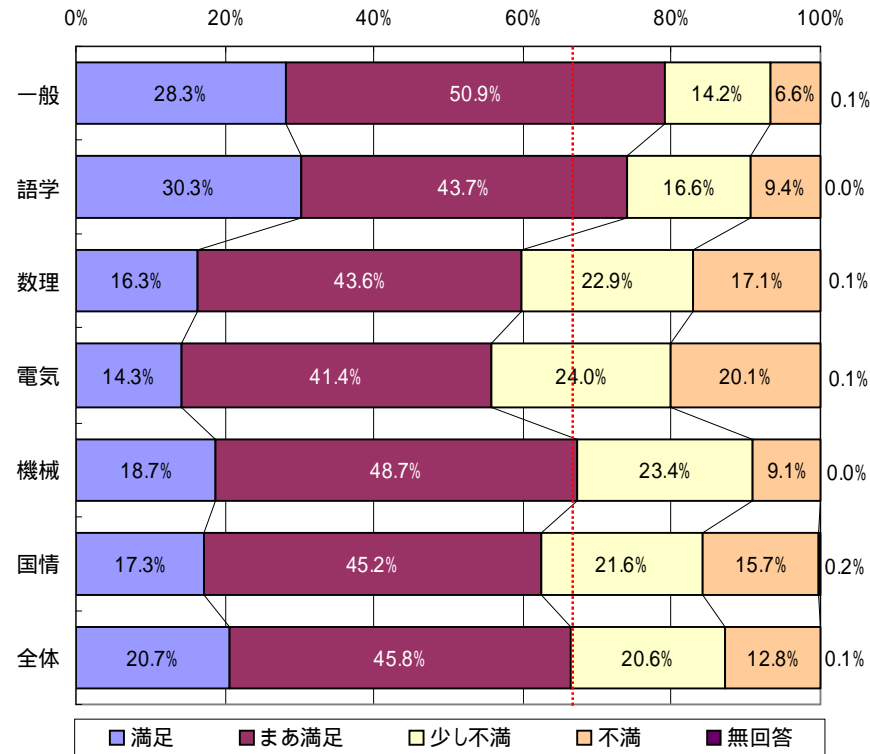


J.自分の取り組み 部会別比較



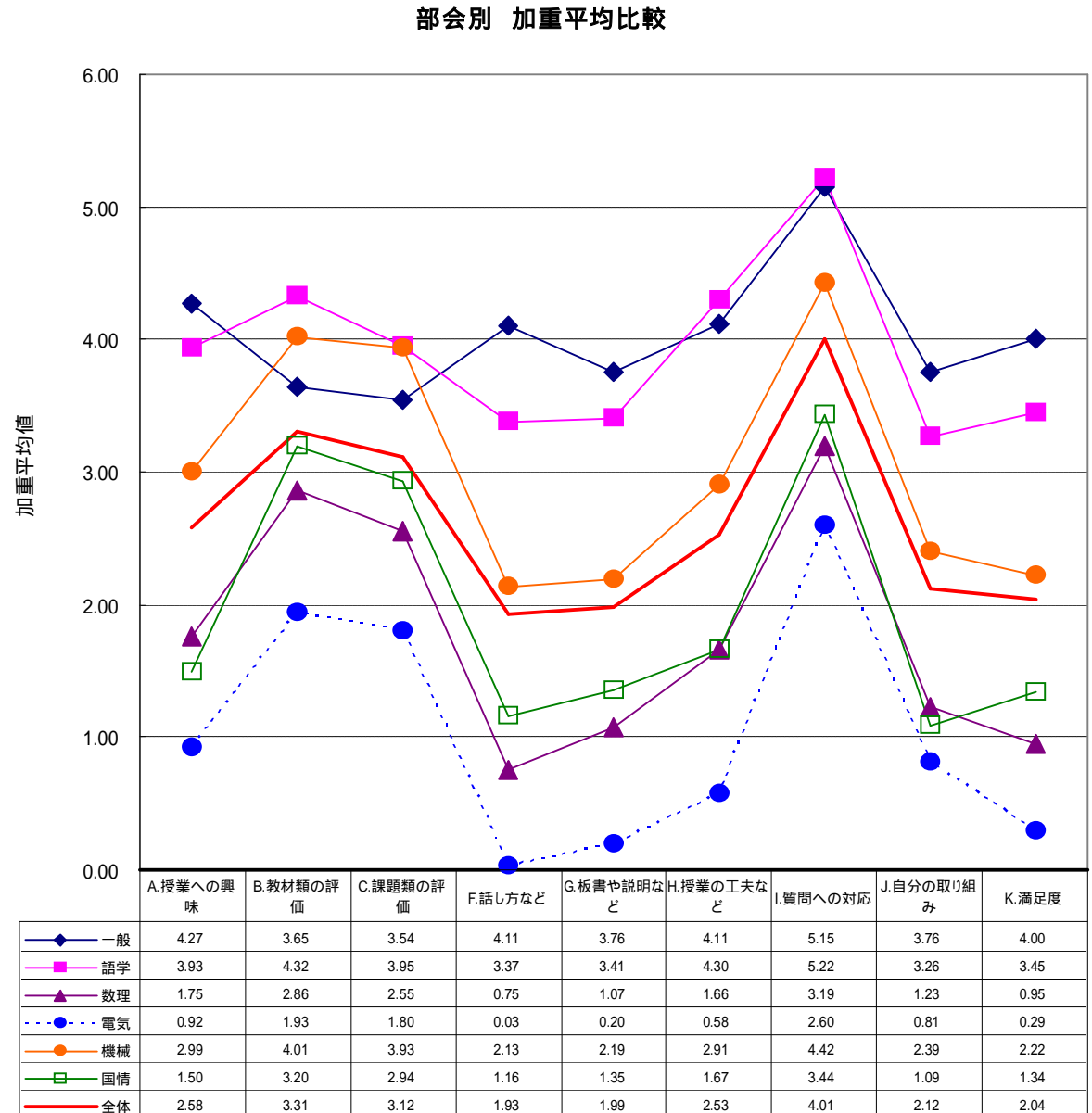
- 授業の全体的な評価である「K.満足度」を見ると「一般」の満足度が最も高く、「満足」と「まあ満足」の合計は79.2%と高かった。次いで「語学」では満足しているという回答が74.0%と比較的高めであった。
- 「機械」に満足しているという回答は全体平均とほぼ同じで、67.4%が満足していた。
- 一方、平均を下回ったのは他の項目と同様に3部会であり、最も低い「電気」では満足しているという回答は55.7%にとどまり、「一般」と比べると23.5ポイントの差があった。
- そして、「数理」では満足しているという回答が59.9%、「国情」では62.5%と、この2部会では約6割が満足していると回答していた。

K.満足度 部会別比較



2) 部会別の加重平均比較

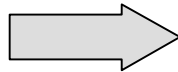
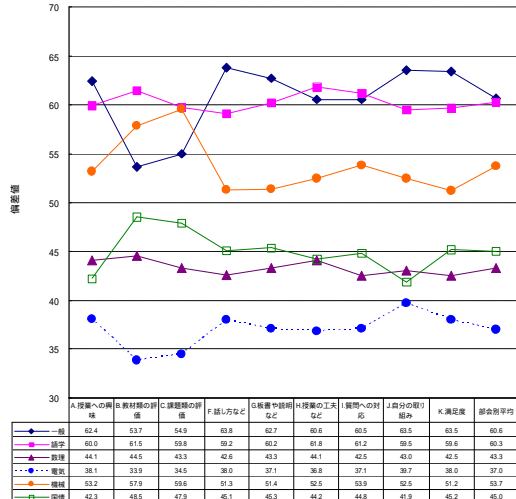
- ここまでに見た部会別の比較を加重平均で確認した。
- ここまでに見てきているように、評価が高めであったのは「一般」と「語学」であった。
- 「A.授業への興味」「J.自分の取り組み」「K.満足度」という自分の姿勢の面では「一般」のスコアが高く、一般の部会の科目には積極的に取り組み、満足度も高いようであった。
- 専門部会の中では「機械」のスコアが最も高く、特に「B.教材類の評価」「C.課題類の評価」のスコアの高さが目立っていた。
- 一方、スコアが低めであったのは「電気」で、全ての項目で最も低いという結果となっていた。マイナスとなったものはないものの、この低さはしっかりと受け止める必要があると言える。
- 「数理」「国情」に関しては、「国情」がやや高いものの同じようなスコアとなっていた。ただし「国情」では、「K.満足度」が少し高めであった。



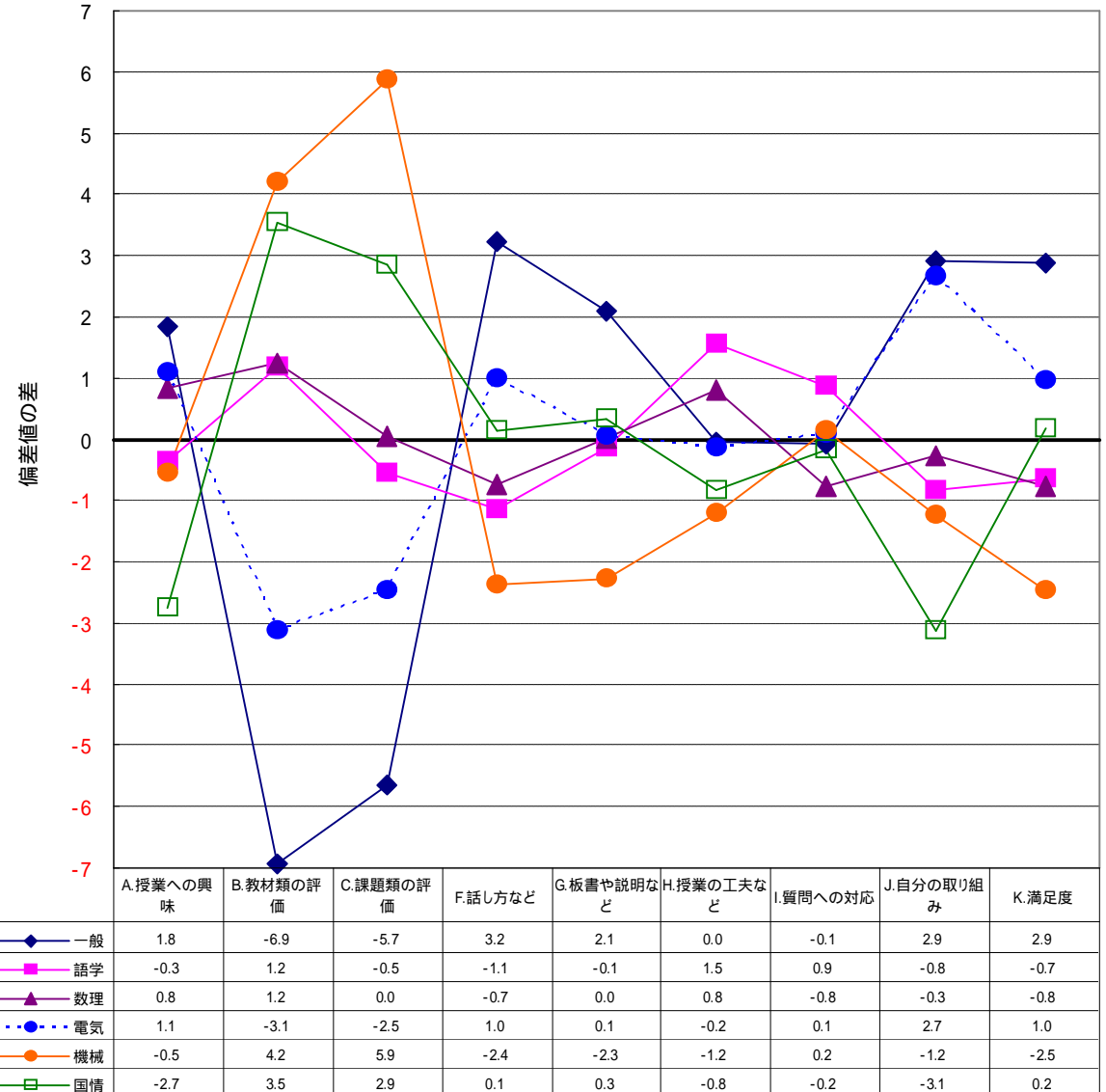
3) 部会別の偏差値による比較

- 加重平均では各設問によって平均値が異なり部会の特徴が見えにくいため、設問毎に平均を50とした偏差値をとり、部会別平均との差を比較した。これを見ることで部会毎のベースを一致させて比較することができる。
- 「一般」は全体的に高かったが、敢えて特徴を見ると、自分の取り組み姿勢である「A.」「J.」「K.」と、「F.話し方」「G.板書や説明」の評価が高く、「B.教材類」「C.課題類」に改善の余地がありそうであった。
- 次に特徴が見られたのは「機械」であり、「B.教材類」「C.課題類」は高かったが、「F.話し方」「G.板書」などは低めであり、「K.満足度」もまだ上がっても良い状態にあると言える。
- そして「国情」は「B.教材類」「C.課題類」は高いものの自分の取り組み姿勢である「A.」「J.」のスコアが低めである点が目についた。

部会別 偏差値による比較



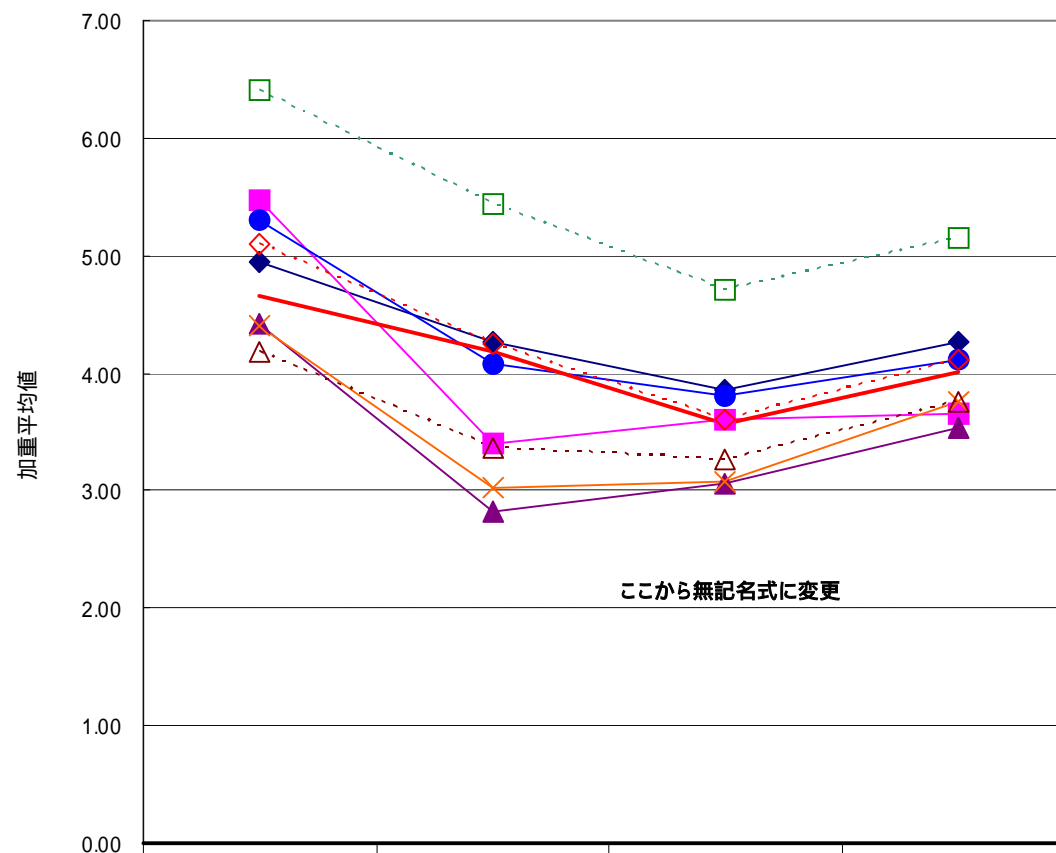
部会別 偏差値の部会平均との差
(各項目の偏差値-偏差値の部会平均)



4) 部会別の経年比較

- 加重平均でできる項目の経年変化を部会毎に確認した。
- 「一般」ではH16からH18中までは多くの項目でスコアが低下する傾向が見られた。例外であったのは「B.教材類の評価」「C.課題類の評価」「G.板書や説明など」の3点であり、これらは無記名化の影響もなくH17からH18末まで継続的にスコアがアップしており、何らかの改善がなされたのではないかとと思われる。
- H18中からH18末にかけては全ての項目がスコアアップしていた。他の部会ではこの半年の間のスコアの変動は小さく、変化していても下がっていた部会が多かったが、ここでは全て上がっており、「一般」では後半に満足度が上がることが分かった。半年間の比較は今回が初めてであるが、この現象が今後も続くかどうか、注目すべき点の1つと言える。
- 今回のH18末には「A.授業への興味」「J.自分の取り組み」のスコアがアップし、「K.満足度」も上がっていたが、「K.満足度」はH17のレベルにまでは戻っておらず、今後の動きが気になるところである。

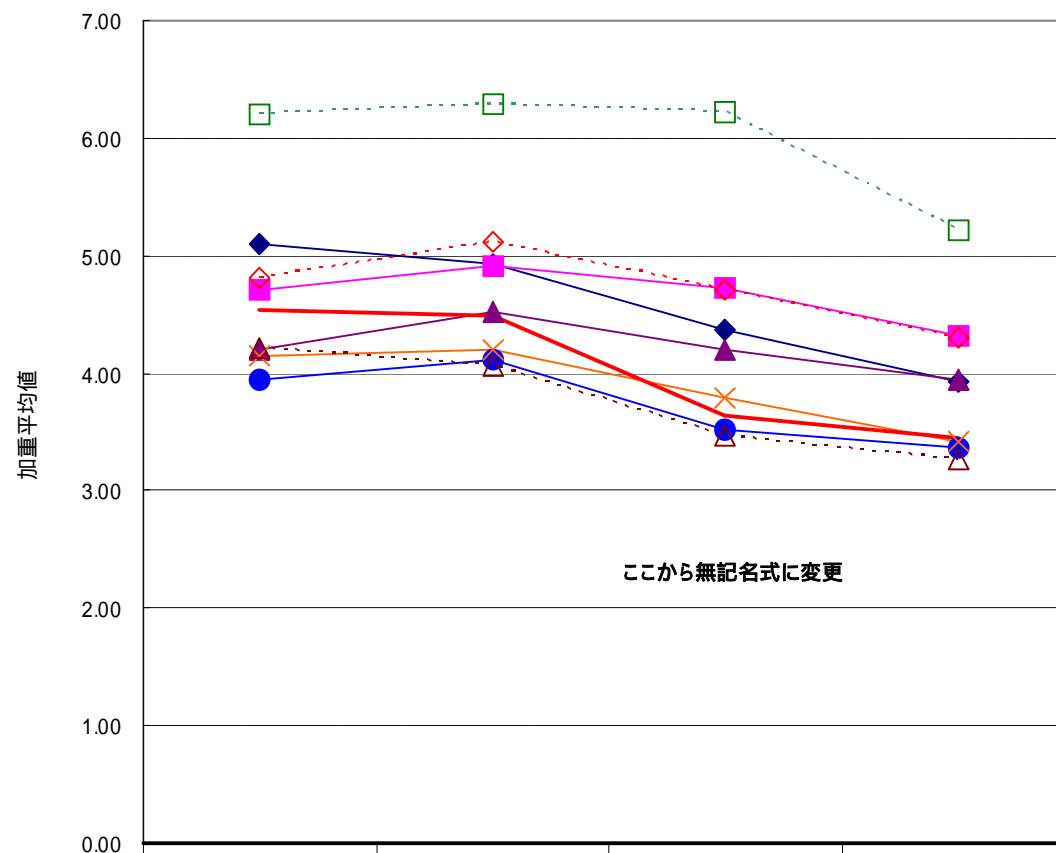
一般部会 加重平均による設問毎の経年変化



	H16	H17	H18中	H18末
◆ A. 授業への興味	4.95	4.26	3.85	4.27
■ B. 教材類の評価	5.46	3.40	3.60	3.65
▲ C. 課題類の評価	4.42	2.82	3.06	3.54
● F. 話し方など	5.30	4.07	3.80	4.11
× G. 板書や説明など	4.40	3.02	3.07	3.76
◇ H. 授業の工夫など	5.09	4.25	3.60	4.11
□ I. 質問への対応	6.41	5.43	4.71	5.15
△ J. 自分の取り組み	4.18	3.36	3.27	3.76
— K. 満足度	4.65	4.19	3.57	4.00

- 「語学」は全体的にスコアが高いこともあるが、H16からの変動は比較的小さかった。
- 全体の流れを見るとH16からH17にかけてはほとんど変化がなく、H18中にかけては無記名化の影響もあると思われるが、スコアが低下していた。
- そして、H18末にかけての半年間の間にも全ての項目でスコアが低下しており、長期的に低下傾向にあると言える。
- H16からH17にかけては、授業の進め方やサポートツール類の評価はわずかではあるが良くなっていたが、「A.授業への興味」「J.自分の取り組み」「K.満足度」の3つは低下していた。この3つはH16からH18末まで継続的にスコアが低下しており、無記名化の影響もあると思われるが、学生の積極性が低下しているという状況がうかがえた。
- また、「I.質問への対応」はH18中からH18末にかけて大きく低下していたが、この低下には何らかの大きな要因があるのではないと思われる。
- 「語学」は他の部会と比較しても学生の評価は高かったが、これらを見ると安心できないと言わざるを得ない状況である。

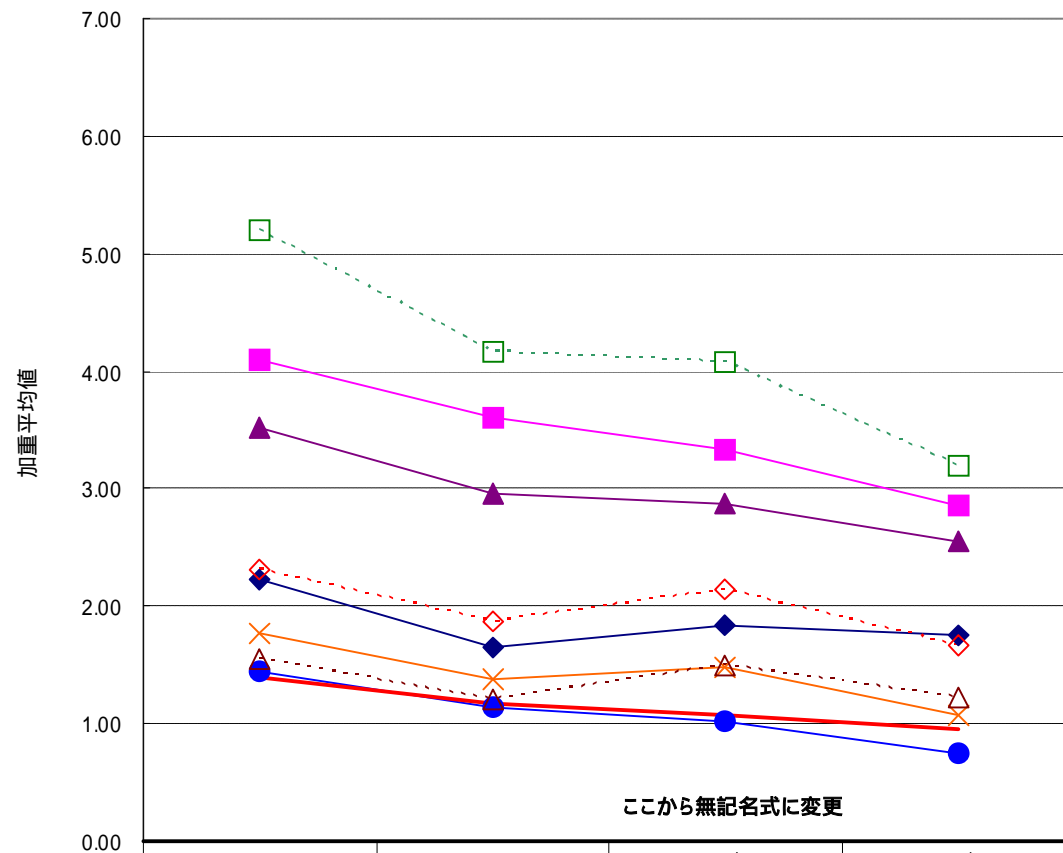
語学部会 加重平均による設問毎の経年変化



	H16	H17	H18中	H18末
◆ A.授業への興味	5.10	4.93	4.37	3.93
■ B.教材類の評価	4.71	4.91	4.72	4.32
▲ C.課題類の評価	4.20	4.52	4.20	3.95
● F.話し方など	3.94	4.12	3.51	3.37
× G.板書や説明など	4.15	4.19	3.79	3.41
◇ H.授業の工夫など	4.80	5.11	4.71	4.30
□ I.質問への対応	6.20	6.28	6.22	5.22
△ J.自分の取り組み	4.21	4.06	3.47	3.26
— K.満足度	4.54	4.48	3.64	3.45

- 「数理」の全体傾向を見ると、H17からH18中にかけては微増のものもあったが、大きな流れとしてはH16から継続的にスコアが下がる傾向が見られた。
- ただ、他の部会ではアンケートが記名式から無記名式に変わったH18中の段階でスコアが大きく下がるケースが多かったが、ここではそれほど大きく下がっておらず、逆に「A.授業への興味」「G.板書や説明など」「H.授業の工夫など」「J.自分の取り組み」の4点はスコアがアップしており、何らかの改善がなされたのではないと思われる。
- しかし、「K.満足度」は低下を続けており、「電気部会」に次いで低いものであった。他と比べて動きはなだらかではあるが、わずかずつ下がり続けており、これをくい止めることが大きな課題と言える。
- 「A.授業への興味」はH17からH18中にかけては微増で、H18中からH18末にかけては横這いに近い変化であり、興味を持つ学生数はあまり変わっていないと言え、この興味を活かすことが重要なポイントであると思われる。

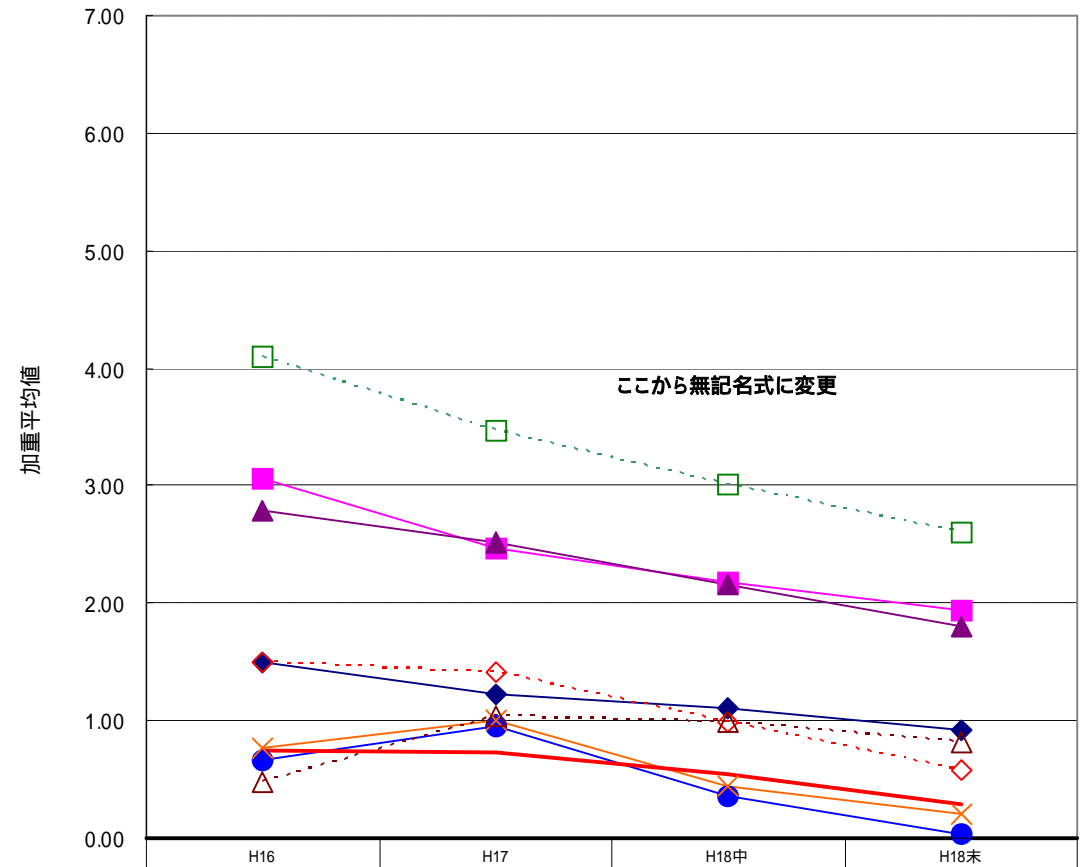
数理部会 加重平均による設問毎の経年変化



項目	H16	H17	H18中	H18末
◆ A. 授業への興味	2.22	1.65	1.83	1.75
■ B. 教材類の評価	4.09	3.61	3.33	2.86
▲ C. 課題類の評価	3.52	2.95	2.87	2.55
● F. 話し方など	1.44	1.14	1.02	0.75
× G. 板書や説明など	1.77	1.37	1.48	1.07
◇ H. 授業の工夫など	2.30	1.87	2.13	1.66
□ I. 質問への対応	5.19	4.17	4.08	3.19
△ J. 自分の取り組み	1.55	1.20	1.50	1.23
— K. 満足度	1.39	1.17	1.07	0.95

- 「電気」も大きな流れとしてはなだらかではあるが H16からスコアの低下が続いており、満足度においては全部会の中で最も低いという状況であった。
- H16からの変化を見ると、「F.話し方など」「G.板書や説明など」「J.自分の取り組み」の3つはH16からH17にかけてスコアがアップしており、指導方法に何らかの改善がなされた可能性があるが、それ以外は全てスコアが低下していた。
- 他の部会と比較しても全体的にスコアが低く、ほとんどの項目がこれまでの調査のスコアを下回っていることから考えると、「電気」関連の科目では早急に改善に取り組む必要があると言わざるを得ない結果であった。
- 「K.満足度」も継続的に低下を続けており、H18末には0.29と、ゼロに近いスコアであった。これを少しでも上げることが必要と言える。
- また、「電気」では無記名化の影響はほとんど見られず、当初からハッキリとした回答をしていたとも言える。

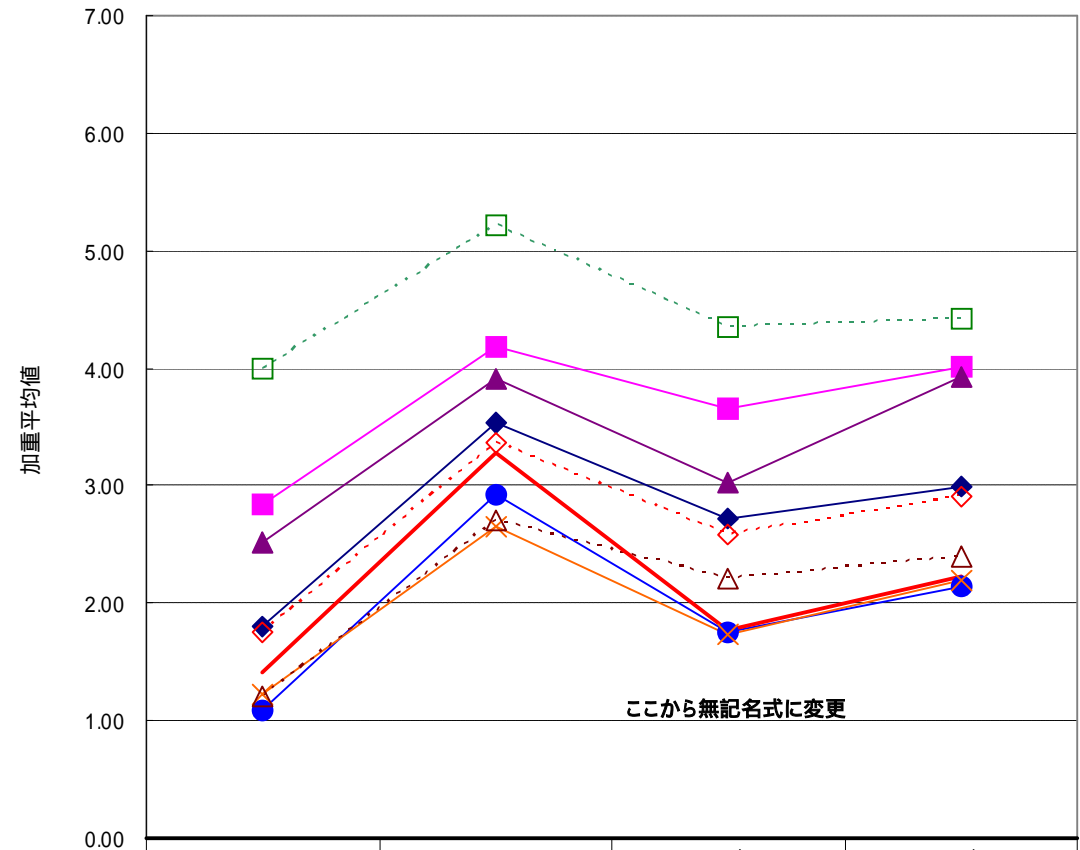
電気部会 加重平均による設問毎の経年変化



◆	A. 授業への興味	1.50	1.23	1.11	0.92
■	B. 教材類の評価	3.06	2.46	2.17	1.93
▲	C. 課題類の評価	2.79	2.52	2.15	1.80
●	F. 話し方など	0.66	0.95	0.36	0.03
×	G. 板書や説明など	0.76	1.00	0.44	0.20
◇	H. 授業の工夫など	1.50	1.41	0.99	0.58
□	I. 質問への対応	4.10	3.46	3.01	2.60
△	J. 自分の取り組み	0.47	1.04	0.98	0.81
—	K. 満足度	0.75	0.72	0.55	0.29

- 「機械」は他の部会と比べて変動が大きかったが、結果的にH18末のスコアは調査開始のH16を上回っており、大きな流れとしては良い方向に向かっていると見て良いと思われる。
- 全ての項目が同じ動きをしており、H16からH17にかけては大きくスコアがアップしていたが、H18中にかけてはスコアがダウンしていた。これは無記名化の影響とも考えられるが、これだけの大きな動きは他の部会には見られず、「機械」ではアンケート時、少し記名を意識した回答をしていたとも考えられる。
- H18中からH18末にかけては全ての項目が上向きとなっていた。半年にも係わらずスコアは大きくアップしており、特に「C.課題類の評価」は大きくスコアが上がっていた。
- 「K.満足度」も全体の動きと同様であるが、H17からH18中にかけてのダウンは大きく、ここで無記名化の影響が出ているとすれば、今後どのように変化するのか注目していくべき点と言える。

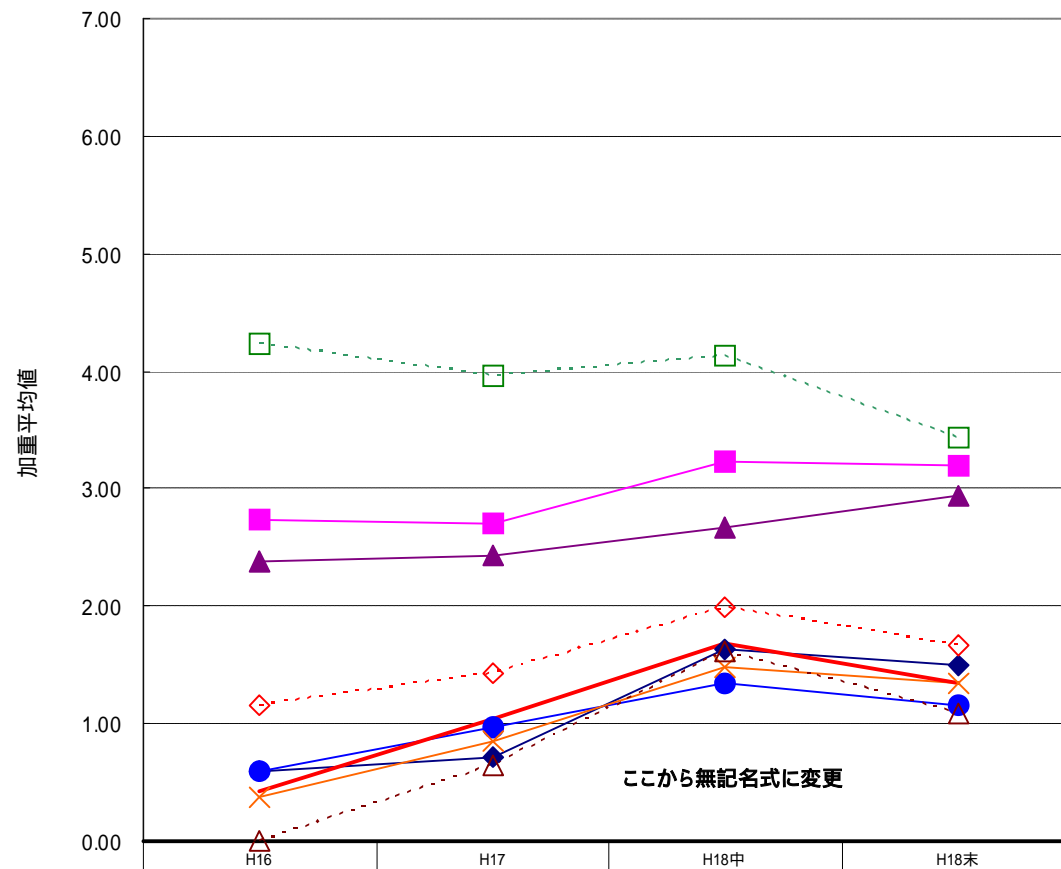
機械部会 加重平均による設問毎の経年変化



	H16	H17	H18中	H18末
◆ A.授業への興味	1.80	3.54	2.72	2.99
■ B.教材類の評価	2.84	4.18	3.66	4.01
▲ C.課題類の評価	2.52	3.90	3.02	3.93
● F.話し方など	1.08	2.93	1.74	2.13
× G.板書や説明など	1.23	2.65	1.73	2.19
◇ H.授業の工夫など	1.75	3.37	2.58	2.91
□ I.質問への対応	4.00	5.21	4.36	4.42
△ J.自分の取り組み	1.21	2.71	2.21	2.39
— K.満足度	1.41	3.28	1.76	2.22

- 「国情」の大まかな流れとしては、例外はあるが、H16からH18中にかけて継続的にスコアアップが続いており、H18末にかけて少しスコアがダウンするというパターンであった。
- 「C.課題類の評価」はH16からH18末まで継続的にスコアのアップが続いており、改善策が評価されているのではないかとと思われる。
- また、「国情」もH17からH18中にかけての無記名化の影響で評価が下がるという傾向はうかがえなかった。そして、H18中からH18末にかけてはそれまで上昇基調であったのが低下に転じていた。これは同一学生の評価であるため、この低下の要因を探ることで何らかのヒントが見えてくるのではないかとと思われる。
- 「J.自分の取り組み姿勢」のスコアはH16にはゼロであり、他の部会と比較しても非常に積極性が低かったが、その後、改善が続いている。この動きを解明することも大きなヒントにつながる可能性がありそうであった。

国情部会 加重平均による設問毎の経年変化

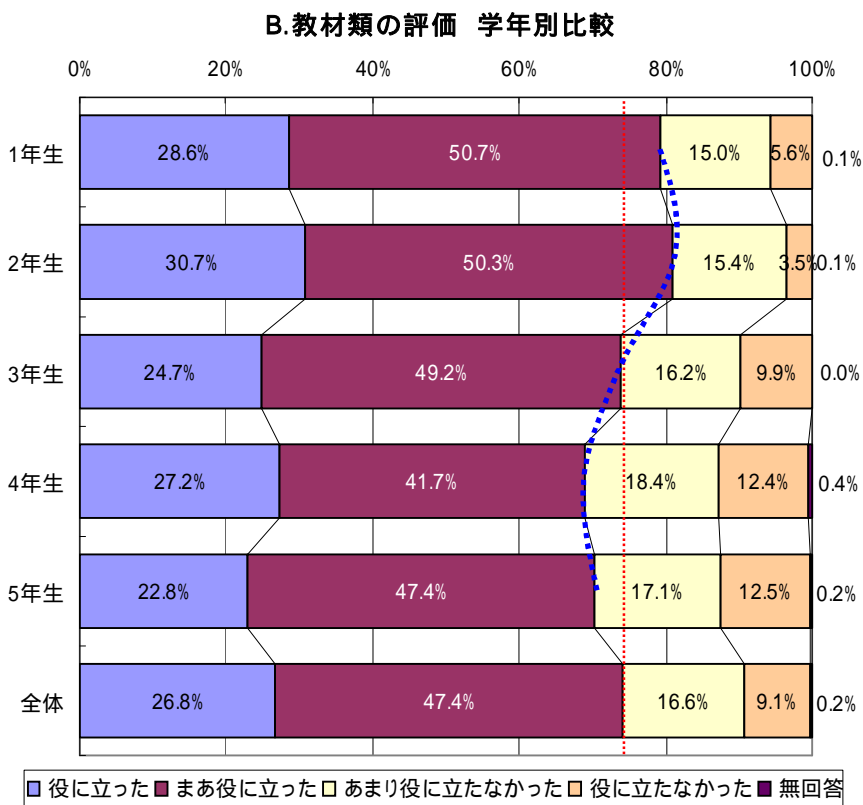
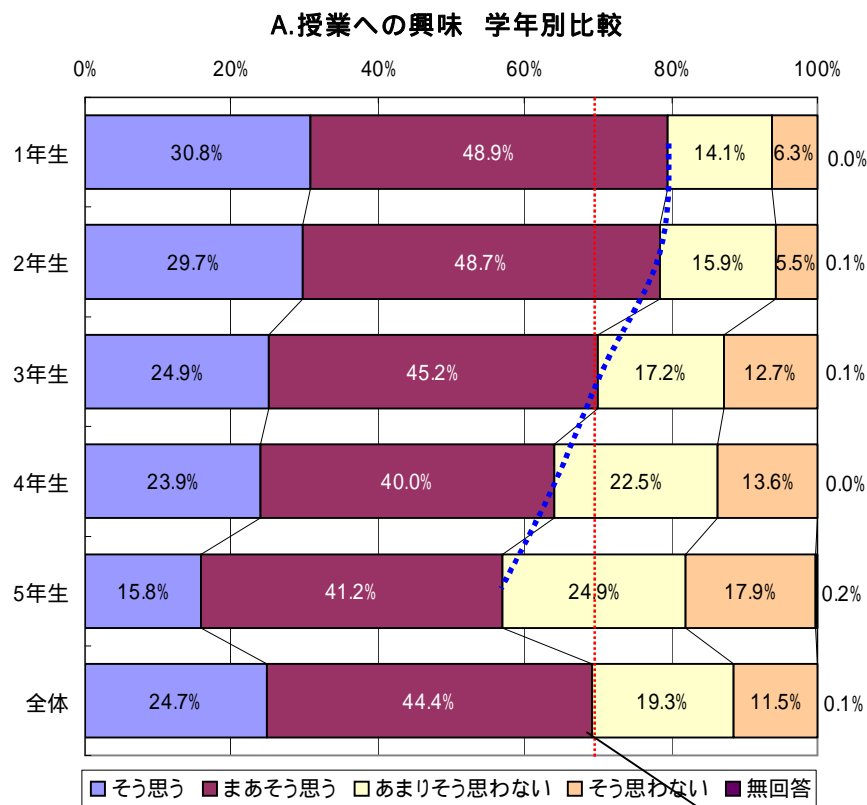


	H16	H17	H18中	H18末
◆ A.授業への興味	0.60	0.71	1.63	1.50
■ B.教材類の評価	2.73	2.69	3.23	3.20
▲ C.課題類の評価	2.38	2.42	2.67	2.94
● F.話し方など	0.60	0.98	1.35	1.16
× G.板書や説明など	0.37	0.85	1.48	1.35
◇ H.授業の工夫など	1.15	1.42	1.98	1.67
□ I.質問への対応	4.24	3.95	4.13	3.44
△ J.自分の取り組み	-0.00	0.65	1.61	1.09
— K.満足度	0.43	1.04	1.69	1.34

< 4 > 学年別の傾向の把握

1) 学年別の割合比較

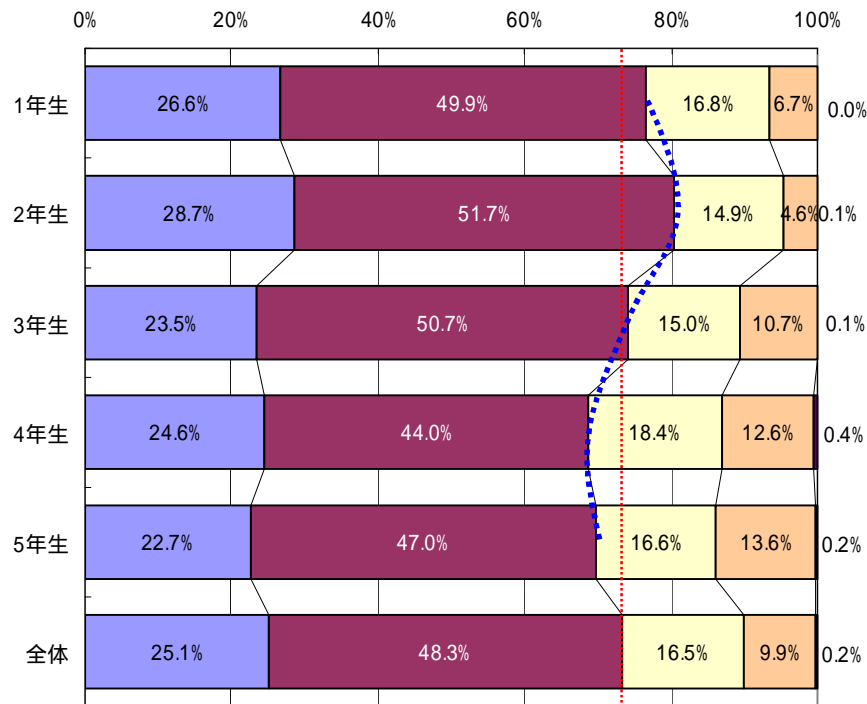
- 学年別に「A.授業への興味」を見たところ、「そう思う」と「まあそう思う」の合計は1年生と2年生の差は小さいものの、学年が上がるほど少なくなる傾向にあり、高学年ほど授業に興味を持っていない状況がハッキリと現れていた。
- 1年生では79.7%が興味を持っていたが、5年生では57.0%と20ポイント以上の差がついており、大きな意識の違いが見られた。
- 「B.教材類の評価」も大まかには高学年の方が厳しい評価をしていたが、2年生は1年生よりも教材類を高く評価しており、全体では4年生が最も厳しい評価をしていた。
- また、教材に対する評価は学年による差がそれほど大きくなく、最も低い4年生でも「役に立った」「まあ役に立った」という評価の合計は68.9%であり、教材の評価はそれほど低くないと言える。



赤い破線は「全体」の数値を表している

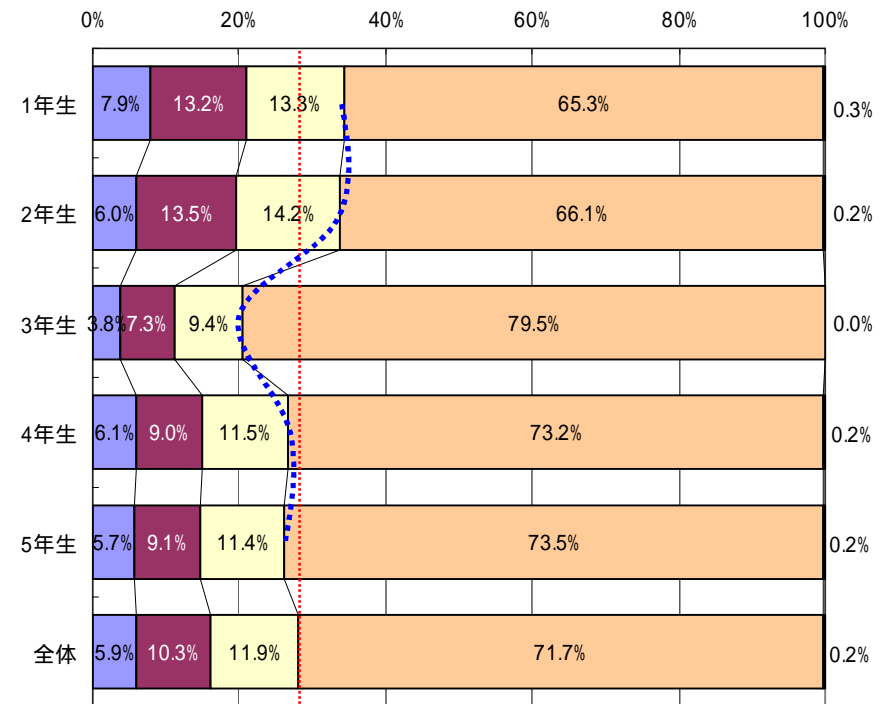
- 「C.課題類の評価」に関しても基本的には高学年ほど厳しい評価をしていたが、前項の教材類の評価と同様に2年生が最も高い評価をしており、次いで1年生、3年生の順で、最も厳しく評価していたのは4年生であった。
- ここでも学年毎の評価にそれほど大きな差は見られなかったが、2年生が高い評価をしており、4年生が厳しいという点が目についた。
- 「D.授業に対する予習・復習」に関して、まず「特に行わなかった」で比較すると、1年生と2年生が同程度で比較的良好に勉強しており、次いで4年生と5年生が同程度、そして、3年生が最も予習・復習に時間を割いていないことが分かった。
- 時間数の比較でも上記と同じような傾向となり、1年生、2年生がもっとも長い時間を充てており、次いで4年生、5年生という順であった。ただし、全体で見ても7割以上は予習・復習を行っていないと回答しており、比較するものがあるわけではないが、学生の姿勢としては問題があるのではないかとと思われる。

C.課題類の評価 学年別比較



■役に立った ■まあ役に立った □あまり役に立たなかった □役に立たなかった ■無回答

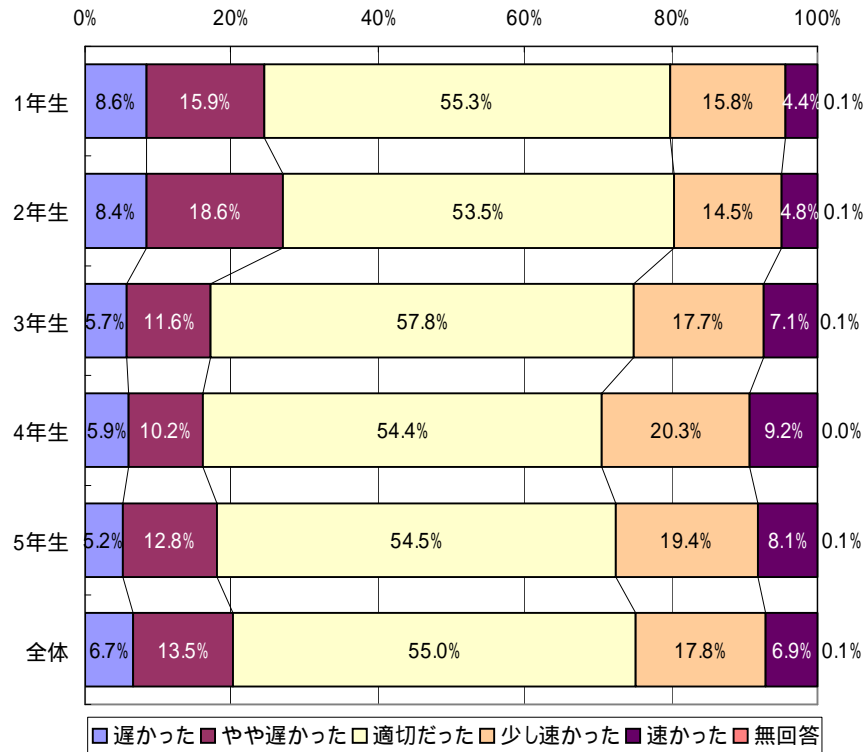
D.授業に対する予習・復習 学年別比較



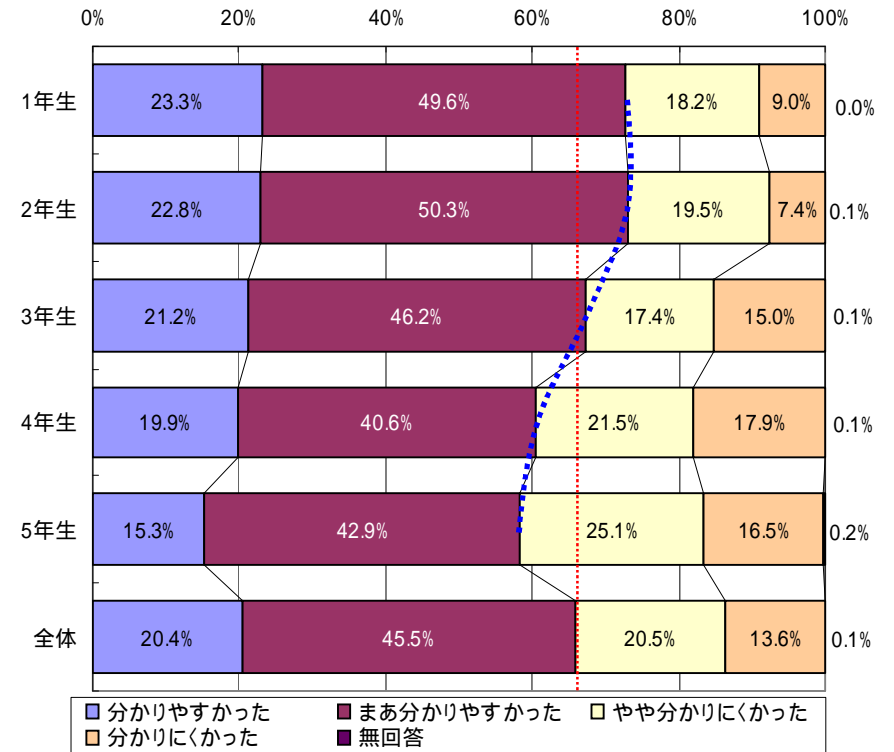
■60分以上 ■30分程度 □15分程度 □特に行わなかった ■無回答

- 「E.授業の速度」に関して、まず「適切だった」の割合を見ると、最も多かったのが3年生の57.8%であり、最も少なかったのは2年生の53.5%であった。その両者を比較しても差は4.3ポイントであり、あまり大きな差は見られなかった。
- 次に「遅かった」「やや遅かった」を加えたもので見ると、1年生、2年生が授業が遅いと感じているようであり、この2学年は「速かった」「少し速かった」も少なく、低学年のうちは授業が遅めであると感じていることが分かった。そして、3年生～5年生では速いと感じている意見が多めであり、特に4年生では29.5%が速いと感じていた。
- 「F.話し方など」に関しては高学年の方が厳しい評価をしている傾向が見られ、1年生と2年生はほぼ同程度の評価であるが、それ以外は高学年になるにつれて厳しい評価をしていた。これは「話し方が分かりにくい」というものだけでなく、「授業内容が難しくなるため授業自体が分かりにくい」といった理由も含まれていると思われる。

E.授業の速度 学年別比較

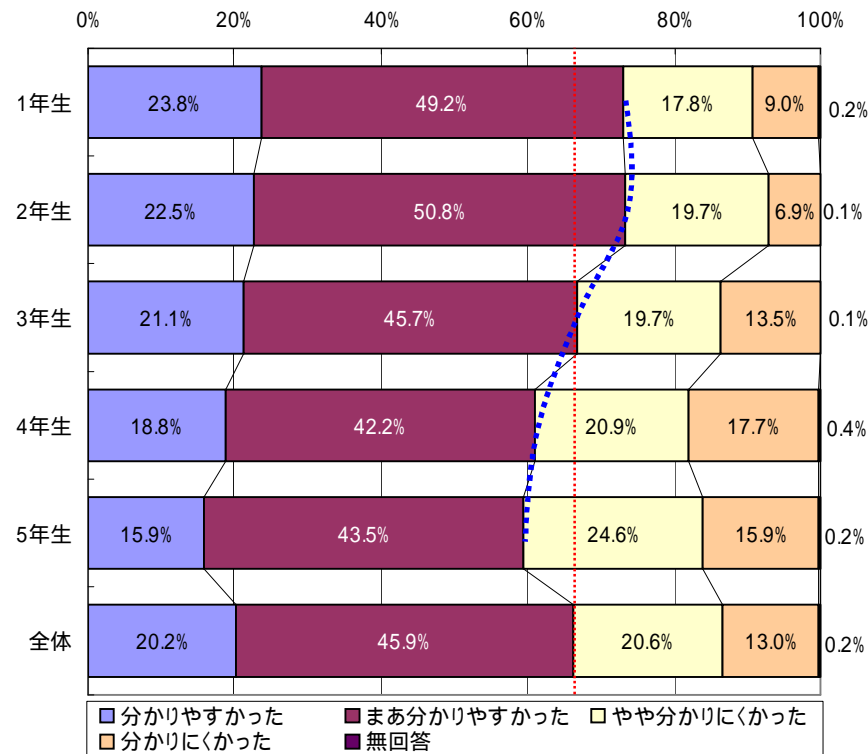


F.話し方など 学年別比較

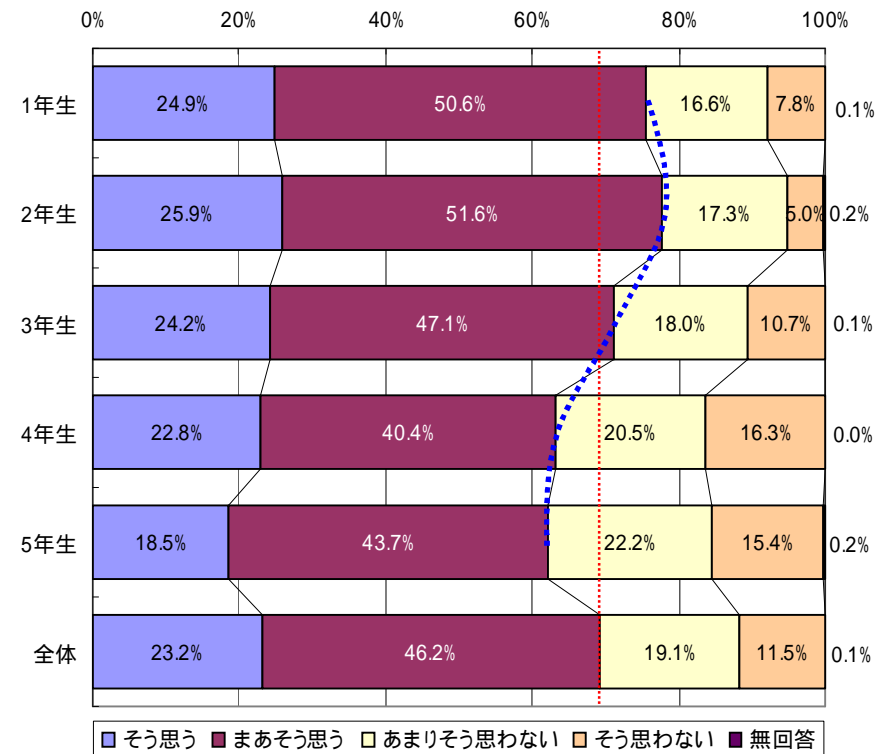


- 「G.板書や説明など」も学年毎の差は少ないものの高学年ほど分かりにくいという意見が多かった。ここでも1年生と2年生はほとんど同じような意見であったが、全体的には高学年ほど板書や説明などが分かりにくいという意見が多く、「分かりにくかった」「やや分かりにくかった」の合計を見ると、5年生の4割がそう回答している。
- ここでも「単純に板書や説明などが分かりにくい」というのではなく、「授業の内容が難しく板書や説明が理解できない」といった意見も含まれているものと思われる。
- 「H.授業の工夫など」は2年生よりも1年生の方が少し厳しい評価をしていたが、それ以外を見るとやはり高学年になるにつれて厳しい評価をしており、高学年では授業に対する工夫が十分でないと考えている学生が多いようであった。

G.板書や説明など 学年別比較

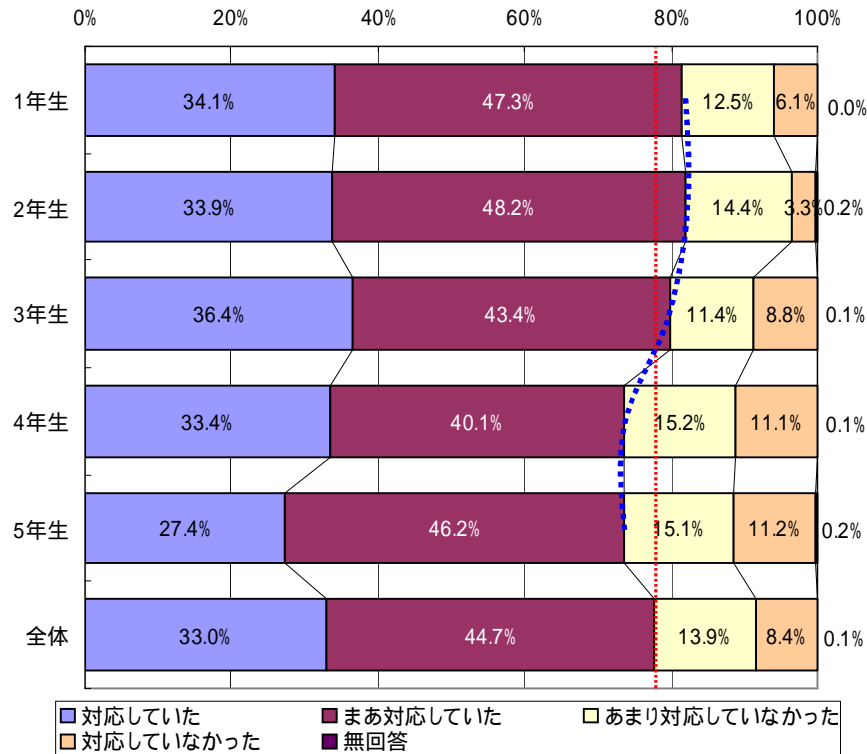


H.授業の工夫など 学年別比較

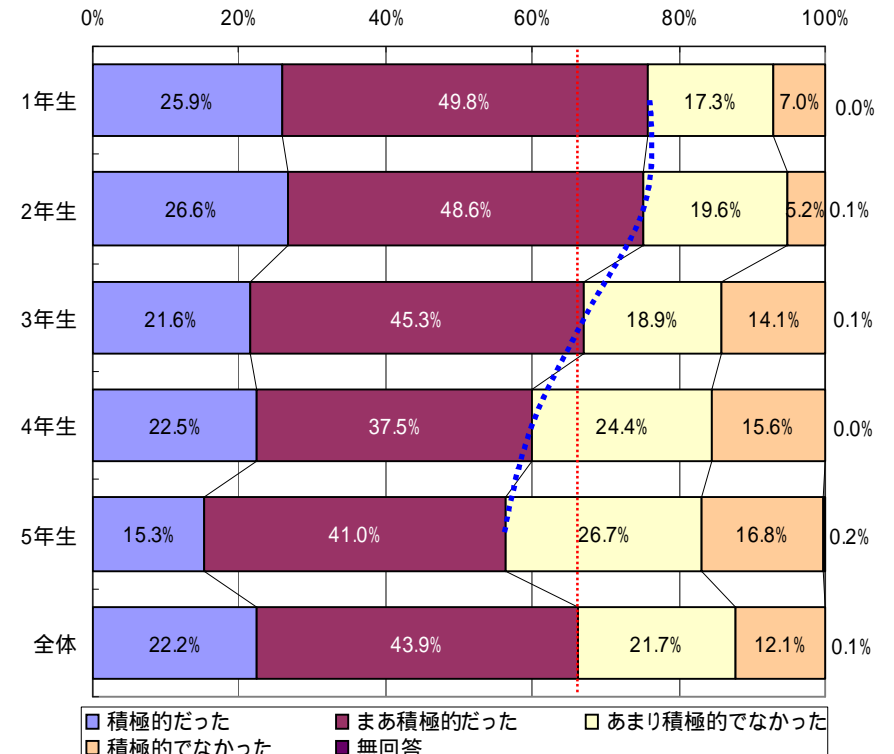


- 「I.質問への対応」に関しては学年による差が少なく、全体の8割前後はしっかり対応していたと答えており、評価は高いと言える。しかし、やはり高学年ほど厳しい見方をしているようであった。
- 「J.自分の取り組み」に関しては高学年の方が低いスコアであり、高学年ほど授業に積極的に取り組めていない状況が確認できた。
- ここでも1年生と2年生の差は小さく、75%程度は積極的に取り組んでいると回答していたが、3年生では66.9%に減少し、4年生で60.0%、5年生で56.3%という結果であった。
- ただし、「積極的だった」だけを見ると1年生から4年生までで2割以上見られ、どの学年でも一定の割合の学生がかなり積極的に授業に取り組んでいるようであるが、「まあ積極的」という層は高学年ほど減少するという傾向があるようであった。

I.質問への対応 学年別比較

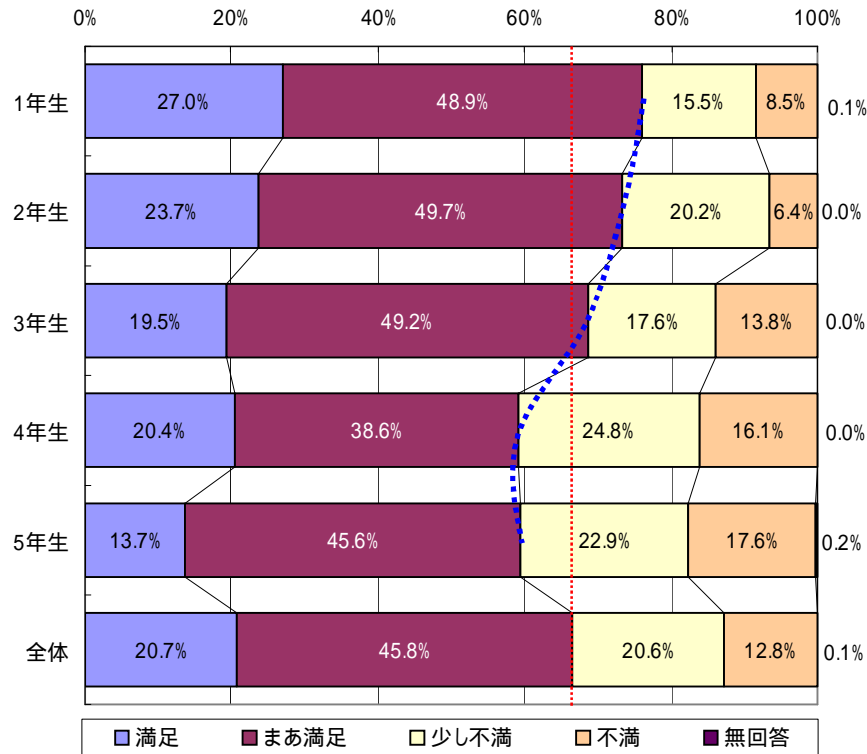


J.自分の取り組み 学年別比較



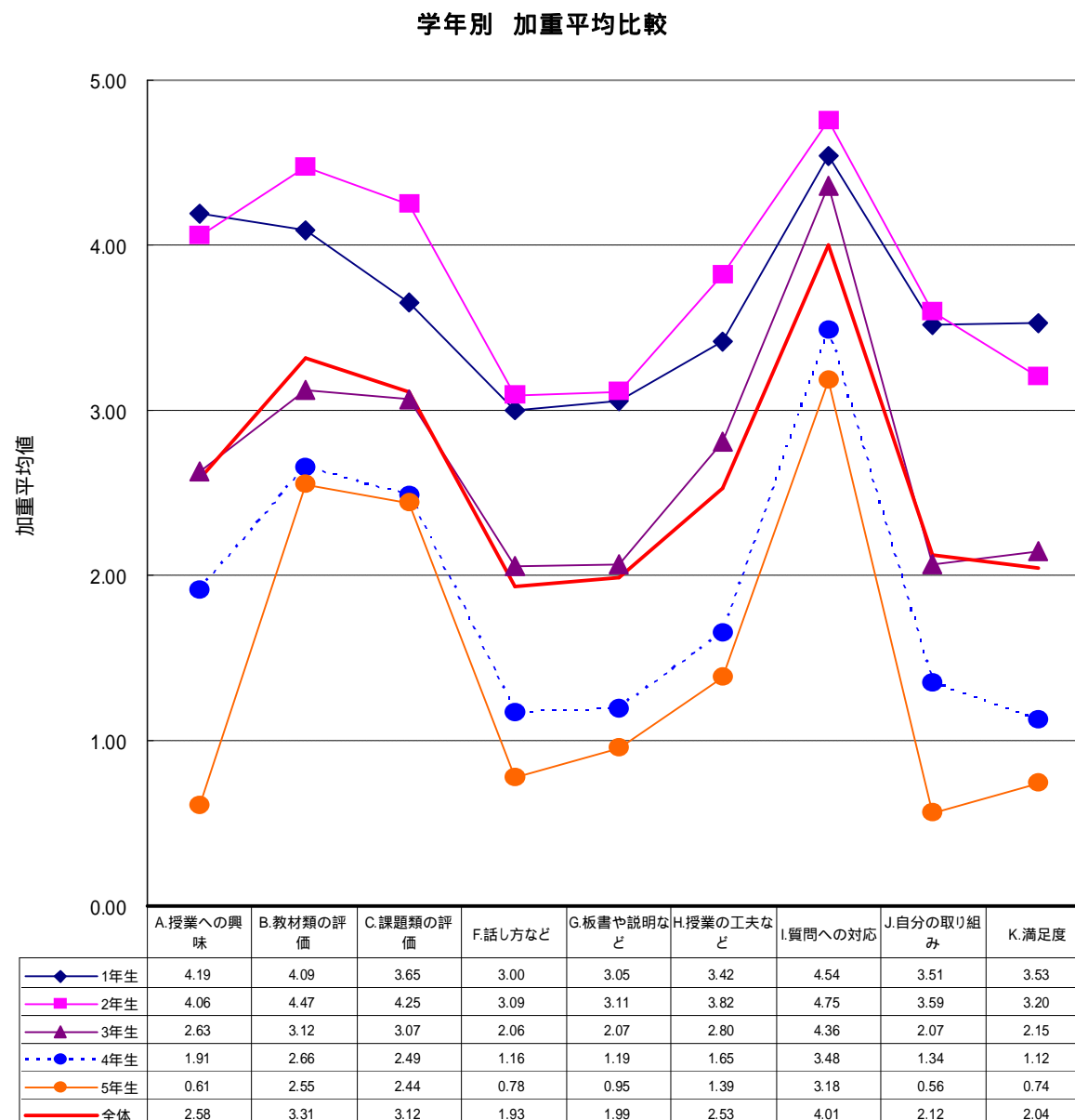
- 「K.満足度」もここまでに見てきた自分自身の取り組み姿勢と同様に、高学年ほど低下する傾向が見られた。
- 学年による差もやや大きく、最も満足度の高い1年生では75.9%が満足していたが、最も低い4年生では59.0%であり、その差は16.9ポイントであった。
- 「満足」と「まあ満足」を合わせたものを見ると5年生よりも4年生の方がわずかに満足度が低かったが、「満足」だけで比較すると4年生の方が多く、これらから見るとやはり5年生の方が満足度が低いと言えそうであった。

K.満足度 学年別比較



2) 学年別の加重平均比較

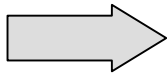
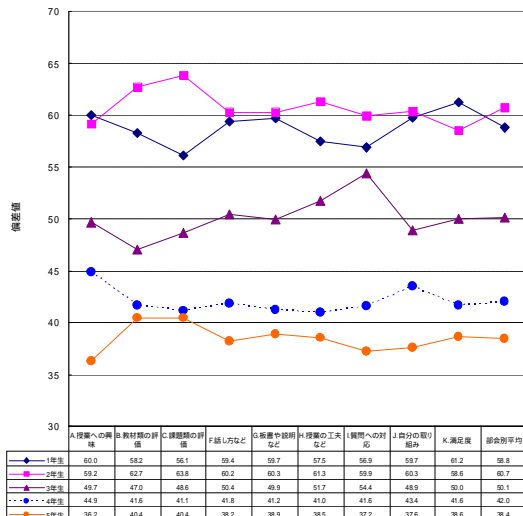
- 加重平均で学年別の比較を行った。
- 全体として目立っていたのは2年生の高さであった。「A.授業への興味」「K.満足度」という自分の取り組み姿勢である2つだけは1年生のスコアの方が高かったが、その他では2年生のスコアの方が高いことが確認できた。
- 次いで3年生はほとんどの項目で全体平均に非常に近いスコアであり、3年生を境目として平均スコアを下回るという状況が確認できた。
- 4年生と5年生の2学年を比較してみると、「A.授業への興味」「J.自分の取り組み」に関しての差が大きく、5年生の積極性の低さがうかがえるが、その他の項目では両者の差は小さいものであった。
- これらを見ると、1年生と2年生、4年生と5年生の評価が似通っており、3年生がその間という傾向がうかがえ、2年生から3年生、3年生から4年生にかけての変化が大きいと言え、この変化の要因を探ることが重要な課題であると言える。



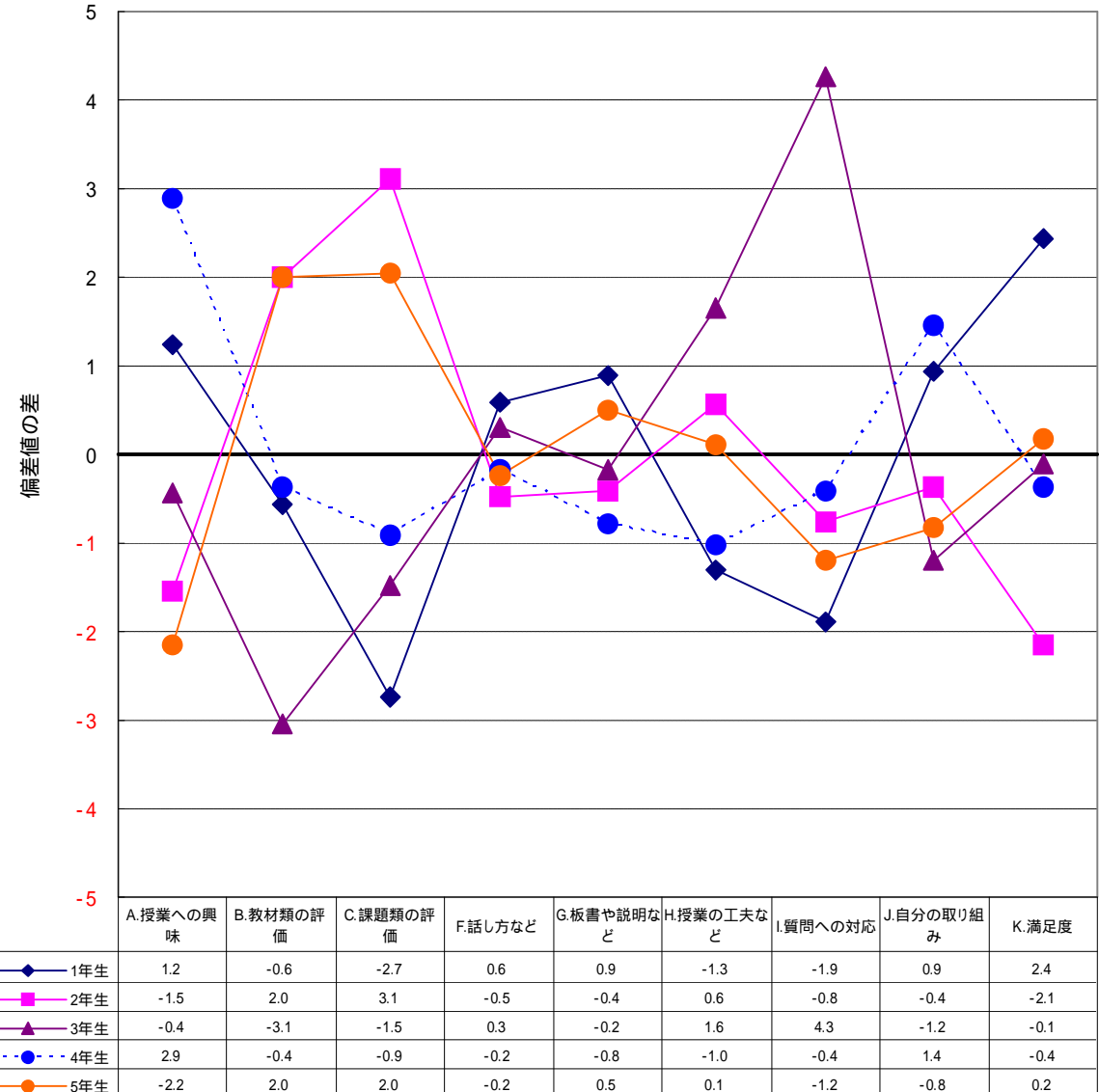
3) 学年別の偏差値による比較

- 部会別の分析と同様に学年毎の特徴をクローズアップするため、偏差値で分析を行った。
- 全体を見て最も特徴があったのは3年生であり、「I.質問への対応」「H.授業の工夫」は評価が高かったが、「B.教材の評価」は低めであった。
- 次に2年生は「C.課題類の評価」「B.教材類の評価」が高かったが、「A.興味」「K.満足度」が低く、取り組み姿勢に課題が見られた。
- 逆に、1年生と4年生は「A.興味」「J.取り組み姿勢」が高めであり、比較的積極的に取り組んでいるとすることができる。

学年別 偏差値による比較



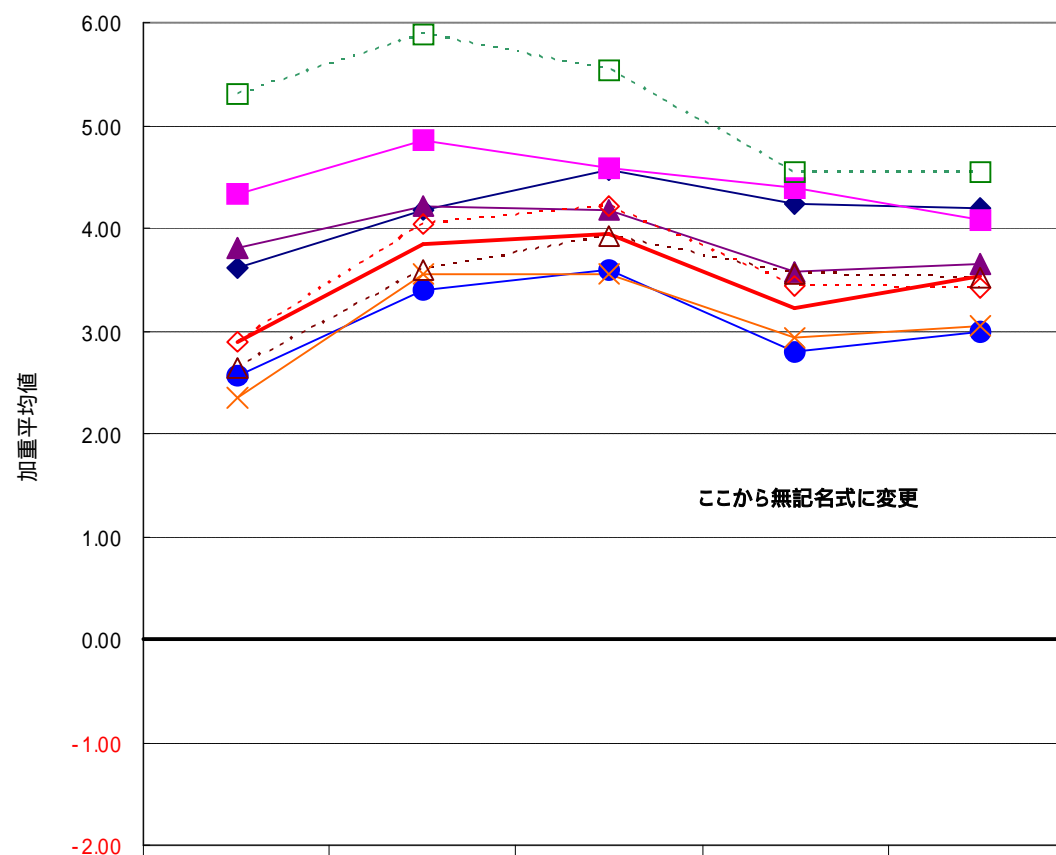
学年別 偏差値の学年平均との差
(各項目の偏差値 - 偏差値の学年平均)



4) 学年別の経年比較

- 学年別の経年変化はH15から5回分の比較を確認した。
- 1年生は大きな流れとしてはH15からH16までスコアアップし、その後H17にかけては大きな変化は見られなかった。そして、無記名化の影響のためかH18中にかけてはスコアが低下し、H18末にかけては大きな変化は見られないという結果であった。
- H16から継続的に低下傾向にあったのは「B.教材類の評価」「C.課題類の評価」「I.質問への対応」の3つであり、ツール類の評価が継続的に下がっているようであった。
- 上記の3つ以外はH17までスコアアップが続いていたが、H18中には全ての項目で低下していた。
- 1年生は他の学年と比べてスコアが高めであったが、H18中の低下が大きかったため2年生との差が小さくなり、現在に至っている。

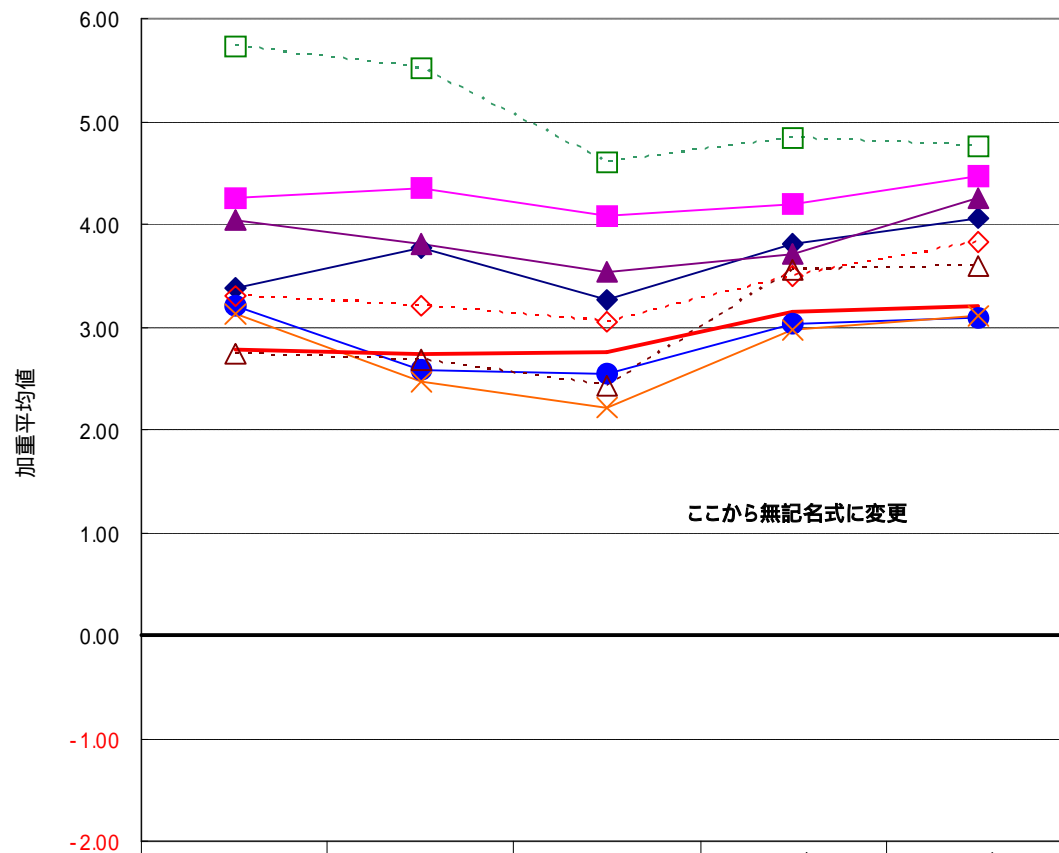
1年生 加重平均による設問毎の経年変化



	H15	H16	H17	H18中	H18末
◆ A.授業への興味	3.61	4.17	4.56	4.23	4.19
■ B.教材類の評価	4.32	4.86	4.58	4.38	4.09
▲ C.課題類の評価	3.80	4.22	4.17	3.57	3.65
● F.話し方など	2.56	3.41	3.60	2.80	3.00
× G.板書や説明など	2.35	3.56	3.55	2.93	3.05
◇ H.授業の工夫など	2.90	4.04	4.22	3.44	3.42
□ I.質問への対応	5.29	5.88	5.54	4.54	4.54
△ J.自分の取り組み	2.64	3.59	3.92	3.55	3.51
— K.満足度	2.89	3.85	3.94	3.23	3.53

- 2年生は比較的変動が少なく、ほとんどの項目はH15から横這い状態であった。
- 動きが大きかったのは「I.質問への対応」であり、H15には非常に評価が高く、全学年を通して最も高いスコアであった。しかし、H16、H17にかけて急激に評価が下がり、その後はH18末まで横這いであった。他の項目と比べてこの低下は急激であり、何らかの要因があるものと思われる。
- H17から「I.質問への対応」を除いた全てが継続的にスコアアップしており、無記名化の影響によるスコアダウンは全く見られなかった。
- 「K.満足度」はH15からH17まで横這いであったが、その後上昇して結果的にはH18末には今までで最も高いスコアとなっていた。
- また、「A.授業への興味」「J.自分の取り組み」もH17より大きく上がってきており、学生群自体は変わっているものの、H18の2年生は良い状態にあると言える。

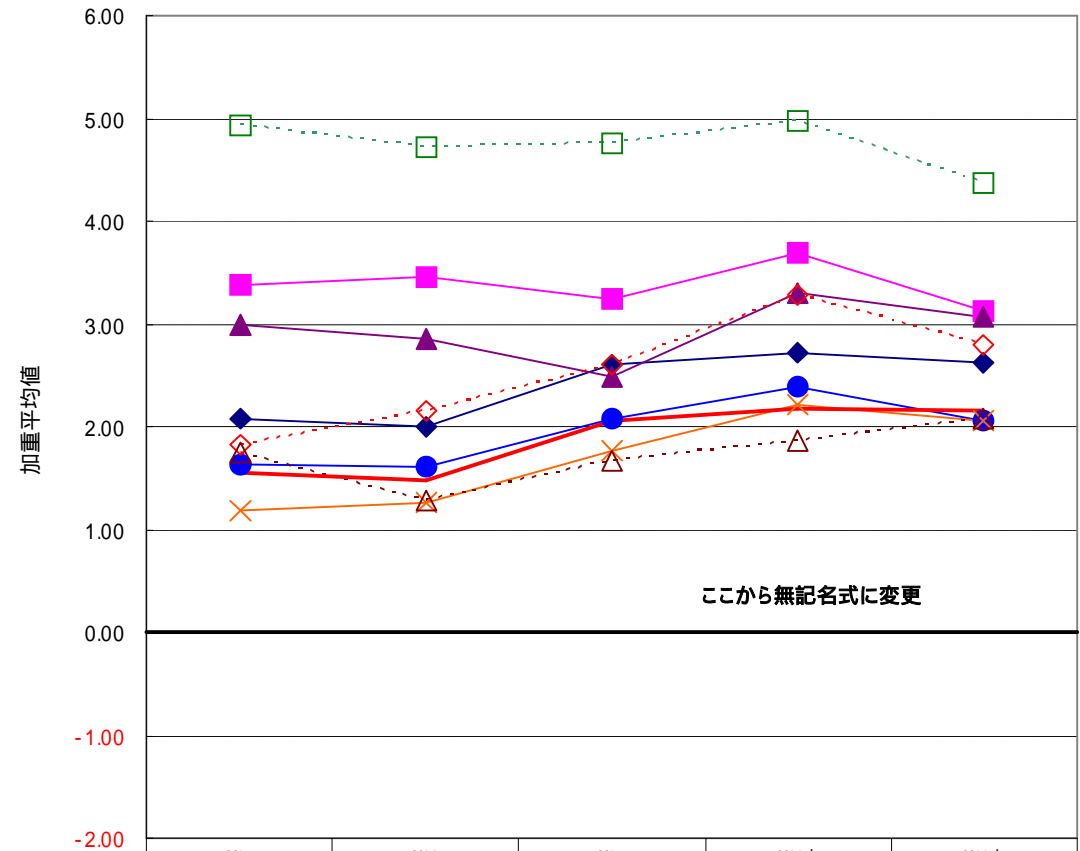
2年生 加重平均による設問毎の経年変化



	H15	H16	H17	H18中	H18末
◆ A.授業への興味	3.38	3.77	3.25	3.81	4.06
■ B.教材類の評価	4.25	4.34	4.08	4.19	4.47
▲ C.課題類の評価	4.05	3.80	3.54	3.71	4.25
● F.話し方など	3.20	2.59	2.54	3.02	3.09
× G.板書や説明など	3.13	2.46	2.21	2.97	3.11
◇ H.授業の工夫など	3.30	3.20	3.06	3.50	3.82
□ I.質問への対応	5.72	5.51	4.60	4.83	4.75
△ J.自分の取り組み	2.73	2.69	2.43	3.55	3.59
— K.満足度	2.77	2.73	2.76	3.14	3.20

- 3年生も動きは小さく、いくつかの例外はあるものの、H15からH18中までは全体的にスコアがアップする傾向にあった。
- H15からH16にかけてはほぼ横這いであったが、その後H18中までは継続的にスコアがアップする状況にあり、ここでもH18中の無記名化による影響は見られなかった。
- その後、H18中からH18末の半年間にスコアがダウンするものが多かったが、動きは小さいものであった。
- 「K.満足度」はH15からH16にかけてわずかにダウンしたものの、その後は徐々に良くなっており、H18中からH18末にかけては横這いという状況で、長期的に見ると満足度は向上していると言える。
- また、「A.授業への興味」はH18中からH18末にかけてわずかにダウンしているものの、「J.自分の取り組み」はH16を底として確実に上昇してきており、学生の積極性は増し、満足度も徐々にではあるが向上していると言える。

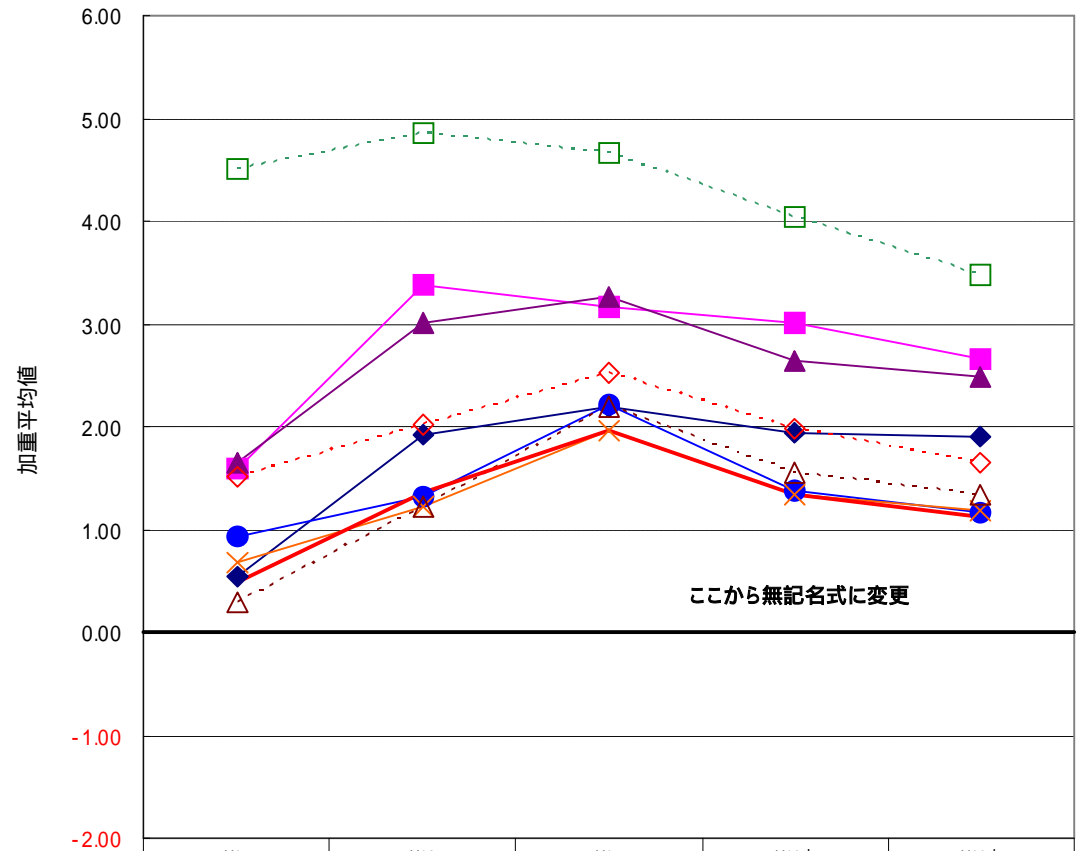
3年生 加重平均による設問毎の経年変化



	H15	H16	H17	H18中	H18末
◆ A.授業への興味	2.08	2.00	2.60	2.72	2.63
■ B.教材類の評価	3.39	3.46	3.25	3.69	3.12
▲ C.課題類の評価	3.00	2.86	2.49	3.31	3.07
● F.話し方など	1.63	1.62	2.08	2.38	2.06
× G.板書や説明など	1.19	1.25	1.76	2.21	2.07
◇ H.授業の工夫など	1.83	2.15	2.61	3.28	2.80
□ I.質問への対応	4.93	4.72	4.76	4.96	4.36
△ J.自分の取り組み	1.75	1.28	1.67	1.87	2.07
— K.満足度	1.56	1.47	2.06	2.18	2.15

- 他の学年と比較すると4年生ではやや大きな動きが見られた。
- いくつか例外はあるが、全体の流れを見るとH15からH17にかけてスコアがアップして、その後はマイナスに転じており、H18末は比較的低いスコアとなっていた。
- 例外であったのは「B.教材類の評価」「I.質問への対応」の2つであり、これらはH17から継続的に低下傾向にあった。
- 「K.満足度」もH15から上昇してH17がピークとなり、そこからH18末まで低下を続けていた。そして、H15のレベルには至っていないが、それに次ぐ満足度の低さであり、状況としては非常に良くない傾向にあると言える。
- また、「A.授業への興味」「J.自分の取り組み」もH18中から低下傾向にあり、授業に対する取り組み姿勢も良くないことが分かる。
- 学生群は変わっているものの、4年生は全学年の中で最も良くない状況にあると言え、このようになった要因を探っておく必要があると言える。

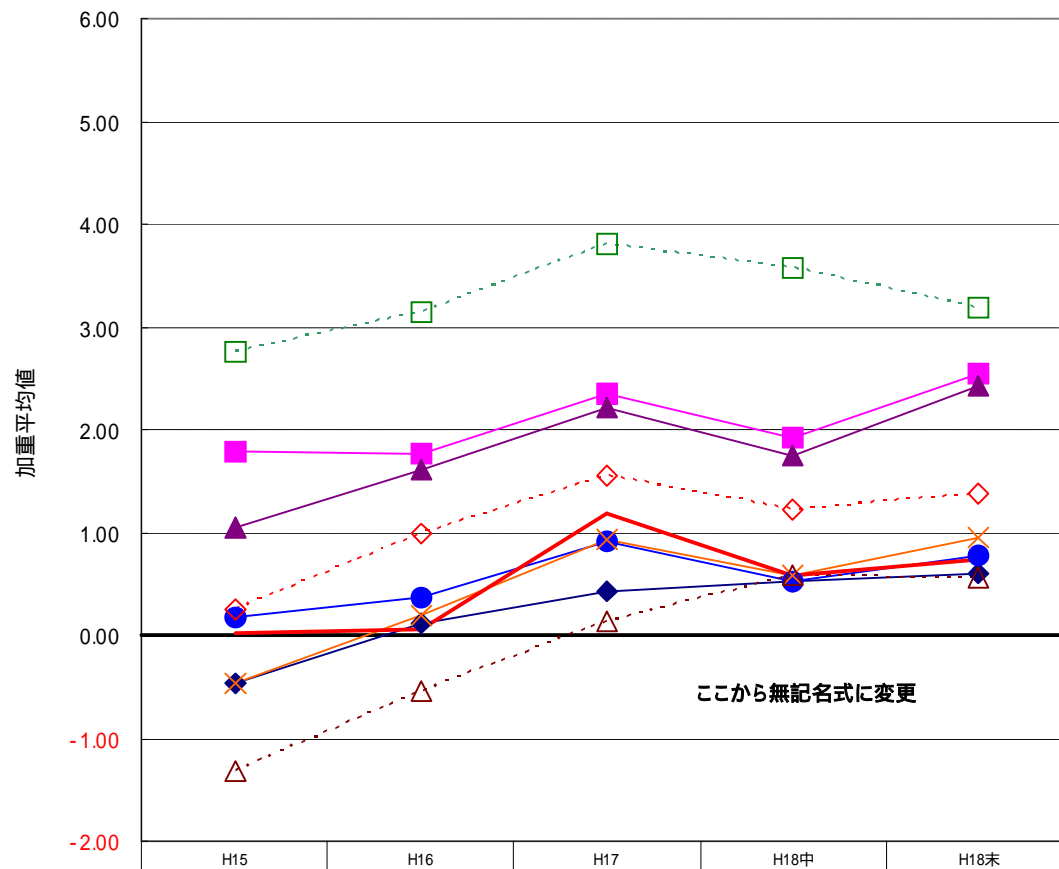
4年生 加重平均による設問毎の経年変化



	H15	H16	H17	H18中	H18末
◆ A.授業への興味	0.55	1.92	2.20	1.95	1.91
■ B.教材類の評価	1.59	3.37	3.16	3.02	2.66
▲ C.課題類の評価	1.65	3.02	3.27	2.63	2.49
● F.話し方など	0.94	1.31	2.20	1.39	1.16
× G.板書や説明など	0.68	1.22	1.96	1.34	1.19
◇ H.授業の工夫など	1.52	2.02	2.53	1.99	1.65
□ I.質問への対応	4.51	4.85	4.65	4.04	3.48
△ J.自分の取り組み	0.30	1.22	2.20	1.56	1.34
■ K.満足度	0.49	1.36	1.96	1.35	1.12

- 5年生はH17からH18中にかけて、無記名化の影響とも考えられるスコアダウンがあるが、それ以外は基本的にスコアが上昇する流れがあるようであった。
- H15の段階では「J.自分の取り組み」「G.板書や説明など」「A.授業への興味」の3つがマイナススコアであり、「K.満足度」もほとんどゼロという、非常に悪い状況にあった。
- しかし、その後は継続的にスコアアップが続いており、特に「A.授業への興味」「J.自分の取り組み」の2つはH18末にかけて継続的にスコアがアップしており、学生の授業に対する取り組み姿勢は徐々にではあるが良くなっていると言える。
- 「K.満足度」もH17からH18中にマイナスとなったものの、これは無記名化の影響と思われ、今後どのように変化していくのか、期待を持って追跡できると言える。
- その他では、「I.質問への対応」のみH17から低下が続いているが、その他の項目はH18中からH18末にかけて大きくアップしており、期待が持てると言える。
- 他の学年と比較すると5年生が最もH18中の無記名化の影響を受けているようにも見えるが、年長だけあって記名に気を使った回答をしていたとも考えられる。

5年生 加重平均による設問毎の経年変化



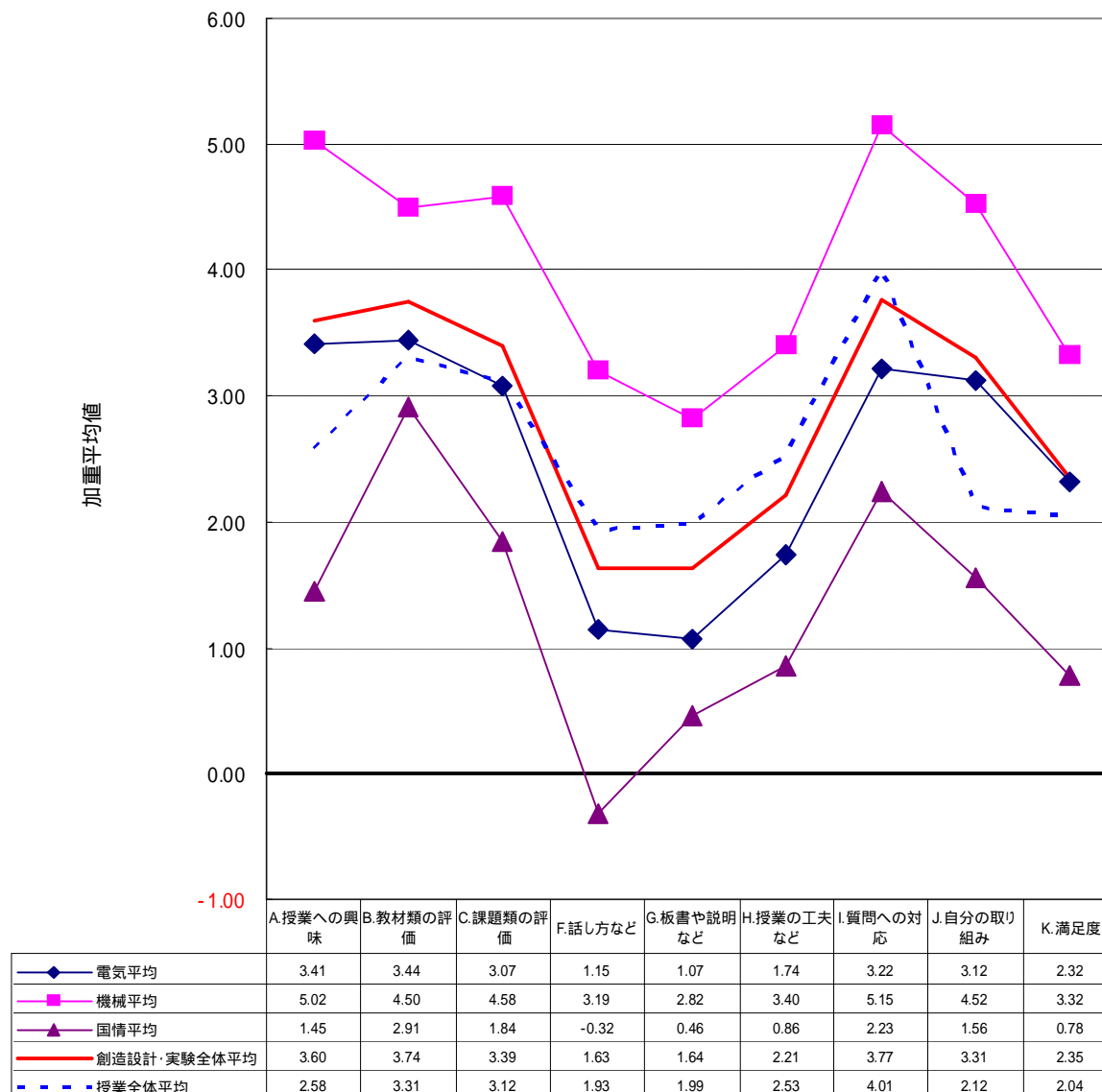
	H15	H16	H17	H18中	H18末
◆ A.授業への興味	-0.46	0.12	0.42	0.53	0.61
■ B.教材類の評価	1.79	1.76	2.35	1.92	2.55
▲ C.課題類の評価	1.05	1.62	2.21	1.74	2.44
● F.話し方など	0.18	0.36	0.92	0.52	0.78
× G.板書や説明など	-0.48	0.19	0.93	0.58	0.95
◇ H.授業の工夫など	0.26	1.00	1.56	1.22	1.39
□ I.質問への対応	2.75	3.14	3.81	3.58	3.18
△ J.自分の取り組み	-1.32	-0.55	0.13	0.59	0.56
— K.満足度	0.03	0.06	1.19	0.58	0.74

< 5 > 創造設計・実験に関して

1) 部会別加重平均比較

- 特別な科目として「創造設計、実験」だけを抽出し、部会別に比較した。
- まず、赤い線の「創造設計・実験全体平均」と青い破線の「授業全体平均」を比較すると、「F.話し方」「G.板書や説明」「H.授業の工夫」「I.質問への対応」は授業全体平均の方が高かったが、「A.授業への興味」「J.自分の取り組み」「K.満足度」といった自分自身の姿勢を含んだ5項目は「創造設計・実験」全体平均の方が高く、積極的に取り組んでいる姿勢がうかがえた。
- 部会別の比較では「機械」が全ての項目で最もスコアが高く、中でも「A.授業への興味」が非常に高い点が目立っていた。
- 他の科目では「機械」に次いで「国情」のスコアが高めであったが、ここでは「電気」の方が上回っていた。この傾向はH18中も見られたが、H18末にはその差が開いており、「国情」では「創造設計・実験」の満足度、評価が低めであるという特徴が見られた。

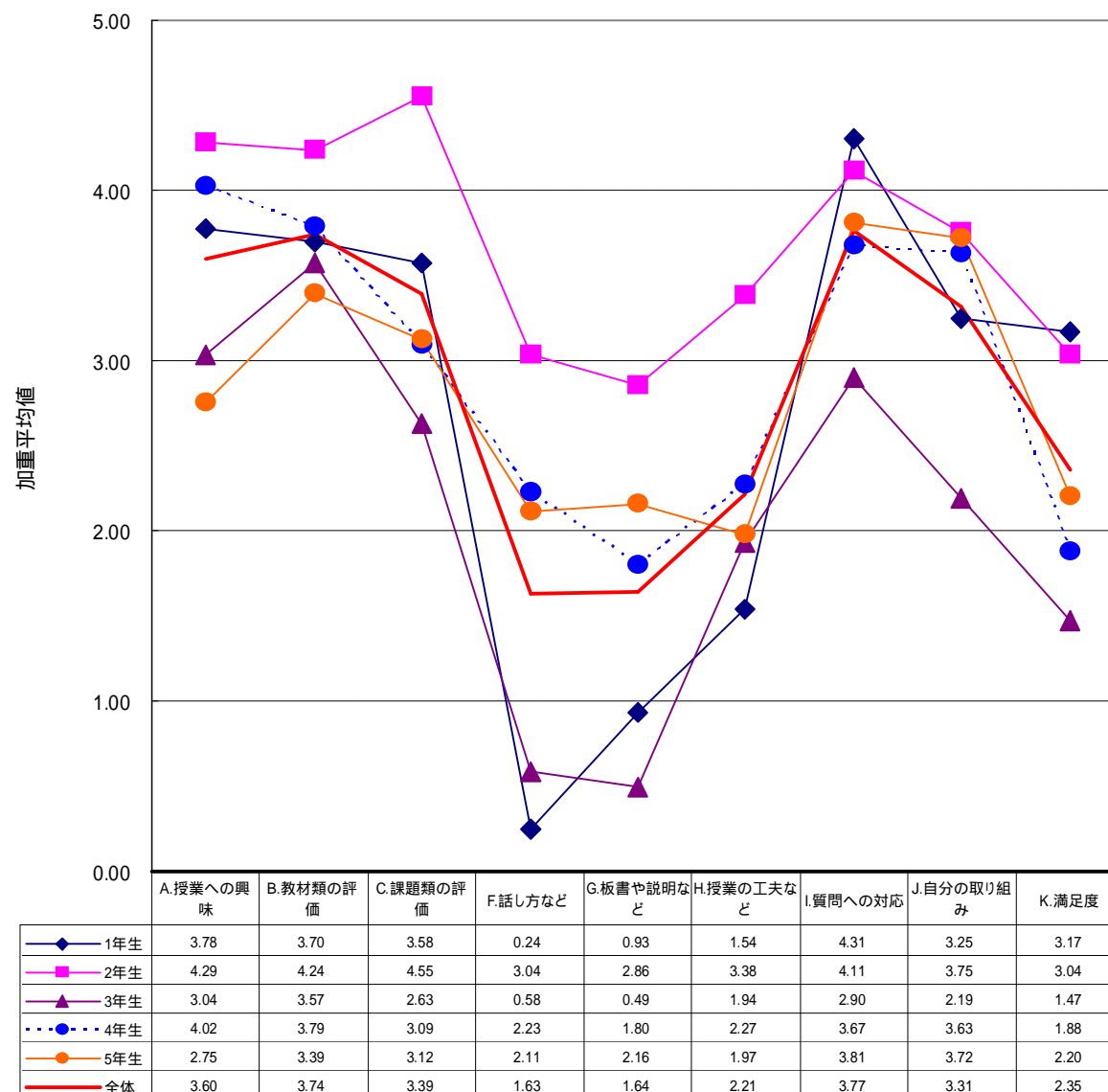
創造設計・実験評価 部会別比較



2) 学年別加重平均比較

- 学年別に「創造設計・実験」の比較を行ったところ、ここでも他の科目との差が見られた。
- 他の科目では1年生と2年生が接近していたが、ここでは完全に2年生のスコアの方が高く、1年生は非常に低い項目も見られた。個別に見ると1年生は「K.満足度」は高いにも係わらず、「F.話し方」「G.板書や説明」「H.授業の工夫」などが非常に低く、積極的に取り組んでいるものの、進め方が他の科目と異なるなど、理解が追いついていない部分がありそうであった。
- その他では、4年生と5年生に特徴が見られた。他の科目では4年生と5年生は同程度のスコアで全体の中では低めであったが、「創造設計・実験」ではやや高めであった。しかし、「K.満足度」は低く、授業としては分かりやすいと感じているが、決して満足しているわけではないようであった。
- そして、3年生の低さが目立っていた。他の科目では平均値に近かったが、ここでは最も低いと言って良く、特に「J.自分の取り組み」「K.満足度」が低く、3年生に対する「創造設計・実験」のあり方には課題がありそうであった。

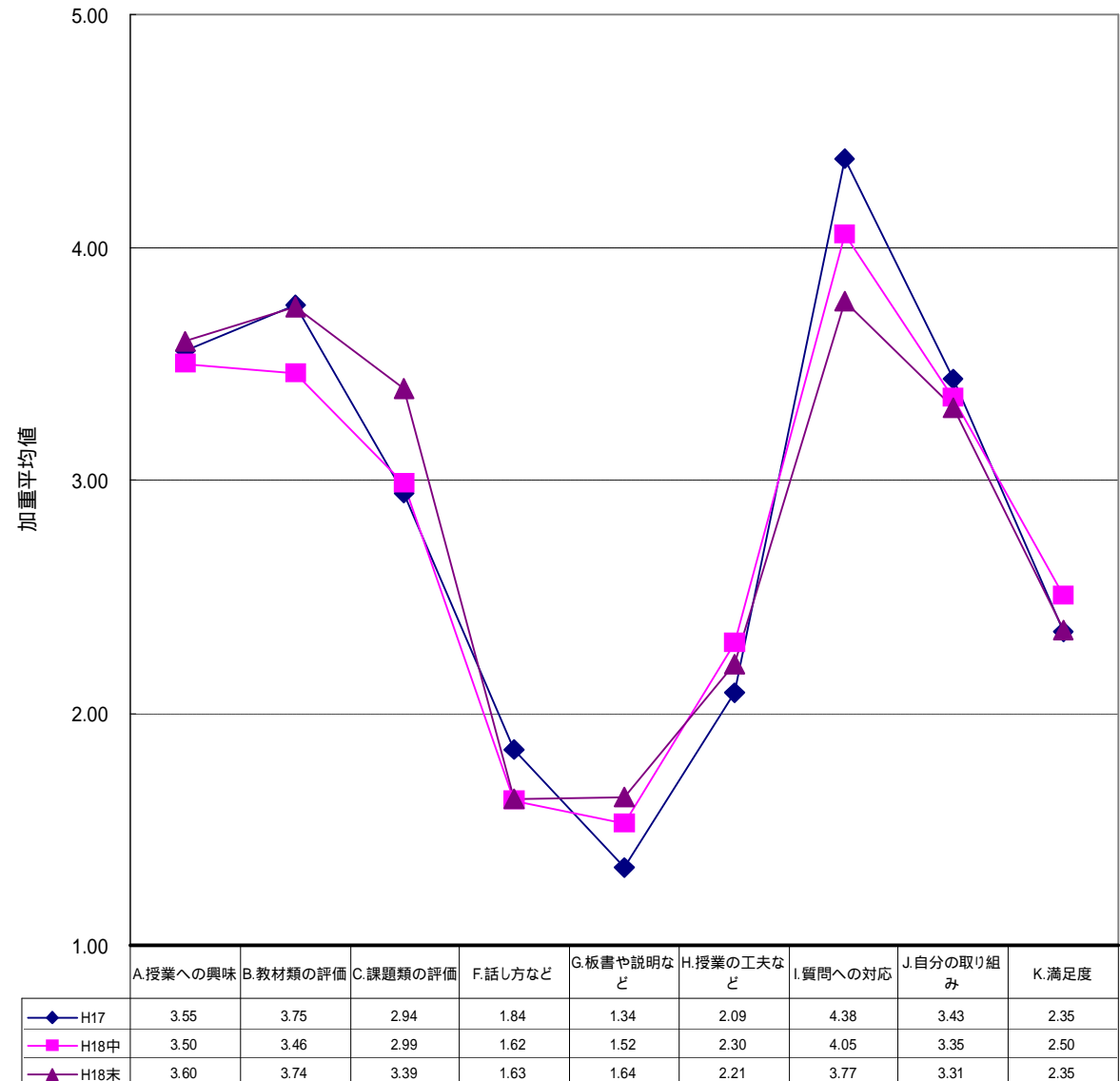
創造設計・実験評価 学年別比較



3) 年度別加重平均比較

- 「創造設計・実験」に関する分析を3回続けているため、それらの比較を行ったが、グラフのようにそれらの間にはほとんど差は見られなかった。
- H18末には「C.課題類の評価」「G.板書や説明など」のスコアがやや高く、「I.質問への対応」がやや低い傾向が見られたものの、差としては非常に小さく、「創造設計・実験」の評価は時系列ではそれほど変わっていないと言える。

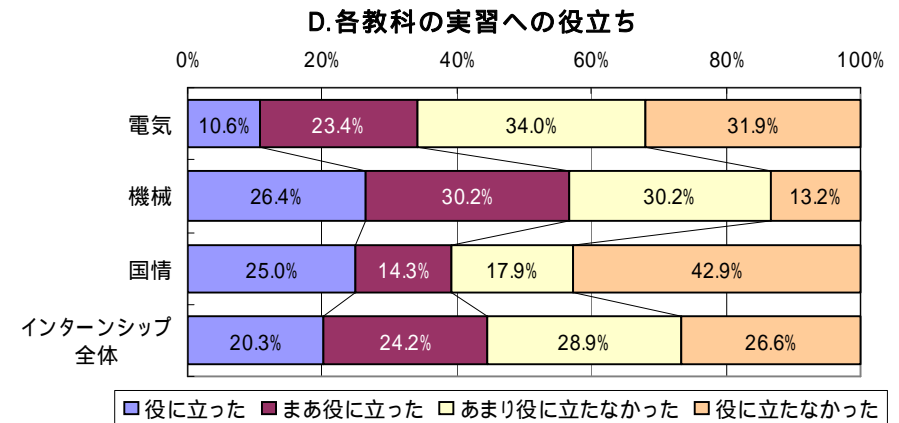
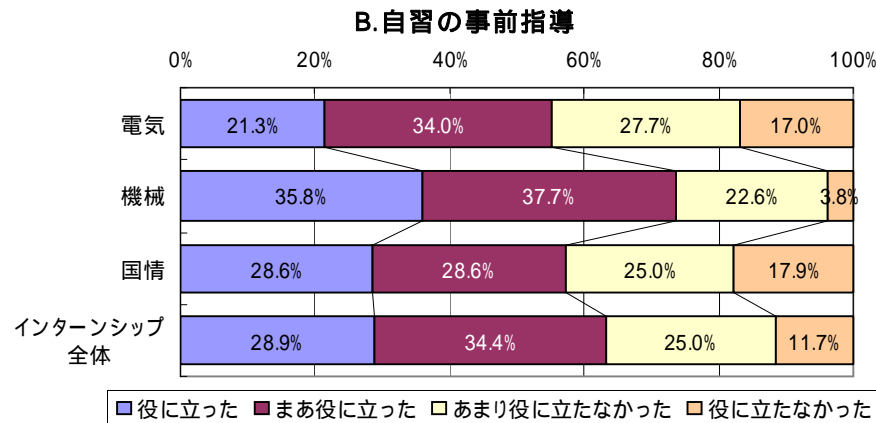
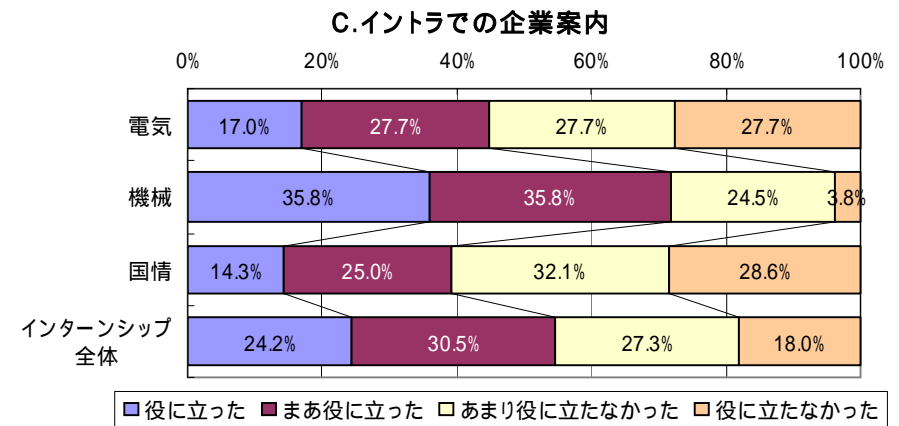
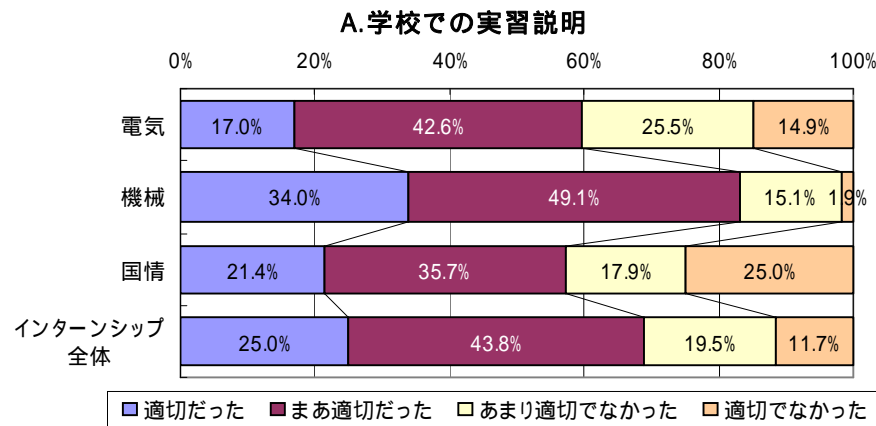
創造設計・実験評価 年度別比較



<6> インターンシップに関して

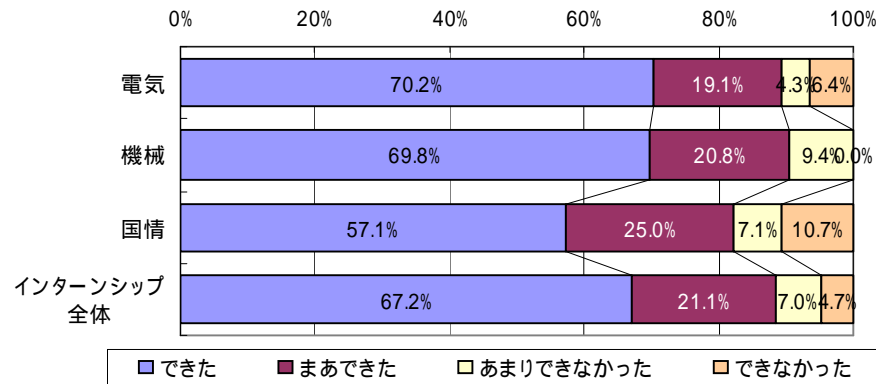
1) 全設問の単純集計

- 今回、「インターンシップ」の科目は全17設問が独自の設問であったため、他の科目とは分けて独自に集計を行った。独自設問を使ったのは今回のみであるため、経年変化を見ることはせず、部会毎の比較で状況を確認した。
- 「A.学校での実習説明」に関しては「適切だった」が25.0%、「まあ適切だった」が43.8%であり、合わせると68.8%は説明が適切であったと感じていた。部会毎に比較すると、「機械」で適切であったと評価する意見が多めであった。
- 「B.自習の事前指導」に関して、役に立ったという意見は63.3%であり、ここでも「機械」で役に立ったという意見が多く見られた。
- 「C.イントラでの(実習先企業の)企業案内」に関しては、54.7%が役に立ったと感じており、過半数に至っているものの、他の設問と比較すると役立ち度は低いようであった。そして、部会毎に比較すると、他と同様に「機械」の評価が高かった。
- 「D.(高専の)各教科の実習への役立ち」では、役に立ったという回答は合計で44.5%であり半数に達せず、学習している教科がインターンシップに役立っているとはあまり感じていないようであった。部会別に見ると「機械」の高さと「電気」の低さが目立っていた。

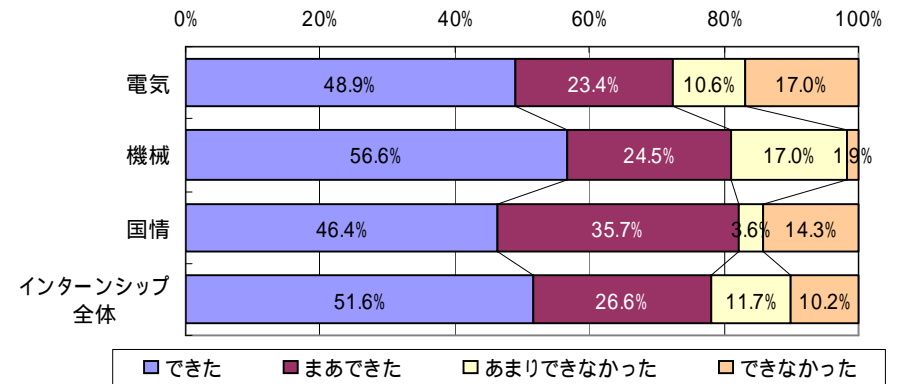


- 「E.(実習では)挨拶をし、礼儀(や時間)を守れたか」という問いに対しては、67.2%が「できた」と答えており、「まあできた」と合わせると88.3%と大多数が挨拶をし、礼儀を守っていたようであった。部会別では「国情」でできたという意見がやや少なめであった。
- 「F.(実習に)積極的に取り組めたか」という質問では、半数の50.0%が「取り組めた」、34.4%が「まあ取り組めた」と回答しており、合わせると84.4%は積極的に取り組んでおり、学生の前向きな姿勢がうかがえた。部会別では「国情」で積極的だったという回答が75.0%にとどまっております、やや消極的なようであった。
- 「G.新しい知識を得ることができたか」に関してもできたという意見は多く、「できた」「まあできた」を合わせると78.2%ができたと感じていた。そして、部会の差は小さかったが、「できた」と「まあできた」の合計で「国情」が「機械」を上回っている点が特徴的であった。
- 「H.実習での作業内容の満足度」で「満足」と「まあ満足」の合計を見ると、全体では63.2%と過半数は作業内容に満足していると回答していた。部会別では他と同様に「機械」の満足度が最も高かったが、「国情」の満足度が非常に低く、満足という回答は半数に至らなかった。

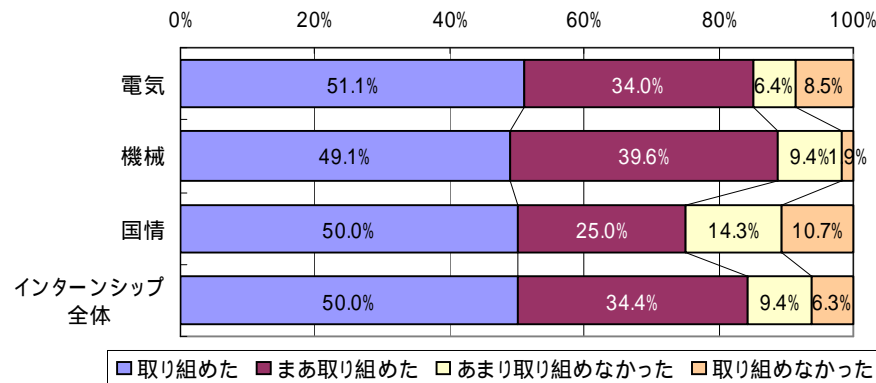
E.挨拶をし、礼儀をまもれたか



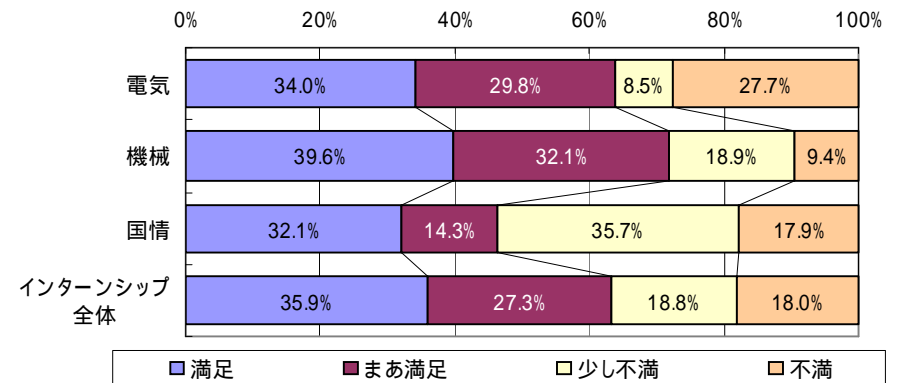
G.新しい知識を得ることができたか



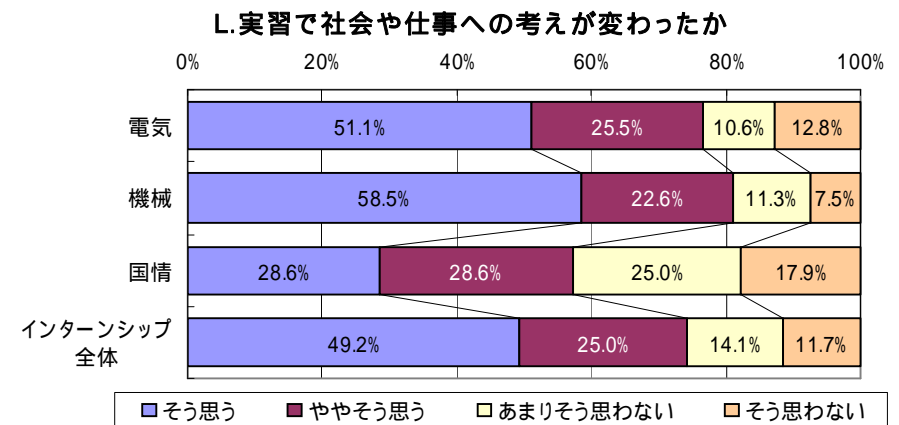
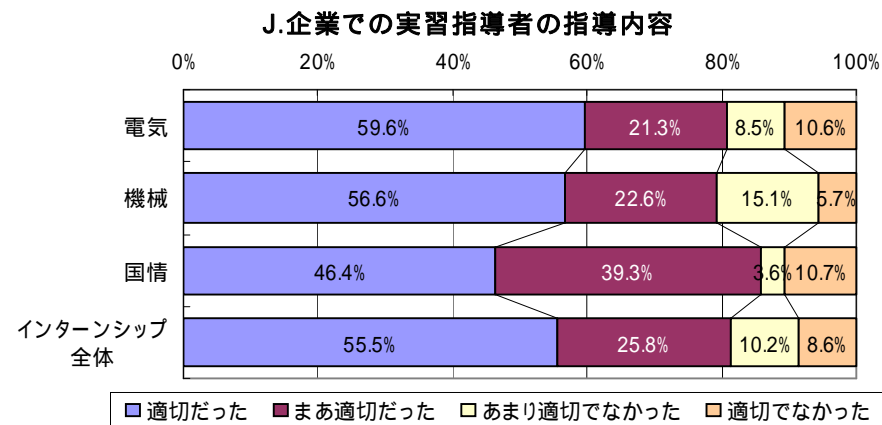
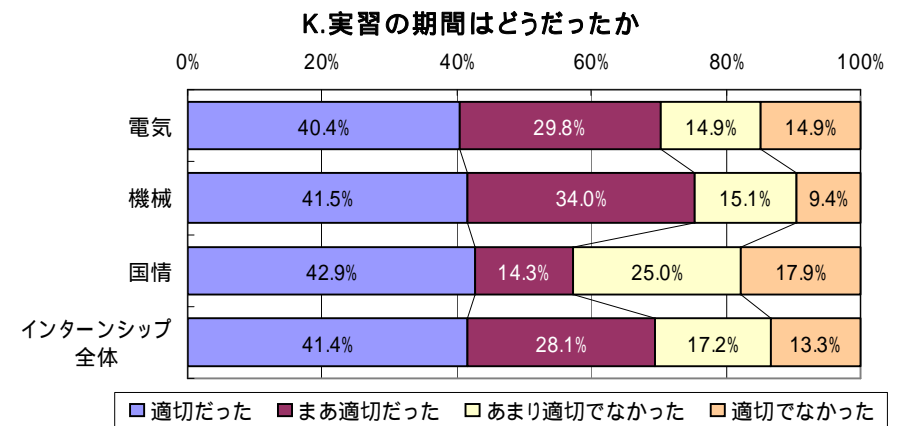
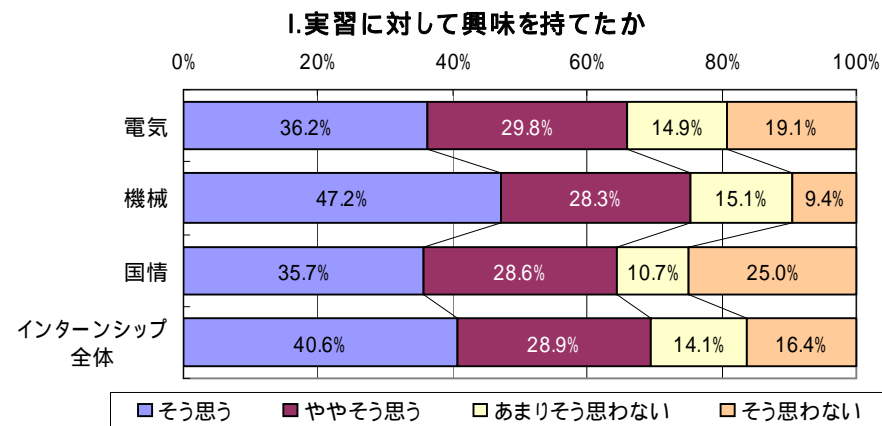
F.積極的な取り組み



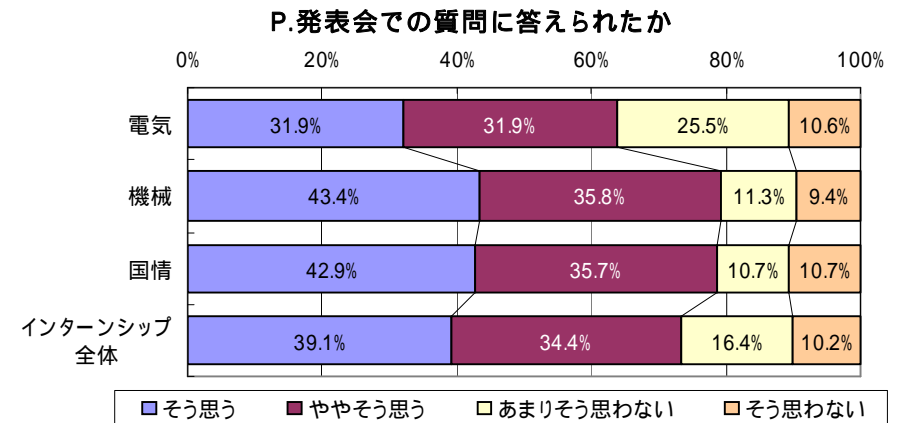
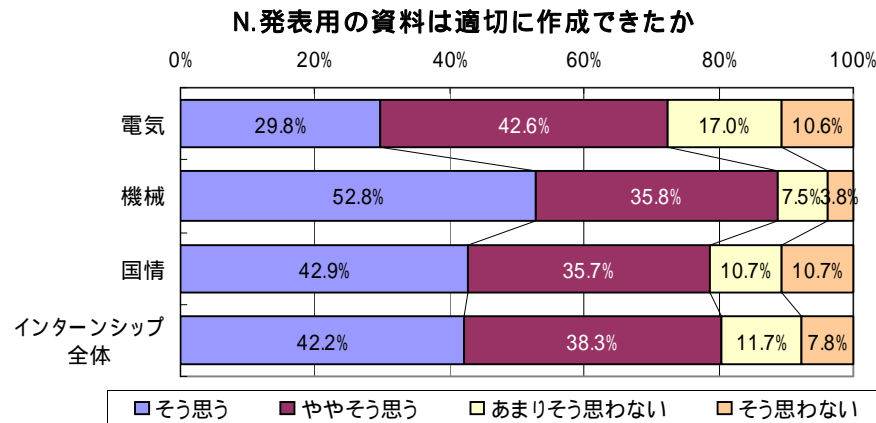
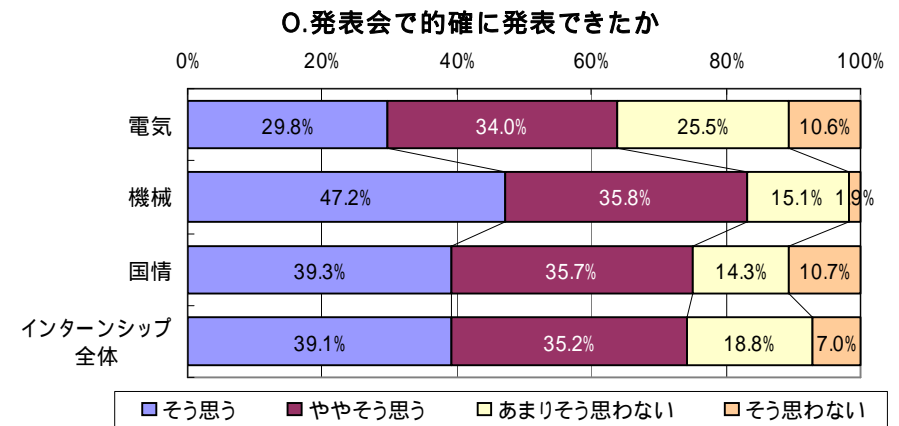
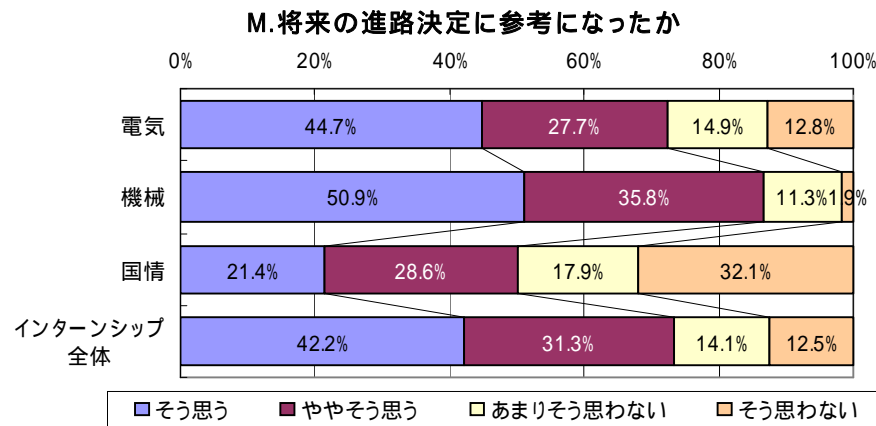
H.実習での作業内容の満足度



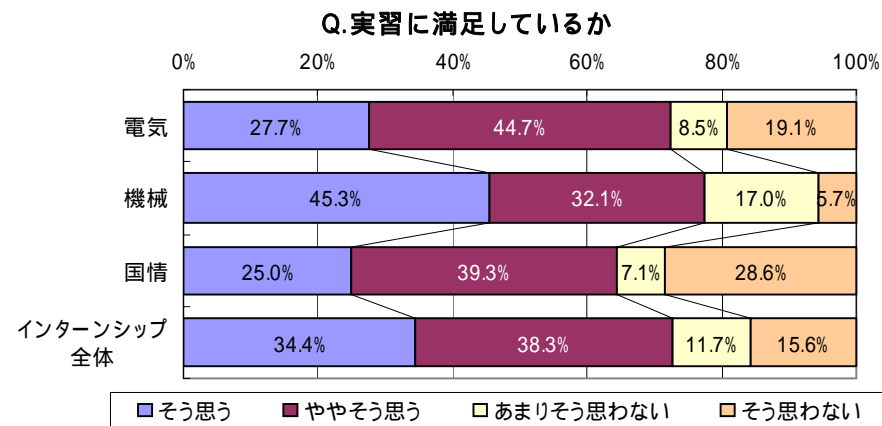
- 「I.実習に対して興味を持てたか」では、「そう思う」と「ややそう思う」の合計が69.5%であり、7割は興味を持って取り組んでいた。部会別では「機械」が強く興味を持っているようであり、この興味の強さが他の項目のスコアの高さに結びついているものと思われる。
- 「J.企業での実習指導者の指導内容」に関しては、適切だったという回答は81.3%であり、しっかりと指導されている様子がうかがえた。部会別では特徴があり、「適切だった」だけを見ると「電気」が最も多く「国情」が少なかったが、「まあ適切だった」を加えると「国情」が最も多かった。「国情」は強く指導内容を評価しているわけではないが、どちらかといえば適切だったと感じている学生が多いようであった。
- 「K.実習の期間はどうか」に関しては、「適切だった」が41.4%、「まあ適切だった」が28.1%で、合わせると69.5%適切だと考えていた。部会別では「国情」で適切でないと考えている意見が多かったが、これが短いと感じているのか、長いと感じているのかは不明であった。
- 「L.実習で社会(企業)や仕事への考えが変わったか」に関しては「そう思う」が49.2%、「ややそう思う」が25.0%で、全体の74.2%は考えが変わったと答えていた。そして部会別には差が大きく、「国情」では考えが変わったという意見が57.2%と、最も少なかった。



- 「M.将来の進路決定に参考になったか」に対して、「そう思う」は42.2%、「ややそう思う」は31.3%であり、合わせると73.5%が参考になったと感じていた。そして、部会別では「機械」が最も参考になったと感じており、「国情」では参考になったという意見が50.0%にとどまっていた。
- 「N.(校内)発表用の資料は適切に作成できたか」では、42.2%が「そう思う」、38.3%が「ややそう思う」と答えており、合計で80.5%は資料が適切に作成できたと感じていた。そして部会別では、「電気」で適切にできたという割合が少ない点が目立っていた。
- 「O.(校内の)発表会で適切に発表できたか」に関して、「そう思う」と「ややそう思う」の合計を見ると、74.3%が適切に発表できたと感じていた。部会別の比較では、「電気」で「そう思わない」「あまりそう思わない」の合計がやや多めであった。
- 「P.発表会での質問に(適切に)答えられたか」では、39.1%が「そう思う」、34.4%が「ややそう思う」と答えており、合わせると73.5%は質問にはしっかりと回答できていたようであった。そして部会別では、「機械」でそう思うという回答が多かったものの「国情」もあまり変わらず、「電気」がやや低めであった。



- 「Q.実習に満足しているか」に関して、「そう思う」と「ややそう思う」を合わせたものを見ると、全体では72.7%が満足しているようであり、満足度は高めであったと言える。ただし、「そう思わない」が15.6%、「あまりそう思わない」は11.7%と、合わせて27.3%がインターンシップに不満を持っており、この不満を解消することが今後の課題になると言える。
- 部会別ではここまでに見てきたとおり「機械」の満足度が最も高く、「ややそう思う」までを合わせると77.4%が満足していた。特に「そう思う」が45.3%と、非常に多い点が目立っていた。
- 「機械」に次いで「電気」では72.4%が満足、「国情」では64.3%が満足しており、「機械」と「国情」では13.1ポイントの差があった。



<7> 達成度に関して

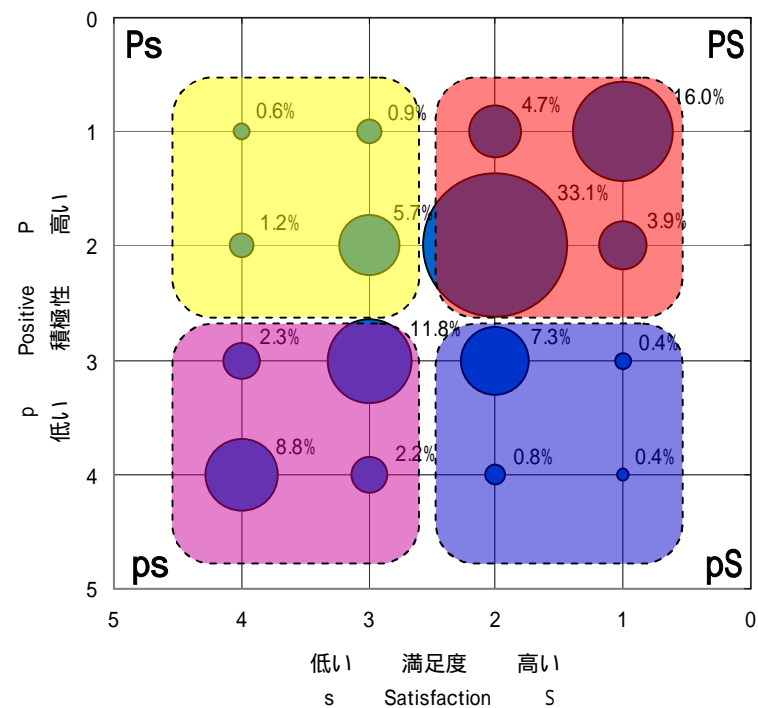
1) 全体傾向

- 例年と同様に「K.満足度」と「J.自分の取り組み(積極性)」を組み合わせたPS指標で比較を行ったところ、「充実派(PS)」が57.6%と最も多く、次いで「あきらめ派(ps)」が25.0%であった。
- H15からのPS指標の変化を見ると、「充実派(PS)」はH15からH17まで継続的に増加しており、H18中ではわずかに減少したが、今回のH18末では再び増加し、最終的にはH18末の調査が最も多いという結果となった。
- 一方、「あきらめ派(ps)」の変化を見ると、H15からH17までは減少傾向にあったが、H18中で増加し、H18末では25.0%と、残念ながらH15に次ぐ多さとなっていた。
- 「充実派(PS)」と「あきらめ派(ps)」の両極が増加しているため、当然のことながら「引っぱられている派(pS)」と「混迷派(Ps)」はいずれも減少しており、「引っぱられている派(pS)」は今までで最も少なく、「混迷派(Ps)」はH17に次ぐ少なさとなっていた。
- 全体を見ると、授業に積極的に取り組んで満足度も高い「充実派(PS)」は継続的に増加しており、非常に良い状態にあると言えるが、残念ながら「あきらめ派(ps)」も増加傾向にあり、わずかではあるが二極化が進んでいた。
- H18中とH18末という同一学年の比較は今回が初めてであるが、この2回の変化を見ると「充実派(PS)」と「あきらめ派(ps)」が増加しており、二極化が半年の間に進んでいることが分かる。

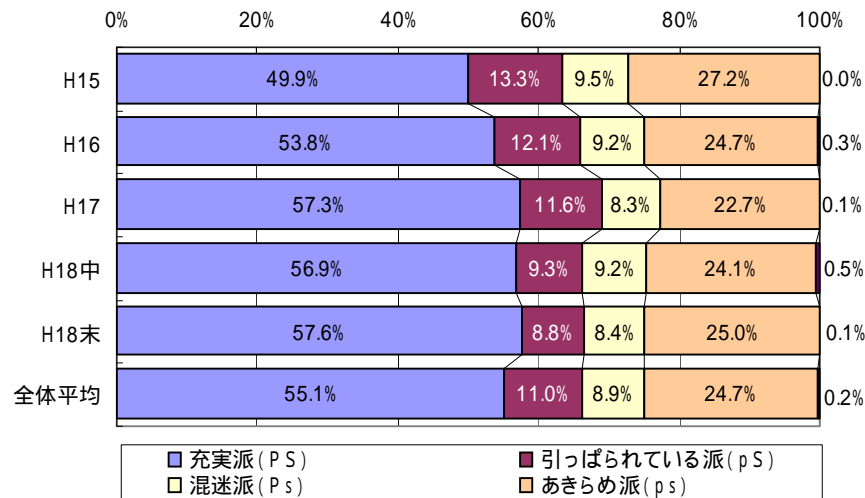
PS指標の内訳

記号	指標	想像される特性	領域の合計
PS (充実派?)	●積極性も満足度も高い	● 授業に積極的に取り組み、結果として満足度も高い。 ● 最も良い状態にあり、達成度も高いと想像できる。	57.6%
pS (引っぱられている派?)	●積極性は低い ●満足度は高い	●それほど頑張らなかつたが、満足している。周囲、教員に引っぱられてうまくいっている。 ●求めるレベルが低いことも考えられるが、授業が期待以上というケースも考えられる。	8.8%
pS (混迷派?)	●積極性は高い ●満足度は低い	●目標が高すぎたことも考えられるが、授業内容が期待はずれ。 ●最も注意すべき状態であり、この層の満足度を上げることが最優先。	8.4%
ps (あきらめ派?)	●積極性も満足度も低い	●授業に期待を持てず積極性が低く満足度も低い。 ●まず、授業に取り組む態度を見直させることが必要。	25.0%

満足度と積極性の関係



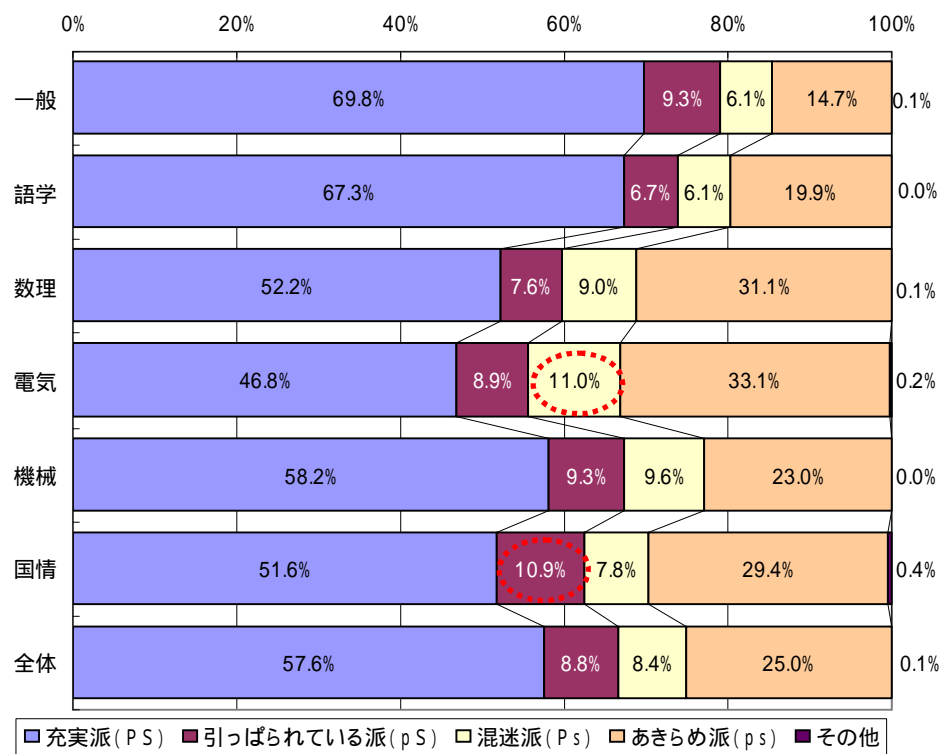
満足度と積極性 経年変化



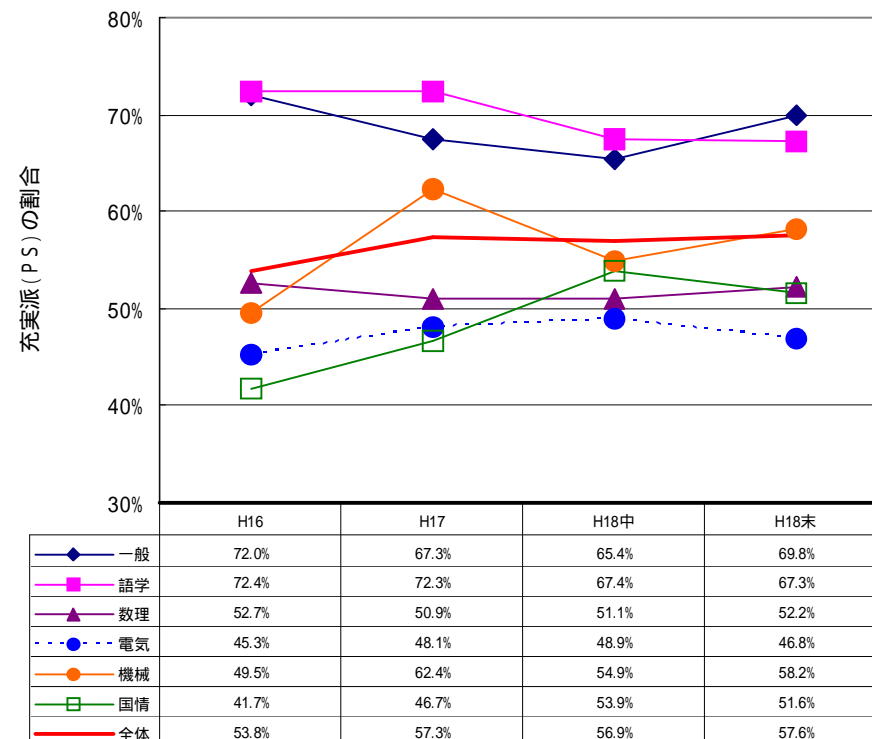
2)部会別 PS指標比較

- 部会別に「充実派(PS)」の割合を比較をすると、「一般」で69.8%と最も多く、次いで「語学」が67.3%であり、この2部会の科目は充実している学生が多いようであった。それに次ぐのが「機械」の58.2%であり、専門系では最も充実している層が多かった。
- そして、「数理」では「充実派(PS)」が52.2%、「国情」で51.6%と続いており、「電気」では46.8%と半数に達しなかった。
- 「あきらめ派(ps)」は「充実派(PS)」と連動しており、特別な点はなかったが、「国情」は「引っぱられている派(pS)」が多く、教員のサポートなどが効いているものと思われる。また、「電気」では「混迷派(Ps)」が多めであり、積極的にがんばっているが満足度が得られないという学生が多いということになり、授業の意味合いや位置付け、学習内容の全体像を示すなどの対応も必要なのではないかと思われた。
- 部会別に「充実派(PS)」だけの割合変化を見たところ、全体としては前項で見たとおり増加傾向にあることが分かる。部会別ではH18中から増加していたのは「一般」「数理」「機械」の3部会であった。そして、「充実派」が最も多いのはこれまでの「語学」から「一般」に変わっていた。また、わずかではあるが「数理」が「国情」を上回る結果となっていた。
- 以前からの経緯を見ると、「語学」では「充実派」が減少傾向にあり、「国情」では増加から減少に転じており、「機械」は変動が激しいといった特徴が見られた。

部会別 PS指標 (満足度と積極性)



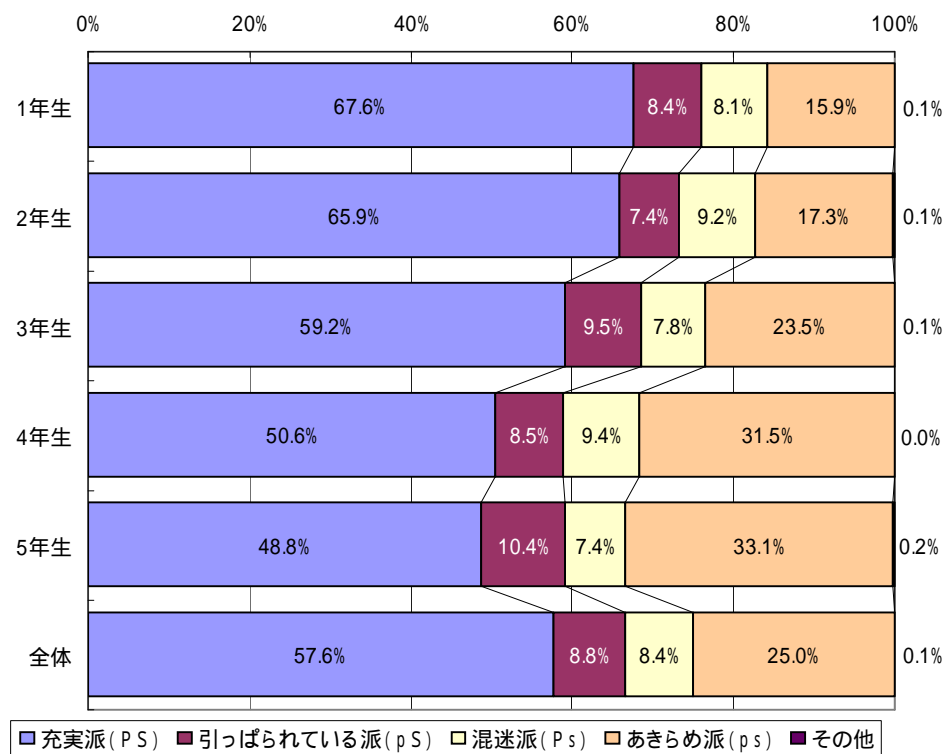
部会別「充実派(PS)」の経年変化



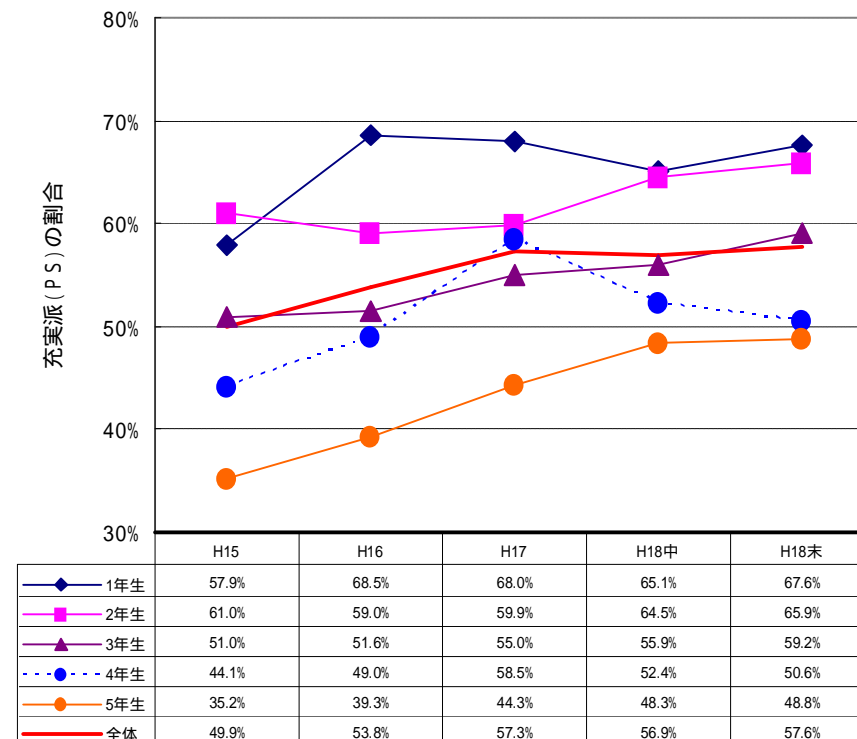
3) 学年別 PS 指標比較

- 学年別の比較で「充実派(PS)」の割合を見ると、高学年ほど減少する傾向にあり、1年生で67.6%であったものが5年生では48.8%と、18.8ポイントの差がつく結果となり、やはり高学年になるほど意識が低下していることが分かった。
- 学年別の差を見ると、1年生から5年生まで継続して「充実派」が減少していたが、4年生で減少が激しく、4年生と5年生の差が小さいという特徴が見られ、4年生の段階で何か大きな変化がありそうであった。
- 学年別の経年変化を見たところ、全体としては前に見ているように「充実派」が増加しており、3年生と5年生ではH15より継続的に増加していた。そして、2年生もH16以降増加しており、構成する学生群は異なるものの、全体としては良い状況にあると言える。
- 特徴が見られたのは1年生と4年生であるが、1年生はH16から減少していたが、H18末で増加しており、2年生を上回る結果となった。「4年生」はH15からH17までは「充実派」が大きく増加してH17には3年生を上回るまでになっていたが、その後減少傾向になり、H18末はかろうじて5年生より多いという結果であった。
- これらを見ると、学年毎の差は基本的には高学年になるほど「充実派」が減少するが、その学年を構成する学生群によって多少の差が現れることも考えられそうであった。また、全体傾向としては「充実派」が増加しており、良い傾向にあると言える。

学年別 PS 指標 (満足度と積極性)



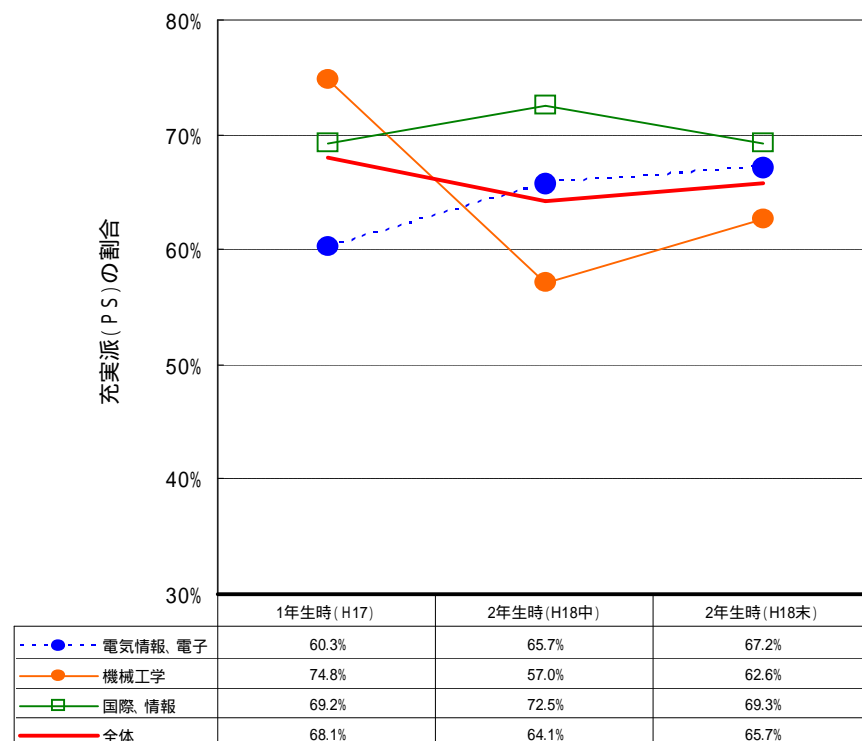
学年別 「充実派 (PS)」の経年変化



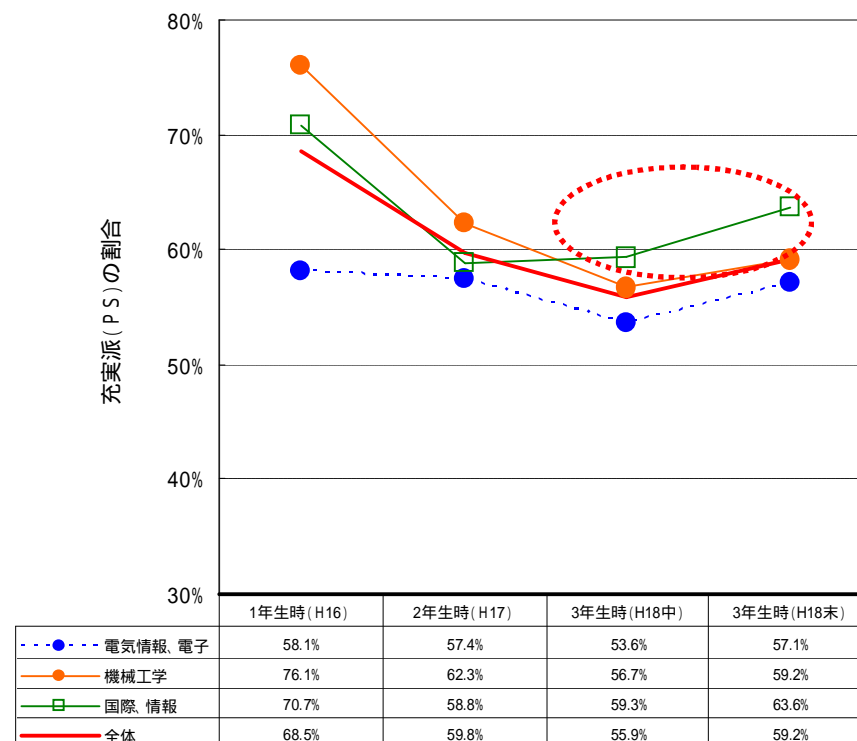
4) 同一学生(学生群)のPS指標比較

- ここでは同一学生で学年が上がるにつれて「充実派」の割合がどのように変わるかを確認した。通常は6分類の部会だけを使って3分類は使わないが、同一学生を追跡するために3分類を使った。また、複数の部会にまたがるものは集計には加えず、H17までは成績データが入っていないデータは無効データとして扱っているため、他の結果と食い違う点もある。
- まず、現2年生の平均を見ると、変化は少ないものの1年生から2年生の間にかけて「充実派」が減少しており、2年生の期末でわずかに増加が見られた。そして、部会別には「機械」の変動が大きく、1年生から2年生の間にかけて大きく減少していた。
- 現3年生の変化は分かりやすく、全体平均では1年生から2年生、3年生の間にかけて「充実派」が徐々に減少し、3年生の期末でわずかに増加していた。部会毎の変化も「電気情報、電子」「機械工学」は全体と同じ変化であった。しかし、「国際、情報」では2年生から3年生の間にかけて「充実派」が増加しており、3年生の期末にかけて更に増加するという傾向が見られた。
- これを見ると現3年生の「国際、情報」の科目では、3年生になる段階で授業に積極的に取り組み、満足度が上がるような何らかの変化があったことが予想される。

同一学生(現2年生)の「充実派(PS)」の経年変化

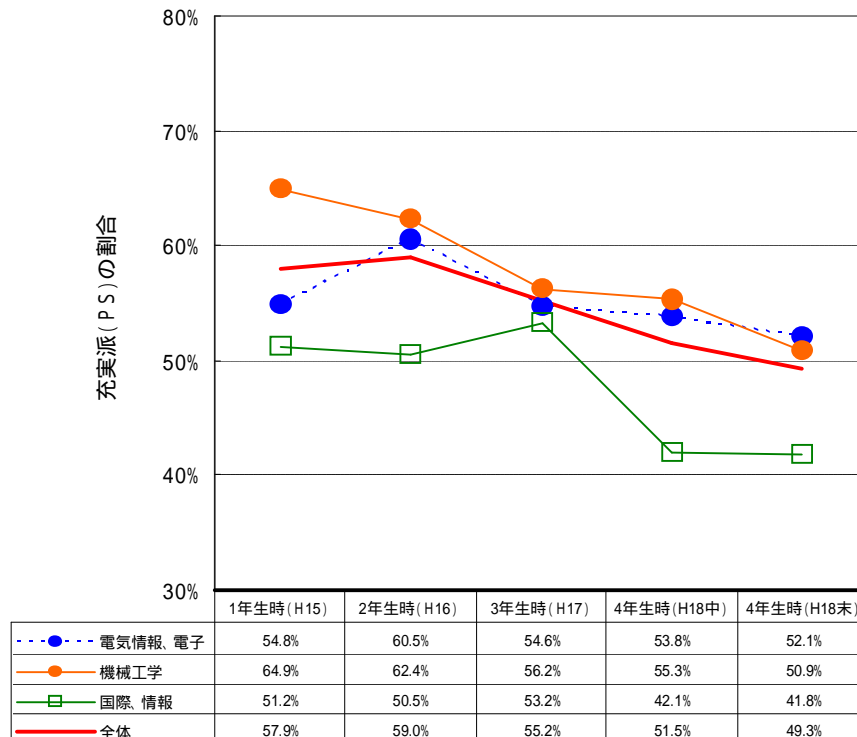


同一学生(現3年生)の「充実派(PS)」の経年変化

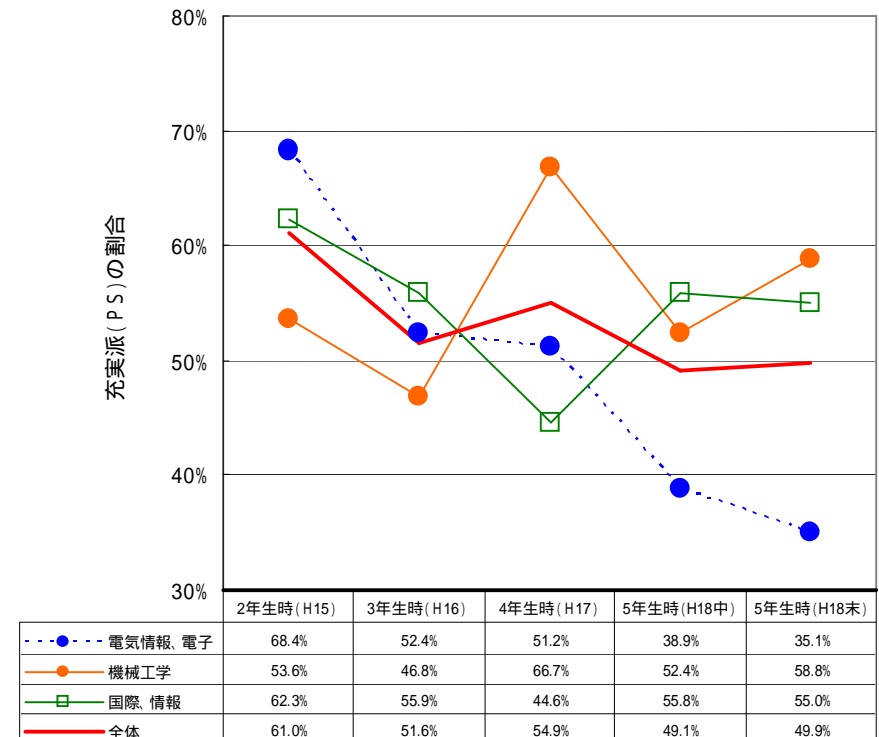


- 現4年生の全体の平均を見ると、1年生から2年生にかけてわずかに「充実派」が増加したものの、その後は継続的に減少しており、基本的に高学年ほど「充実派」が減少するという大きな傾向に従っていた。
- 部会別に見ると「機械工学」は1年生から徐々に「充実派」が減少していたが、「電気情報、電子」は1年生から2年生にかけて増加してその後減少に移っており、「国際、情報」は2年生から3年生にかけて増加してその後減少に移るといった特徴が見られた。これを見ると、増減の原因は部会によって違いがあるとも考えられる。
- 現5年生の変動の大きさは非常に特徴的であり、全体の平均では4年生の段階で「充実派」の増加が見られた。これは「機械工学」の動きの影響が大きい、「機械工学」での「充実派」の増減は特徴的であり、担任が替わるなど大きな変化があったのではないかとと思われる。
- そして、「電気情報、電子」では継続的に大きく「充実派」が減少していた。他の学年ではH18中とH18末の半年間ではそれほど大きな変動はなかったが、ここでは半年間のうちに大きく減少している点が特徴的であった。また、「国際、情報」では4年生から5年生にかけて「充実派」が大きく増加しており、この要因にも注目すべきだと言える。

同一学生(現4年生)の「充実派(P.S)」の経年変化



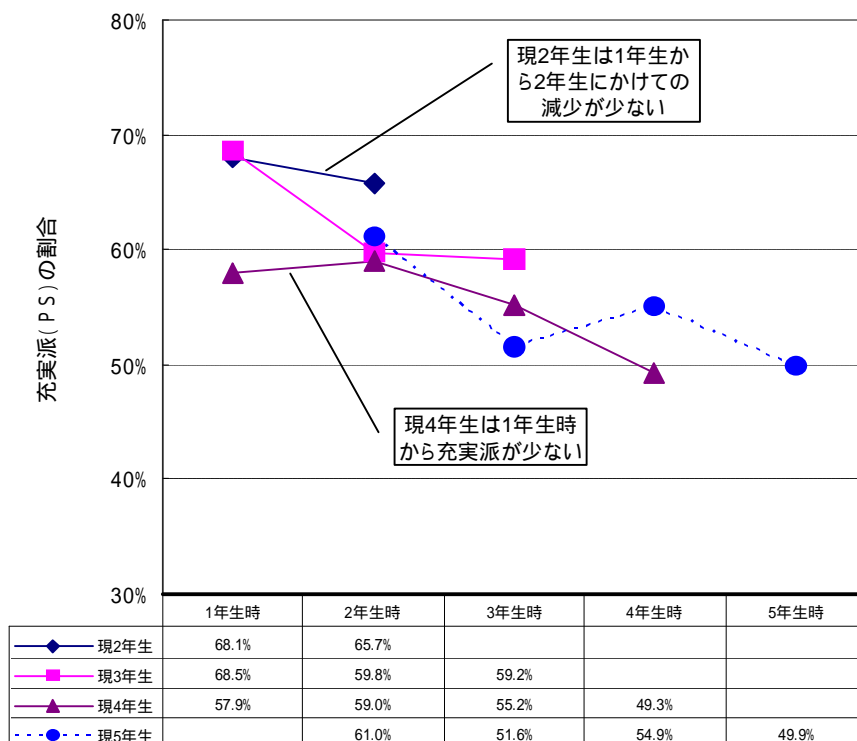
同一学生(現5年生)の「充実派(P.S)」の経年変化



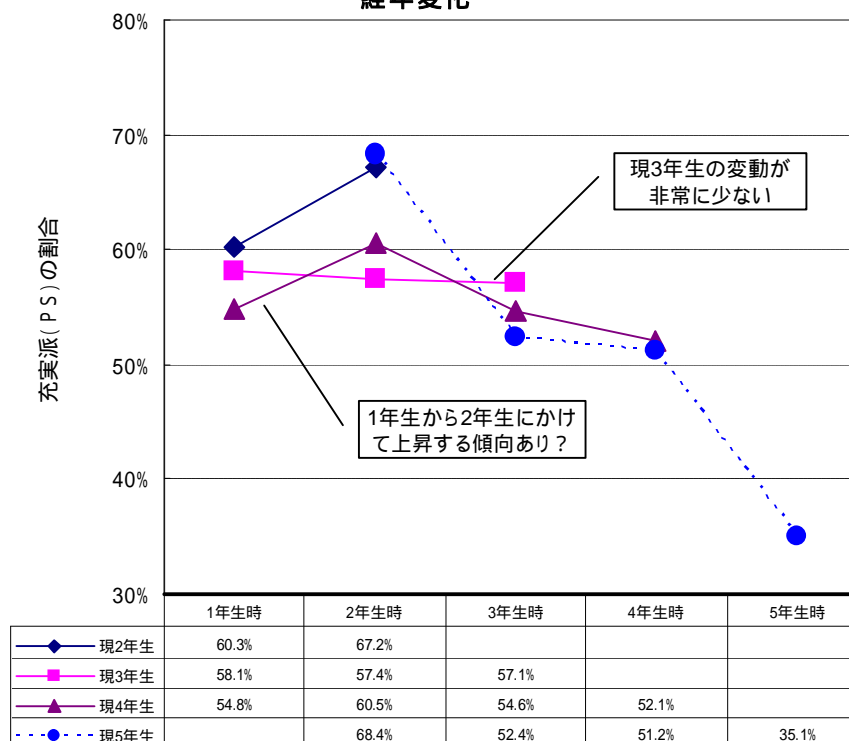
5) 同一学生(学生群)の同学年時PS指標比較

- 入学年度が違う学生が同じ学年の時にどのような差があったのかを「充実派」の割合で比較した。なお、H18から同一学年で2回の調査を行っているが、それらに関しては学年末の結果を比較に使用した。
- まず、全体の比較を見ると、他でも確認したように大まかには高学年ほど充実派が減少する傾向が確認できた。しかし、学年によって細かい差が見られ、特に「現4年生」は1年生の時点から「充実派」が少なく、現在の在在学生の中では最も良くない状況にあると思われる。
- 一方、「現2年生」はまだ2回のデータしかないが、現在の満足度は高く、このまま良い状況で推移するのではないかと予想できる。
- 「電気情報、電子」では「現2年生」と「現4年生」の2つの学生群で1年生の時点では充実派が少ないものの、2年生で増加する傾向が見られた。これは2年生の段階で専門分野が増えたり、興味を持てるような科目があるためではないかと思われる。
- 現3年生は「充実派」の割合がほとんど変わらないという特徴が見られるが、それ以外は2年生以降、「充実派」が徐々に減少する傾向にあった。「電気情報、電子」は1年生から2年生にかけて特徴があるが、それ以降は全体の基本的な傾向と同様に高学年ほど前向きさが失われる傾向にあり、前記の「現3年生」以外には特別な傾向は見られなかった。

同一学生の「充実派(P.S)」の学年時別経年変化

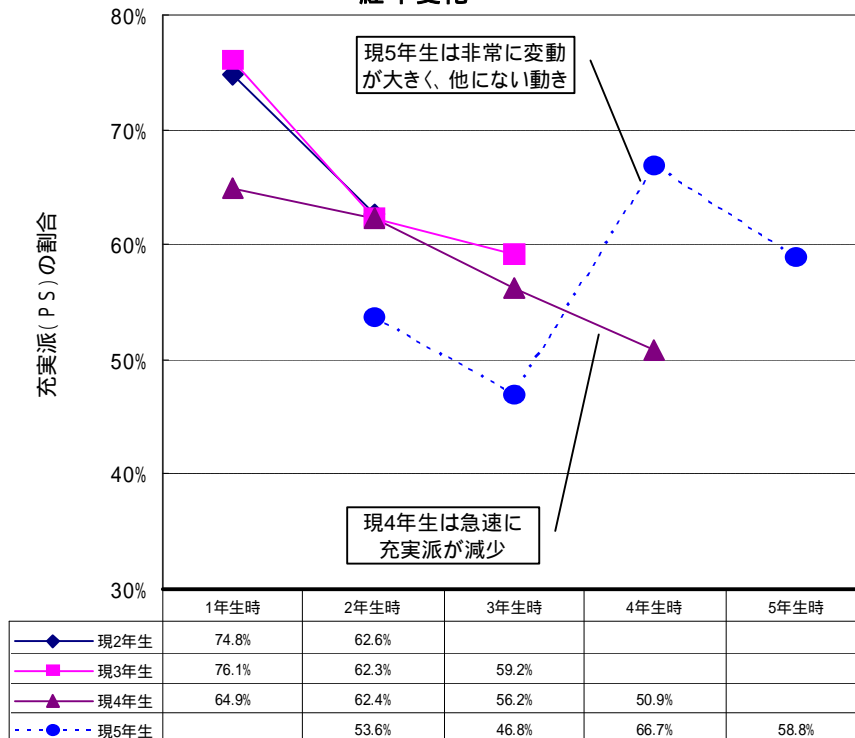


同一学生(電気情報、電子)の「充実派(P.S)」の学年時別経年変化

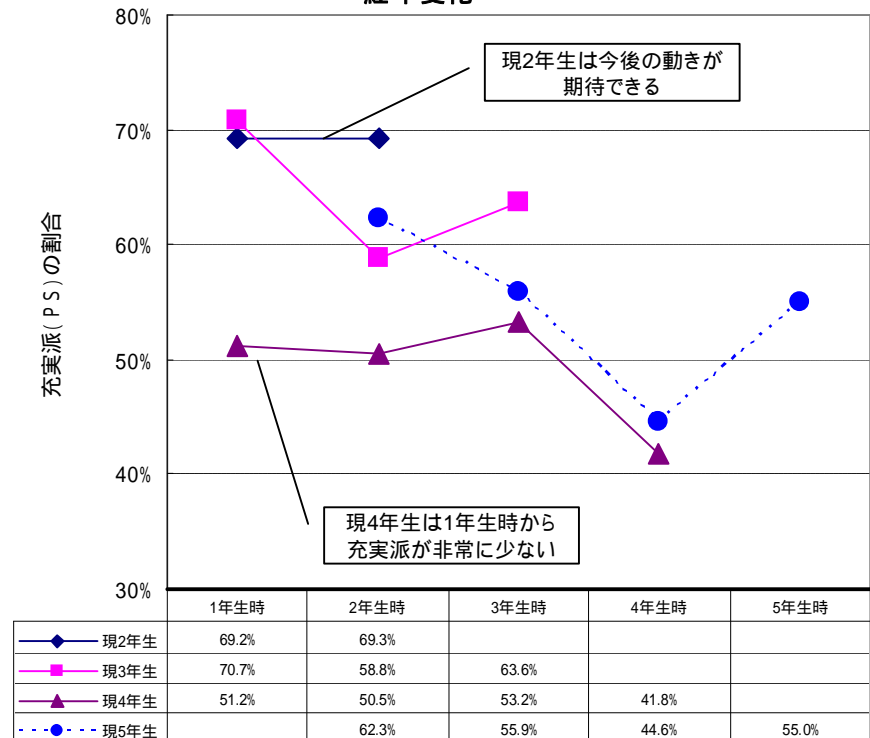


- 「機械工学」は「現5年生」の動きが非常に大きく、結果的に2～3年生時よりも現在の方が「充実派」が増加している。学年が上がるほど充実してきたのはこの学生群(機械工学の5年生)だけであり、この動きには非常に興味を持たされるものであった。
- その他の動きは高学年ほど充実派が減少するという基本的な流れに沿っていた。特に「現4年生」は1年生の時点で「充実派」が少なく、4年生になるまで一定の割合で減少しており、5年生の段階でどの程度まで下がるのかが気になる動きであった。
- また、「現2年生」と「現3年生」の1年生から2年生にかけての動きも大きく、今後の動きが気になると言える。
- 「国際、情報」は学年群によって様々な動きであり、一定のルールらしきものが見えにくかった。
- 「現2年生」は1年生から2年生の間の変動が少なく、「現3年生」も3年生時に充実派が増加しており今後に期待できそうであった。
- 一方、「現4年生」は他と同様に1年生の時点から「充実派」が少なく、2年生、3年生と大きく変わらなかったが、4年生で大幅に減少した。そして、「現5年生」も4年生までは学年が上がるほど「充実派」が減少したが、5年生の段階で急に増加しており、5年生が充実した1年であったと思われる。

同一学生(機械工学)の「充実派(P.S)」の学年時別経年変化

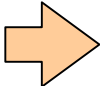



同一学生(国際、情報)の「充実派(P.S)」の学年時別経年変化



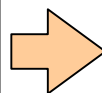
< 8 > 全体のまとめ

1) 全体に関して

<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">今回の結果</p>	<ul style="list-style-type: none"> □ 授業に満足している学生は66.5%、興味を持っている学生は69.1%、積極的に取り組んでいる学生は66.1%であり、7割弱の学生はしっかりと授業に取り組んでおり、満足もしていると言える。 □ 「質問対応」「教材類の評価」「課題類の評価」などの授業前後の準備やフォローの評価は高いが、「話し方」「板書や説明」などの授業のテクニックの評価がやや低めであった。 □ 上記のように相対的に評価の低い項目もあるが、授業の進め方に関しては65%～75%程度は良い評価であった。この割合が妥当と考えるかどうかの検討は必要であるが、下記にあるように長期的に評価が低下しているものがあり、それに対する対策は必要と言える。 		<p style="text-align: center;">今回の調査で分かったこと・仮説</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 全体の約7割の学生はやる気もあって満足もしているが、3割が不満を持っており、授業の評価も厳しい。この3割の実態を探ることが今後の課題となる。 2. 授業への興味、積極性は良くなる傾向にあり、予習・復習の時間も延びているなど、自己評価のデータを見る限りは学生のやる気が増していると言える。 3. 授業の評価は厳しくなる傾向にあり、特に質問対応、話し方、板書や説明など、授業中のテクニックに不満を持っている可能性がある。 4. 調査票を無記名化にすることで授業の評価が厳しくなることが確認できた。そして、その後は横這い状態であり、半年間では評価の変化が小さいことも確認できた。
<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">H18中からの変化</p>	<ul style="list-style-type: none"> □ H18中からの半年の変化は全体で見ると小さく、「満足度」「授業への興味」「取り組み姿勢」はほぼ横這いであった。同一学生の半年間の変化なのでそれほど大きな動きがあるとも思えず、妥当な状況だと言える。 □ 全体的に動きは小さかったが、「予習・復習」はこの半年間でハッキリと長くなっていった。単に中間と末の差である可能性もあるが、学生がやる気を出しているとも考えられるため、しっかりとした検証を行うべきと言える。 □ その他、「質問対応」の評価は半年間で大きく下がっていた。この評価は下記にあるように継続的に低下が続いており、対策が必要と言える。 □ また、「課題類の評価」は半年間でハッキリと上がっていた。これが何らかの改善によるものなのか、検証を行う必要があると言える。 		<p style="text-align: center;">今後の課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 「学生のやる気が本当に増しているのか?」「無記名化により教員に厳しく、自分に甘い評価になっているのではないか?」といった点をインタビューなどで確認する。 ■ 「3割が授業に不満を持っている」という数字をどう受け止めるのか? 実態を現しているものなのか? といった点の検討、検証を行う。 ■ 年々、授業の評価が厳しくなるが、これまでに実施した授業の改善などが数値でどのように変化しているかを検証しながら、今後の改善策を考える。
<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">長期的な傾向</p>	<ul style="list-style-type: none"> □ 「満足度」はH15からH17まで上昇していたが、調査票を無記名化したH18中に低下し、今回のH18末には横這い状況であった。 □ 「質問対応」の評価は高いが、H16から継続的に低下が続いている。また、「教材類の評価」「話し方」「授業の工夫」の評価も低下が続いている。 □ 上記の満足度や授業の進め方に関しては、H18中の無記名化の影響があると思われるが、その影響は出きっており、今後は本音の評価として経年変化を見ることができると思われる。 □ 「授業に対する興味」と「取り組み姿勢」という自己評価に無記名化の影響はなく、H18中～H18末は今までで最も高いレベルにあり、学生の前向きさが感じられる結果であった。 		

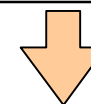
2)部会別に関して

今回の結果	<ul style="list-style-type: none"> □ 「一般」は満足度が最も高く79.2%が満足しており、次いで「語学」「機械」「国情」「数理」と続き、最も低かったのは「電気」の55.7%であり、大きな差がついていた。 □ 「一般」は「授業への興味」「自分の取り組み」も良い状態にあり、H18末に「語学」を上回る項目が増加して、非常に良い状態にあると言える。 □ 「電気」は全ての項目で最も低かったが、特に「話し方」は45.3%が分かりにくいと感じており、「話し方」の評価と「満足度」の評価の関連が見られた。 □ 一方、「予習・復習」は満足度や他の指標との関連性が薄く、「数理」のように最も時間を割いているのに満足度は非常に低いというものも見られた。
H18中からの変化	<ul style="list-style-type: none"> □ H18中までは満足度をはじめとしてほとんどの項目で「語学」が最も評価が高かったが、今回のH18末には「一般」が「満足度」「授業への興味」「自分の取り組み」など、多くの面で「語学」を上回った。 □ また、「一般」は「話し方」の評価の高さが目立つが、H18中も「話し方」だけは「語学」を上回っていた。ここより「話し方」の重要性がうかがえる。 □ 「一般」と共に「機械」もH18中から評価が上がっており、その他の部会はほとんど低下傾向にあった。 □ 上記の2部会以外はH18中からH18末の半年間は低下傾向であったが、この半年間の変化の実態がどのようなものであるかをインタビューなどで確認しておく必要があると言える。
長期的な傾向	<ul style="list-style-type: none"> □ 「国情」はH16からH18中まで長期的に上昇傾向にあった。他の部会の科目では低下傾向が見られるものが多い中、「国情」が継続的な上昇を見せたのは何らかの理由があると思われる。 □ 「一般」「機械」は上記のように短期的には上昇していたが、「語学」「数理」「電気」はほぼ継続的に評価が下がっていた。 □ 「語学」は満足度をはじめとして全体的にスコアが高いが、継続的な低下で今回のH18末には「一般」を下回る結果となっている。また、「電気」は最も満足度が低く、「数理」はそれに次ぐものであり、それが更に低下を続けている点は大きな問題であり、早急に実態を確認する必要があると言える。



今回の調査で分かったこと・仮説

1. 長期的な流れから、「国情」が良い状態で、「語学」「数理」「電気」に課題がありそうであった。特に評価が高い「語学」の長期的な評価低下が気になる点であった。
2. 「話し方」の評価と「満足度」には関係がありそうであった。この「話し方」は単なる話法ではなく、「教員が言っていることが理解できるかどうか？」という意味合いと考えられる。
3. 勉強時間との関連では、「数理」は多くの時間を充てて勉強をしているにも係わらず、理解が追いつかないため満足度が低い。「一般」はあまり勉強していなくても理解が進むため満足度が高い」といった関係がありそうであった。

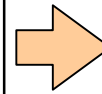


今後の課題

- 部会別に特徴が見られたが、これが「部会毎の改善などによるものか?」「その時点での学生群によるものなのか?」の検証を行う必要がある。
- 上記に関連するが、「国情」の継続的な改善傾向と、「語学」「数理」「電気」の継続的な低下に関しての要因を探る必要があると言える。
- 「満足度」を左右する要因として「話し方」を上げることができるが、この関係をしっかりと把握し、これまでの改善策の結果検証を行う必要がある。当然、他の改善策の検証も行う必要がある。

3) 学年別に関して

今回の結果	<ul style="list-style-type: none"> □ 「満足度」は高学年ほど低くなる傾向にあり、1年生で満足していた割合は75.9%で、5年生が59.3%であった。ただし、今回のH18末には4年生と5年生の差はほとんどなかった。 □ 「満足度」以外の項目を見ると、1～2年生では逆転するものも多かったが、それ以外の項目は高学年ほど厳しい評価になっていた。 □ H18中は1年生と2年生に大きな差がなく、ほぼ同じ評価であった。しかし今回のH18末には、「授業への興味」と「満足度」の2点は1年生の方が評価が高かったものの、その他の授業の評価の面では明らかに2年生の評価が高かった。 □ 学年別の特徴を見ると、5年生は「授業への興味」と「自分の取り組み」のスコアが低く、あまり前向きさが感じられず、3年生は「予習・復習」をしている割合が最も低いという傾向が見られた。
H18中からの変化	<ul style="list-style-type: none"> □ どの学年もH18中からH18末にかけての変化は小さく、ほぼ横這いであった。同一学年の半年間の変化と考えると、変化が小さいのは妥当だと思われる、H19以降の結果に注目したい。 □ H18中からの「満足度」の動きを見ると、2年生と3年生はほぼ横這い、1年生、5年生はわずかに上昇、4年生はわずかに低下という結果であった。 □ 前出のように唯一「満足度」が低下した4年生では、他の項目も全て低下しており、取り組み姿勢や授業の進め方などの評価も下がっていた。
長期的な傾向	<ul style="list-style-type: none"> □ H15からの傾向を見ると、2年生と3年生は横這いの時期もあるものの、下がることはなく、大きな流れとしては上昇傾向にあった。また、5年生はH17からH18中にかけて満足度が低下したものの、それ以外は上昇傾向にあった。この唯一の低下も無記名化の影響である可能性がある。 □ 一方、1年生はH15からやや上昇傾向にあったが、H18中に大きく低下し、H18中からH18末にかけては上昇していた。そして4年生はH15からH17まで上昇し、そこから低下に転じていた。 □ 学年毎に細かい動きはあるが、大きな流れから見ると5年生も一部の例外を除いて上昇を続けており、良い傾向にあると言える。



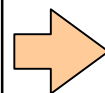
今回の調査で分かったこと・仮説
<ol style="list-style-type: none"> 1. 高学年ほど満足度、授業の評価が共に低下する状況が確認できた。ただし、1年生と2年生で逆転することもあることが分かった。 2. 1年生は授業に興味を持っているものの、高専の授業の進め方に慣れておらず、ついていけないという状況があるのではないかとと思われる。 3. 3年生は予習・復習をしておらず、4年生は継続的に満足度、授業評価が低下する傾向にあった。 4. 5年生に興味と積極性が低い傾向が見られた。しかし、無記名化の影響があるものの、継続的に満足度、授業評価が上昇する流れが見られた。



今後の課題
<ul style="list-style-type: none"> ■ 高学年ほど満足度や授業評価が下がる理由として、「慣れ」などが考えられるが、それをインタビューなどでしっかりと聞き出す。 ■ 上記に関連して、1年生と2年生の意識がどのように異なるのかも確認する必要がある。 ■ 学年別の経年変化は、その時点の学生群の特徴によって大きく異なると思われるが、5年生では継続的に良い方向に進んでいる。これが改善によるものなのか、学生群によるものなのかを確認する必要がある。また、5年生にこれまでの意識変化を聞くことでヒントが見えてくる可能性がある。

4) 達成度に関して

全体傾向	<ul style="list-style-type: none"> □ 充実派は57.6%とH18中よりわずかに増加したが、あきらめ派も微増して、わずかに二極化が進んでいた。 □ H18中まで「語学」で充実派が最多であったが、今回のH18末には「一般」が上回った。次いで「機械」「数理」「国情」「電気」の順で、「電気」の充実派は46.8%と半数に満たなかった。 □ 高学年ほど充実派が少ないが、経年変化を見ると2、3、5年生で年々充実派が増加する傾向が見られた。
学年毎の状況	<ul style="list-style-type: none"> □ 2回の調査の比較だけであるが、他の在学生と比較すると現2年生が最も良い状況にあるようであった。 □ 一方、上記と同様に、充実派の推移で見ると、現4年生が最も良くない状況にあるのではないかとと思われる。
部会毎の状況	<ul style="list-style-type: none"> □ 「電気情報、電子」は1年生から2年生にかけて充実派が増加する傾向が見られたが、その後は高学年ほど充実派が減少していた。 □ 「機械工学」は現5年生だけは特徴的な動きであったが、その他では高学年ほど充実派が減少する傾向が見られた。 □ 「国際、情報」は高学年で充実派が減少する傾向がいくつか見られたが、学年によって動きがバラバラであり、しっかりとした傾向はうかがえなかった。
その他の特徴	<ul style="list-style-type: none"> □ 「機械工学」の5年生の充実派は、2年生から5年生にかけて増減をくり返しているが、結果的には5年生の段階で2年生の時よりも充実派が増加していた。高学年の方が充実派が多かったのはこの学生群だけであった。 □ 「国際、情報」の現5年生も4年生時に比べて急激に充実派が増加しており、充実した5年生の1年間を過ごしているようであった。



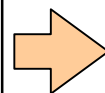
今回の調査で分かったこと・仮説
<ol style="list-style-type: none"> 1. 充実派が増加していたものの、あきらめ派も増加して二極化が進んでいる。 2. 今まで「語学」で充実派が最多であったが、今回のH18末に「一般」の方が上回った。 3. 現2年生が良い状態にあり、現4年生が課題を抱えているようであった。 4. 「国際、情報」は学年による特徴が弱く、その時の学生群によって雰囲気が変わっているものと思われる。特に現5年生に特徴がありそうであった。 5. 「機械工学」でも現5年生で高学年になって充実派が増加するという特徴が見られた。



今後の課題
<ul style="list-style-type: none"> ■ 充実派とあきらめ派の二極化が実際に進んでいるのかは重要なポイントであり、しっかりと検証しておく必要がある。 ■ 「良い状態である現2年生と良くない状態である現4年生」という仮説を立てたが、これが実際にどうなのかを検証し、各々の特徴を把握しておくべきと思われる。 ■ 「国際、情報」の学生群毎に異なった雰囲気ができる過程と、「機械工学」の現5年生の状況をインタビューなどで確認しておく必要がある。

5)その他に関して

創造設計、実験に関して	<ul style="list-style-type: none">□ 授業全体の平均と比べると、「興味」「自分の取り組み」「満足度」といった自分自身の姿勢に関する項目は創造設計、実験のスコアの方が高く、授業の進め方に対する評価は他の授業より厳しいが、興味を持って取り組んでいるようであった。□ 部会別では「機械」が「創造設計、実験」に積極的に取り組み、満足度が高く、「国情」のスコアが全般的に低かった。□ 1年生よりも2年生の方が積極的に取り組んでおり、授業の進め方に対する評価も2年生が高く、3年生の低さが目立っていた。□ 経年変化ではH17から3回分の比較しかできないが、3回の間に差はほとんど見られなかった。
インターンシップに関して	<ul style="list-style-type: none">□ 学校での実習説明、事前指導は6割以上が役に立ったと答えていたが、イントラでの企業案内にはやや改善の余地がありそうであった。□ 実習中の姿勢は非常に良く、「挨拶をして礼儀を守れた」は88.3%、「積極的に取り組めた」は84.4%と高かった。□ 企業の指導内容に対しては81.3%が適切と答えており、実習期間に関しても69.5%が適切と答えていた。□ 発表会の自己評価は高く、80.5%が資料を適切に作成できており、74.3%が適切に発表できたと答えていた。□ 実習経験の役立ちに関して、「新しい知識を得ることができた」は78.2%、「社会や仕事への考えが変わった」は74.2%であった。□ 「作業内容」には63.2%が満足しており、「実習全体」には72.7%が満足していた。



今回の調査で分かったこと・仮説

1. 創造設計、実験は、授業の進め方への評価はそれほど高くないが、興味を持って積極的に取り組んでいるようであり、満足度も高かった。
2. 1年生よりも2年生の方が積極的に取り組んでおり、1年生はやる気はあるものの理解が追いついていないのではないかと思われる。
3. インターンシップへの取り組み姿勢は非常に良く、企業の指導にも満足しており、知識が身についたと感じており、約7割が満足していた。
4. 学校での事前説明や指導には改善の余地がありそうであり、イントラネットによる事前の情報提供も大いに見直すべき点がありそうであった。



今後の課題

- 創造設計、実験では進め方の評価はやや低いものの、興味を持って積極的に取り組んでいる。この積極性が何によるものかを探っておく必要があると思われる。
- インターンシップの満足度は授業の満足度よりも高いものの、3割は不満を持っていた。一般企業に協力を得るものであり、この不満の要因はハッキリしておくべきと思われる。
- また、インターンシップの事前説明や指導、イントラネットでの情報提供に関しての見直しも必要と思われる。

6) 分かったことのまとめ

	分かったこと
全体	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 全体の約7割の学生はやる気もあって満足もしているが、3割が不満を持っており、授業の評価も厳しい。この3割の実態を探ることが今後の課題となる。 ◆ 調査票を無記名化することで授業の評価が厳しくなることが確認できた。そして、それ以降はほぼ横這い状態であることより、無記名化の影響は出きったと思われる。また、この半年間では評価の変化は小さいことも確認できた。 ◆ H18年度は初めて中間と期末という2回の調査を行った。結果として全体的にはそれほど大きな変化はなかったが、部会別に変化が確認できる部分もあり、中間調査の結果を踏まえて各部会が何らかの修正を行ったことも考えられる。
部会別	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 長期的な流れから「国情」が良い状態で、「語学」「数理」「電気」に課題がありそうであった。 ◆ 特に評価が高い「語学」の長期的な評価低下が気になる点であった。
学年別	<ul style="list-style-type: none"> ◆ これまでと同様に高学年ほど満足度や授業の評価が共に低下する状況が確認できた。ただし、1年生と2年生で逆転することもあることが分かった。 ◆ 3年生は予習・復習を行っている学生の割合が少なく、4年生は継続的に満足度、授業評価が低下する傾向にあった。 ◆ 5年生に興味と積極性がやや低い傾向が見られた。しかし、無記名化の影響があるものの、継続的に満足度、授業評価が上昇する良い流れが見られた。
達成度	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 充実派が増加していたものの、あきらめ派も増加して二極化が進んでいると思われる。 ◆ 今まで「語学」で充実派が最多であったが、今回のH18末には「一般」の方が上回った。 ◆ 「機械工学」の現5年生で、高学年になって充実派が増加するという特徴が見られた。
その他	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 創造設計、実験は授業の進め方の評価はそれほど高くないが、興味を持って積極的に取り組んでいるようであり、満足度も高かった。 ◆ インターンシップへの取り組み姿勢は非常に良く、企業の指導にも満足しており、知識が身についたと感じており、7割が満足していた。

平成18年度

KTC授業アンケート調査結果[報告書]

発行日	平成19年5月7日
発行者	金沢工業高等専門学校
調査票設計・分析	有限会社 アイ・ポイント
編集	金沢工業大学企画部CS室

無断複製厳禁

再生紙を使用しています